名探偵コナン vs デュララララ!!

くるる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
名探偵コナン　ｖｓ　デュララララ！！

【Ｎコード】
Ｎ３５３７Ｍ

【作者名】
くるる

【あらすじ】
池袋に買い物に出かける新一と蘭と園子。暗躍する折原臨也。引き起こされる惨劇。疾走する首なしライダーと追う平次。京極真は池袋最強の男を求めて街を彷徨うが、当の本人は風邪気味で……。『名探偵コナン』と池袋を舞台にした歪んだ恋の物語『デュララララ！！』のクロスオーバー。俺得だけを追求した内容です。頭脳戦要素や事件まで起きたので推理タグにしました。結構キツイ台詞も出てくるクロスオーバーなので、苦手な方、嫌気がした方、Ｂａｃｋお願いします。

※幕間４　破壊衝動をｕｐしました。ほぼ無糖ですが静ヴァロぎみで、本筋を知らなくても読める内容にしてみたので、この２人が好きな方はどうぞご試食して頂きたく思います。

プロローグ（前書き）

かなりおっかなびっくりですがやってみます。。

プロローグ

１００万人が行き来する街、池袋。
煌びやかな繁華街と人の心の闇を飲み込んで肥大化する街。この街では一日の間に多くの人生の栄枯盛衰が起こり、様々な情報や人物、欲望に溢れている。

尚、その中には黒バイクこと首なしライダーのような都市伝説も含まれる。

そして、その黒バイクの持ち主セルティ・ストゥルルソンは……。

（……工藤新一発見？　ああ、名探偵のだよな）

ダラーズＭＬ（メーリングリスト）で送信された写メを見て、黄色のヘルメットをかしげていた。

ダラーズとは池袋で勢力を持つチームカラー無色のカラーギャングである。ネット上で拡大した異色の存在で、サイトに登録するだけで参加出来るという性質上、横のつながりは非常に希薄。現実の構成員をちゃんと把握している者すらいない。カラーギャングとは言っても小学生からサラリーマンや主婦といったように年齢や主義主張の層も幅広く、セルティも登録している。

そのＭＬに工藤新一の目撃情報が出たから驚いたのだ。俳優の羽島幽平やアイドルの聖辺ルリなら分かるのだが。

たまにテレビに出てきたけど、アイドルみたいな扱いだな。

でも、テレビを見る限り根は素直そうな子だし、事件もないだろうからそっとしてあげればいいのに。

おっと、今日の依頼人は随分と急いでいたよな。早く行かないと。

今日の仕事を片付ければしばらくは休みがとれる。

また新羅と旅行に行けるかな？

同居している恋人の顔を思い出して惚気た彼女は、漆黒のバイクを池袋の街へ走らせた。

旅行の前の平凡な日常のはずだが……。彼女はこの日、件の人物を中心とした事件に大きく巻き込まれていく事など知る良しも無かった――――――

プロローグ（後書き）

とは書きましたが、どうやって巻き込まれるかはこれから考えます。

初クロスオーバーですが、宜しくお願いします！

第1話　暗中飛躍（前書き）

やっちゃった……（汗）
ついでに書き忘れた事を少しだけ修正しました。

第1話　暗中飛躍

阿笠邸

「ねえ、新一！　今週の週末、池袋に行かない？」
「どうしたんだよ急に」

本当に急な蘭の申し出に、新一は驚いた。
紆余曲折あって、組織も潰して体が戻った新一だったが、告白はしていない。何かとタイミングが悪いのだ。
だから、これほど仲が良くても理由なしのデートは今までなかったのだ。

そしてその様子を、灰原哀こと宮野志保は「そういった話なら隣の家ですればいいじゃない」と睨んでいた。だが、すぐに面倒臭くなって、新一から薦められた推理小説に目を落とす。

「あのね、園子が今度オープンする雑貨屋の人とチャットで知り合って、割引してくれるんだって！」
嬉しそうに言う蘭の言葉。新一はチャットのオフ会に起きた事件を

思い出した。

「あいつも懲りない奴」

「大丈夫よ。今度は女の人で相手も1人だって言うし。どんな相談も聞くいい人なんだって」

「へぇ……でも池袋って事件多いぜ？」

チーマーだの、ヤクザだの、首なしライダーだの。最後のは都市伝説だけど。蘭の奴、それが怖くて夜中に電話して来たじゃねーか。

「もし巻き込まれたら、守ってくれる？」

「え……あ、おう」

無意識で上目遣いをした蘭に頬を少し染める新一。蘭はにっこりと微笑み、志保は小説を顔に押し当てた。「見てられない」という意味らしい。もっとも冷静に考えれば守るのは蘭になるのだろうが。

「志保さんはどうします？」

ひょっこりと顔を出した蘭が志保に聞く。さっきまで新一の隣にいたはずの蘭に驚きつつ、やや冷ややかな視線を浴びせた。

「随分と余裕ね」

「？」

だが、その視線は蘭には通じず。却って志保は自分に呆れかえった。それから笑みを作って言う。

「えっと、その日なら私は無理よ。研究所に顔出さなきゃいけないの」

「そう……ですか」

事実だけ伝えて話を終わらそうとして志保だったが、ふと気がかりを覚えて訊ねた。

「ごめんね。ところでその女の人はなんて名前なの？」

「ＨＮ（ハンドルネーム）しか分からないんですけど……確か、奈倉さんって」

奈倉と聞いて、志保は一瞬だけ目を見開いた。

■■■■■

「復活した高校生探偵、工藤新一……ここまでする必要があったの？」

矢霧波江は正面に立つ折原臨也（おりはらいざや）に声を掛けた。その男は華奢な美青年であるが、どこか口元に邪気を漂わせている。彼女も冷徹だと周囲から思われていたが、この笑みにはどうも慣れない。

ちなみに奈倉とは彼らの「騙す時用」のＨＮだ。

「とりあえずこのクソったれな駄文を読んでくれている人の為に言っておくと、俺は人間が好きだ。愛してる」
「聞き飽きたわよ、その気持ち悪い台詞。ってか読んでくれている人って何？」
そんな波江の呟きを臨也は流して先を続ける。
「俺は人間が好き。だから人間の色んな面を知りたいんだ。工藤新一ってどんな人か知ってるかい？」
「正義感が強い上に気障な言い回しでファンも多いんでしょ。特に詳しく知っている訳じゃないわよ」
テレビを見れば分かるような言葉を並べた波江に、臨也は満足そうに頷いた。
「まあ、そんな所かな。犯罪を憎み、どんな事件でもあっという間に解決してしまう名探偵。しかも、博識な上に何ヶ国語も話せて機械にも詳しくて機関銃にもびびらない馬鹿みたいな勇気もあって音痴な癖に絶対音感でスポーツ万能で大体のものは操縦出来るし拳銃だってお手の物。容疑者に自殺をさせないという信念も持っている。
これで少年のような一面もあるって言うんだから、まるで黒歴史編纂室長だね。まあ、これだけでも充分に面白い。
例えば———そうした人間が明確な殺意を持って人を殺す姿を見れればそれだけでもね。でも彼は多分それだけでは終わらない」

どこまでも悪趣味な男だ。波江は口に出さず思った。もっとも彼女に人の事は言えないのだが。

「まずその一。アレはまだ高校生だ。失踪した時期を含めても情報を取得出来る時間には限りがある。にも関わらず、知識量が豊富すぎる。その知識の代わりに何を犠牲にしたのかも気になるね。
しかも幅広い知識を有しておきながら、興味があるのは探偵業とサッカー。そのサッカーも探偵に専念する為にあっさりと捨てている。
盗聴器の会話によれば、他人が関心ある事柄に関して、その人物よりも多くの知識を有しながら、その人物の興奮を冷ややかに見下す場合もありそうだ」
「……それは変ね」

人間、興味のない知識は聞いても記憶されないのだ。ちなみにサッカーは別にあっさりじゃない。

「その二。事件の遭遇率。まあ、これは偶然だろうけどね。問題はその時の対応と精神の渇きだよ」
「渇き？」
「まあ、焦るなよ。俺だって死体は何度か見た事はあるけど、流石に急に見せられたら少しは動揺するさ。本当だって。まあほんの少しだけど。だけど、彼は俺と同じ位に慣れきっている。
死体を見た瞬間から捜査に頭脳が切り替わるんだ。聞く話によるとこれは最初の事件からそうだったようだよ。そして、渇きだよ。ほとんど事件ばっかの生活の癖に、暇が出来れば事件が降ってくる事を願う。それもライバルの怪盗君を除けば殺しをね。
要するに彼にとっては人が死ぬ、殺されるという事象自体はどう

でもいいんだ。大事なのは誰がどうやって殺したか。それとその理由だ。俺は容疑者の自殺を極端に嫌う理由もそこに絡んでくるんじゃないかと思うんだけどな」

「おもしろいだろ？　正義感が強い癖に殺人そのものは深刻な顔で歓迎するんだ。まっすぐに見えてどこまでも歪な存在！　裕福な家に生まれて豊かに育ったというのにね。もしかしたら帝人君以上の逸材かもしれない。愉快すぎて吐き気がするよ。『真実はいつも１つ』が口癖らしいけど、むしろ俺もまだ知らない人間の真実を見せてくれそうだ」

「……酷い言い様だけど、一番はあんたの見方が捻くれすぎているだけだと思うわ」

「ああ。捻くれている事も穴だらけの意見なのも自覚しているさ。だから近くで見たいんだよ。彼だって俺のプレゼントに喜んでくれるさ」

「……ま、それで給料貰っている身としては従うしかないけどね」

「～♪」

臨也はにっこりと微笑むと目の前のパソコンに向かった。その画面ではチャットが行われていた。

リンドン【でも、私悪い人ですよね。一瞬でも人を殺したいと思うなんて】

その文字に奈倉のＨＮで文字を返す。

奈倉　【あなたは悪くないですよ】
リンドン【え？】
奈倉　【あなたは何も悪くない。悪いのは全部あの人です。そうでしょう？】
奈倉　【むしろあなたみたいな人に殺意を抱かせるなんて、あまりに酷い人ですね】
リンドン【奈倉さん……】
リンドン【こんな私を支えてくれるなんて……】
リンドン【なんだか、すっきりしました。私もう辞めます】
奈倉　【そうですか……】
奈倉　【でも、変な話ですよね。辛い目に遭った方がいなくならなきゃならないなんて】
リンドン【……】
奈倉　【あ、ごめんなさい！！　もう話題変えましょ！】
奈倉　【そうですね……最近読んだ本ってありますか？】
リンドン【ほ、本ですか？　ちょっと最近忙しくて読んでないです】
奈倉　【私はこの前古本市で面白いミステリーを見つけましてね】
リンドン【ミステリーですか？】
奈倉　【ええ。まったく無名の作家なんですけど、トリックが凄いんです……】

――――――――

第1話　暗中飛躍（後書き）

後悔はしてない……多分。でも謝りますゴメンなさい。

散々言っておいて難ですが、別にコナンは嫌いじゃないです。臨也のキャラに合わせて言葉を選びました。

ただ、精神力をかなり食うので更新は遅くなりそうです。

あとはこの物語の軸の１つは新一ｖｓ臨也になりそうです。

第2話　強さを求めて（前書き）

プロローグと1話でちっさな誤字が多数見つかって凹みました。
今後はもっと頑張ります。

第2話　強さを求めて

「いやはや、若いのに強いのう」

中国某所にて

「いえ……」

若い男……京極真は小さく俯いた。相手の老人が降参した以上は勝ちなのだろうが、そんな実感は全くない。

老人は霞みように捕らえ難く、どれだけ打撃を放とうときりがなかった。一応勝ちという形になったのも年齢差による体力によるものが大きいと分析していた。

「それにしても不思議じゃ。あんた、強くなってどうするつもりじゃ？」

かつて、日本の侵攻を食い止めるべく暗殺拳を磨いたという老人は、日本語で不思議そうに呟いた。

「どうするつもり？　いえ、もともと好きではじめた事なので特に理由は。強いて言うならば強くなりたいのが理由ですかね」

「成程……じゃが、とにかく強い男と戦いたいというのならば、相

応しい人物に心当たりがある」

「本当ですか！？」

「その男は格闘技を習った訳でも体を鍛えた訳でもない。にも関わらず我々とは比べる事自体がナンセンスなまでに強い存在という。私の弟子もすぐにやられた」

「そ、その人はどこに……！」

「東京は池袋じゃ」

「池袋！？　名前は」

「平和島……平和島静雄」

■■■■■

それから1ヶ月後。

帰国した真は池袋の駅に降り立った。

どれだけ自制しても胸が昂ぶるのが止められない。

この街にいるという平和島静雄。

あの老人が比較にもならない強さとはどれ程なのだろうか。

必ず見つけ出してみせる！

まだ姿も知らない相手との全力を出し合う戦いを思い浮かべ、そう誓う真だった。

■■■■■

だった――――が。

「――――クシュン」

金髪にサングラスをかけたバーテン服の男、平和島静雄は急な悪寒に体を震わせた。くしゃみをした後もまだ鼻がくすぐったいのか、

整った顔をムズムズさせている。

「どうした静雄、風邪でも引いたか？」

「平気っす」

静雄はそう言ったが、その声をどうも鼻声っぽく。心なしか目も涙ぐんでいる。

上司の田中トムは心配して声を掛けた。

「そういや、昨日も長いこと雨ん中を外で待たしちまったからなぁ。今日はお前だけ先に切り上げて病院にでも行くか？」

「そこまでは……」

そう言おうとした時、背後から澄んだ女性の声が被さった。静雄の後輩でロシア人のヴァローナだ。白人の美女で、長身に抜群のプロポーションを持つ。

「診療は賛同しません。風邪。主にウイルスを原因とする総合感冒炎。自然治療により完治します。処方される薬は症状の緩和に留まり、抗生物質もウイルスの為に効果は見られません。よって診療で大した効果は得られないでしょう。残念無念また来週」

「へえ。じゃどうしたらいいんだ？」

相変わらず奇妙な日本語だが、慣れきったトムは普通に聞き返した。

「……基本的には自然治癒するですが、安静と睡眠を推奨です。摂取すべきはブドウ糖とビタミンC。治癒力を高めます」

なぜか一瞬言い辛そうにしてから言ったヴァローナにトムは勘ぐった。
もしや……「2人っきりになってから看病したい」とかで俺には黙っていたのか……？

まさかヴァローナが、弱りかけの獲物に治療法を出し渋ったとは気がつかない。

ロシアの武器商社に勤める父を持ったヴァローナは、本ばかりを与えられて育った為に知識のみ豊富である。また、その反動から貪る様に実戦経験を積んでいた為に戦闘能力も高い。常に強い相手を求めていたが、いくつかの連敗を経て静雄と同じ取り立て屋で働いている。目下の目標も今は「強くなり、平和島静雄の全てを知った上で倒す」という辺りに落ち着いている。彼女の考える獲物とはそういう意味である。

もっともさっきも治療法を教えてしまった通り、最近は倒す事の比重が少なくなっているのだが、彼女自身は自分の心の変化に戸惑っていた。

「そっか、ありがとな」

だから、ニッコリと笑った静雄が彼女の頭をわしゃわしゃと撫でた時、自分の頬が紅潮し
鼓動が跳ね上がった事には気がついても、その理由までは思い至らなかった。

「と、当然です……私はあなたの……後輩ですから」

その言葉を出すのが何故か辛かったが、その理由も思い至らない。
様子をぼけっと見ていたトムは、ひっそりと呟いた。
「あいつ、顔は弟に似てるもんな……」
「「？」」
「あ、いや、次の所は俺達が行くからよ。今日は気温も高いし、少しベンチで休んでろよ。な」
「うす……」
「どうした？」
「いや、なんでもないっす」
人に優しくされるのに慣れてない静雄は照れた。まさかクシャミと鼻声でここまで心配されるとは思っていなかったのだ。
（いいんだよな……）
この好意に甘えても。
かつては自分が周りの人間を傷つけるのが怖くて。誰からも距離を置いていた頃と比べるとそれは大きな変化だった。
「あの、トムさん」
「あん？」

「ありがとうございます」

「へっ、気にすんな。先輩は後輩に頼られると嬉しい生き物なんだよ」

そう言って背を向けるトムを見送って空を見上げる。

ああ。今日はいい天気だ。

第2話　強さを求めて（後書き）

ええと。デュララを知っている方なら分かると思いますが、説明が随分薄いです。まあ、理由はそのまま書くと、コナン側から見てくれた人に悪いかな……というのがあります。もともとが俺得ではじめたんで今更感もありますが……。静雄とヴァローナの関係も長い説明が必要なので、簡略化しました。

ちなみにこの2人は好きです。

第3話　管鮑之交（前書き）

タイトルの読みは、かんぼうのまじわり

近くに大阪弁にうるさい人がいるので、大阪弁は苦手です。

第3話　管鮑之交

ピンポーン……

ピンポーン……

「おい工藤！　おるなら返事せい！」

工藤邸の玄関前。服部平次は反応のないインターフォンの前にがっくりを肩を落とした。

何故におらん。

工藤までもワイを独りにさせようっちゅう魂胆か？

むしろ、どうして平次がここにいるのか。理由は今朝に遡る。

本当は今日から遠山家服部家で1泊の旅行に行くつもり予定だったのだ。だが、それを忘れてカラオケのオールをかましてしまったら、朝には家族は誰もおらず、電話しても「お前の分はないから、そっちでなんとかしろ」の一点張り。

平次も傷心だというのに、和葉からは電話するなりひたすら怒鳴られ続け、やっとこっちが話せると思った時には切られていた。

なんてやっちゃ……。

自業自得極まりない理由で落ち込んだ平次だった。

気を取り直した所で1人でする事もないし、どうせならば……と、平次はわざわざ東京までやってきたのだ。だが、新一はいないし、電話をしても出ない。

まさか工藤も旅行に行ったんとちゃうか？

そんな予感がした頃、新一から着信があった。

「服部だな。どうした！？」

「おお、工藤！　ワイな。お前と遊びにこっち来たんやけどな、お前今どこにおる？」

「ん？　え、ああ……って、お前今日から温泉旅行に行くんじゃなかったっけ？」

「いや、いろいろあってな」

「そうか。まあ言いたくないなら理由は聞かねえよ。俺達はちょう

ど今、池袋に着いた所だぜ。来るか」
「ほな、行くで！」
やっぱり、持つべきは親友やなあ。理由も聞かんで誘ってくれたし。
平次は感激しながら駅へと足を向けた。

■■■■■

「今のって服部君？」
池袋駅で、携帯を見た新一は驚いた。着信履歴が平次で埋め尽くされていたのだ。事件かと慌てて連絡したのだが、内容は上記の通り。
それでも普通に対応した所は流石親友である。

「ああ。今から来るって」
「でも確か今日から旅行って和葉ちゃんが言っていたわよね。なのにどうして東京にいるんだろ？」
と首を傾げる蘭。
「まあ、どうせ下らない理由だろ。日程忘れてカラオケオールしたとか」
蘭に向かってしれっと言う新一。
流石親友というだけあって、理由なんてとっくに把握済みである。

だが、平次が言いづらいのをあえて知って蘭に教えたり、平次には気付かない振りを通している点も流石親友である。

「和葉ちゃん……可哀そうだな」
「それ、アイツが来たら言ってやれ」
「なんて奴！　ってか、男ってみんなそうなの！？　真さんといい、あんたといい」

恋人が中国に行ってしまった園子は、その寂しさもぶつけるように新一を睨みつけた。

「あ、いや、俺は……」

あいつと違ってアホな理由じゃない！

新一がそう言おうとした時。

ピピピピピピピピ……。

と周囲で一斉に着信音が聞こえた。それも１００人分位は鳴った。流石に驚いた新一も一応自分の携帯を見るが着信はない。隣を見ると蘭と園子が同様に携帯片手に首をかしげている。

なんだったんだろう。

かすかに気味の悪いものを感じた3人は逃げるように公園へ向かった。

「そういえば志保さんは来なかったのね」

思い出したように園子が言った。

「うん。残念だけど研究所に用事があるんだって」

ちょっと悲しそうに言う蘭に園子は内心で呆れた。傍からみれば、ライバルになる可能性充分以上にある人物なのに、どうしてそう思えるのかしら？余程鈍感なのか、余裕があるのか。まあ間を取って、彼女の純真さという所が答えだろう。

でも分からないのは新一だ。あんなに蘭を待たせておいて、いまだに告白をしていない。その上、食事は阿笠邸で食べるし、事件がある度に志保を引き摺って行く。

それだけ考えれば心変わりを確信するが、今も志保がいない事に気落ちした様子もなく買い物に来ているし、傍目では蘭を好きそうな感じもする。まあ、これは色眼鏡が入った考えだが。

だが、これで志保の事が好きだと言い出したら待ちっぱなしの蘭が可哀そう過ぎる。一方で蘭が好きだとしても、なんだかんだで新一を好いていそうな志保は扱き使われっぱなしで可哀そうだ。

（どっちにしろ罪な奴……）

疑心と嫌味に満ちた目で新一を見るが、彼は空を見上げている。

（なんかアイツ変だったな……）

新一が考えていたのは今ここにいない志保の事だった。

最初は行けないとだけ言っていた。それどころか、途中からは俺達が池袋に行くのを止めたがっていた気がする。その理由が分からなかった。

もっともそこまで強く止めようとした訳じゃないから、こちらも聞きにくかったのだが、志保は理由なしにそんな事はしない。

ちなみに彼は事件の側面から考えているのであって、色恋の面ではこんな鋭さは働かない。

……そういえば、あの時。何で園子のチャット相手の事を聞きだそうとしたんだ？

えっと、名前は確か……。

必死に思い出そうとした時、新一は目の前に１０人の若者が取り囲んでいるのに気がついた。

第3話　管鮑之交（後書き）

言い忘れましたが、デュララ！！の高校生達は原作8巻までの現状では扱いの困るので、出し辛いです。

第４話　『クロスオーバー』　開幕（前書き）

捏造設定が飛び交い始めます。複線も飛ぶかもです。

第４話　『クロスオーバー』　開幕

新宿は臨也のマンション

宮野志保（みやのしほ）は黒髪の女と相対していた。

新一と同様に体と名前は元に戻った彼女だったが、心は却って落ち着かず、最近は「いっその事彼らの前からいなくなろうかしら？」なんて事ばかり考えていた。だが、蘭の話から聞き覚えのあるＨＮを聞き、こうして臨也のマンションに来ていたのである。

目の前にいるのは確か矢霧製薬にいた矢霧波江だ。黒の組織にいた頃に書類で見た事がある。１度、その能力とデュラハンの首を狙ってスカウトを検討していたが、彼女の特殊な趣向に気がつき取りやめさせたのだ。ちなみにそれはここに住む情報屋から買った情報だった。

「折原臨也は？」

「あなたが宮野志保ね」

どうやらここに来るのは分かっていたらしい。だが、志保も臨也がいない事で疑惑を確信に変えた。つまり、お互いこの展開は予想済みという事だ。

「伝言くらいはあるんでしょ？　何故園子さんに接触したの？　一応聞いておくわ」

「伝言は２つよ『チェス』と『君達のナイトは自分から俺の所に来るよ』。これだけ。意味を聞かれても私には分からないからね」

「いえ、分かったわ。ありがとう」

チェスはキングを取るゲームだ。だが、最初からキングは取れない。まずはポーンを落とし、最終的にキングに辿りつくのだ。つまり、本当の狙いは園子ではないという事。

そして、2つ目。具体的にそれが何かは分からない。だが、臨也と新一が仲良くなれそうにない以上、新一は臨也を問い詰めにここに来るのだ。

恐らく……工藤新一や周りの人を巻き込んで大きな事件が起きる。そして……。

あの男の性格からして、自分も悪趣味な人間観察の対象なのだろう。だからと言って彼女は逃げるつもりは一向になかった。

どうせ闇に塗れた身、覗きたいのならば好きなだけ覗くといい。でも、ふざけが過ぎると許さないわよ。

志保は心の中でそう呟くと、池袋を目指した。胸ポケットの中身が手の甲とぶつかって硬い音を立てた。

■■■■■

一方の臨也はと言うと……

「来たね」

近くの喫茶店から若い男女3人を双眼鏡で眺めていた。先の呟きは彼らを囲む若者達に気がついたのだ。

その中には知っている顔もある。ダラーズの中で薬をやってるサークルの一員だ。清濁併せ呑むダラーズでも、最近は粛清対象になるような連中だが、バレないように活動をしているからまだ無事な連中である。ちなみにそのバレないやり方を教えたのは臨也だ。

ある目的から「工藤新一発見！」メールをダラーズMLに流した。

そして、たまたまその周囲にいた彼らが動いた事も予測済みだ。

さて、いよいよだ……。

臨也は携帯に目を落とした。

そして更に気分が良くなった。

どうやら、彼女は俺の思惑以上に動いたようだ。そして、俺も彼女の想像通りに動いているらしい。俺は俺の目的の為に彼女を動かし、彼女は俺を監視する為にそれに乗る。もしかしたら俺の目的くらいは勘付いているかもしれない。それで俺の思惑に乗るんだから。

ふふふ

あっははは！

これだから俺は人間が好きで仕方がないんだよ。もし、君達が俺の

思惑を尽く潰しても歓迎してあげるつもりさ。シズちゃんなら嫌だけどね。

それから再び双眼鏡を覗こうとした臨也だったが、視線の隅に移った人物に気がついて冷や水を浴びせられた。

は？

ってか、何でこんな所にいるのさ。

あ～あ、最悪だ。全部やり直し。本当にさっさと死んでくれないかな？

■■■■■

「なあ、おめえ工藤新一じゃね？」

リーダー格の男に話しかけられ、新一は少し身構えて答えた。

「ええ。そうですけど」

それを聞いてはしゃいだ男達は眼前に携帯を突き出して写真を撮ろうとする。その行為に少しむっとした新一だったが、冷静に耐えた。

真昼間から理由もなく暴力沙汰になるとは考えにくい。少し我慢す

ればいなくなるだろう。
それに周りにいるのは、せいぜいベンチでだらしなく凭れているチンピラが1人いるくらい。
助けは得られそうになかった。
もっとも新一も修羅場はいくつも潜って来たし、蘭も相当強い。この位は屁でもない。
だが、こいつらが全員素手である保障はないし、園子も守らなければいけないのだ。
出来るだけ諍いは起こしたくなかった。
だが、その忍耐を都合よく受け取った彼らはさらに突っかかって来た。
「それにしてもよ、左右に女侍らして良いご身分じゃねえかよ！いいねえ、名探偵は」
「な、何言ってるのよ、あんた達！」
園子が怒鳴り返すが、彼らはゲラゲラと笑い転げ、新一は彼らが最初から敵意があったと確信した。
「何の用ですか？」
「俺らのボスがよ、前におめーに痛え目見たって言うからよ。おめーにもちょーっとテレビに出れねえ面になって貰おうと思ってよ。女に手ぇ出して欲しくなけりゃ、場所だけは移してやるぜ？」
「……！」

あから様な売り言葉に蘭は戦闘態勢になった。
新一はどんな迷宮事件もささっと解決する名探偵として知られている。彼らのボスが新一に痛い目に遭わされたというなら、間違いなく悪者だと確信したのだろう。
だが、若者達は空手の達人が本気になったのにも気がつかない。
「「なんだ、彼女がやる気になったぞ！！！」」
と再び大声ではしゃぐ。駅から歩いて数分の距離にある公園だが今はあまり人はおらず、居たとしても、ベンチで半分死んでるチンピラくらい。誰かが通報したとしても交番までも遠い。それに１０人で騒いだ程度、大した声量にはならない。
相手も男1人に女2人。どうなっても負けるはずはない。
彼らはそう思っていた。実際の所は別として。

（うるせえ……）

だが、彼らは気がつかなかった。その声量は、風邪で頭痛まで感じ始めたチンピラにとって、うるさいと思うには充分過ぎるものである事を。

「おめえ、俺達はダラーズだぞ！」
「……なんだそれ？」
「んだと！？」

（あ～うるせえ……）

風邪を引いて短い導火線が極限まで短くなったバーテン服のチンピラは、真昼間から繰り広げられた騒ぎを目にして思う。

（せっかく人が休ませてもらっている時によぉ……目の前でうぜえ事しやがって）

せめて「バーテン服を着た金髪の男」が池袋でどういう意味を持つのか。それさえ知っていれば、ここで騒ぎを起こそうなんて思わなかっただろう。

「おい、やっちまうぞ！！　んでやっちまって、やっちまうぞ！！」
「「「「ギャハハハハハ！！」」」」

だが――――――手遅れだった。

「あああぁぁぁあああぁあああ！！！　うぜえぇえええええ！！！」

ボグッ！！！！！！

半分死んでるチンピラこと、平和島静雄（へいわじましずお）は滾り切った怒りをぶちまけるように叫ぶと、そこにあったものを片手で持ち上げた。

第４話　『クロスオーバー』　開幕（後書き）

ＮＥＸＴコナンズヒ～ント！！「火事場の馬鹿力」
需要のなさそうなクロスを読んでいただきありがとうございます。
やっとクロスしました。

第5話　池袋最強（前書き）

最初に言っておく。俺は暴力が嫌いだ。～平和島静雄　独白～

第5話　池袋最強

「あああぁぁぁあああぁあああ！！！　うぜえぇえええええええ！！！」

ボグッ！！！！！！！

巨神兵の骨が圧し折れたような音……聞いた事はないが、例えるならそんな音が響いた。

静雄が怒りにまかせて、ついさっきまで座っていたものを地面から引っこ抜いた音だった。

「「「「「は？」」」」」

（……？）

新一は体が縮んだ時ですら、ここまでのまぬけ面はしなかっただろうという顔で、ぽけっと静雄を眺めていた。園子は恐怖を感じる前に腰が抜け、蘭は戦闘態勢のままで液体窒素を浴びたように凍っている。

彼らが見たものとは。

身長は高く１８５ｃｍ程。体型は細身の体のバーテン服が立っていた。サングラスは既にポケットに突っ込まれている。

金髪が風に揺れる度、額に変なものが見える。血管だ。

この距離でも分かる程、血管が浮き出ていた。漫画でしか見た事がない。

目は怒りが滾り、口は引きつって「笑み」という形になっていた。

そして、理解したくなかったから気がつかないようにしていたが、その男が片手で持ち上げているもの。

地面から無理やり引っこ抜かれた公園のベンチ。

え？

は？

どういう事？

一昔前のＢ級アクション映画のＣＧを見ている気分だ。納得いかない位にアンバランスで、ありえないからアホっぽく見える。

ただ……大変認めたくないのだが、これが現実という事だけが違う。

そんな格好のまま、静雄は若者達に呟いた。

「ハァ、ハァ……おい、お前ら。頭が痛い病人を騒音で憤死させるつもりならよぉ。ハァ……その、なんだ。何されても文句は言えねえよなあ？」

「へ、平和島……静雄……！！」

ここで若者の１人がようやく伝え聞いた名前を思い出した。

それでも手遅れなものは手遅れなのだ。

「人が頭痛ぇ時に……！　格好悪い事やってんじゃねえ！！！！！！」

理不尽に死を宣告し、一歩踏み込んで片手でフルスイング。

轟音。

構図的にはバットの片手打ちでいくつかのボールを同時に打つ感覚だ。ちょっと違うのは、バットがベンチでボールが人間という事だろうか。

「ひぃあああああああああ！！！！！」

5人くらいの大の男が絶叫して宙を舞った。悲鳴にドップラー効果がかかりまくる。そして何メートルもぶっ飛んでは木に引っかかったり、ゴミ箱に突っ込んだり、地面を転がった。

その様子を見た残りの5人も同じような絶叫を上げて逃げ出した。

だが。

「ぬんどりゃあああ！！！！」

逃す静雄ではない。逃げる姿を見るといつもあと一歩で逃してしまう臨也を思い出して苛々が増す。

振りかぶったベンチを両手に持って、ドンキーコングよろしく逃げる連中に投げ付けた。

ベンチは男達を跳ね飛ばしても勢いは止まらず、やがて一番遠くまで逃げていたリーダー格を下敷きにして止まった。

静雄が一振り目を加えてから5秒。戦闘は一瞬で展開され収束した。

「フーッ、フーッ、フーッ」

静雄はやはり風邪気味が響いたのか、まだ息が荒い。

この間に知らない人の為に説明しよう。

平和島静雄は多分普通の家から生まれた人間だ。極端に短気な事を除けば基本的に性格も大人しい。

ついでに言えば多重人格でもない。尻尾が生えている訳でもなければ、超能力の使い手でもない。代々暗殺者の系譜という訳でもなさそうだ。

ただ、生まれつき、筋肉のリミッターが壊れていた。俗に言う「火事場の馬鹿力」が常時発揮されているのだ。

その圧倒的な力を持て余した体は強烈な破壊衝動を脳に与え、キレる事を引き金にあらゆるものを破壊し尽くした。それは限界まで筋力を使う彼自身も例外ではなく。

蹴っては足がへし折れ、物をぶん投げては腕や腰がぶっ壊れ。筋肉痛のレベルじゃない体の破壊を繰り返した。

壊れては治し、治っては壊し。どれだけ心を我慢しても、彼の意思とは関係なく暴れだす力。その度に壊れる自分。

破壊的な暴力よりも、自分を抑えられる心の強さを望んでいた彼は……

やがて我慢を諦めた。

結果的に、彼に近づく人はいなくなり、彼自身も人を傷つけるのを恐れて距離を置くようになった。

守りたい人を守ろうとした時、その人ごと壊してしまうのが自分なら…最初から誰にも近づかなければいい。

それは自分に怯え、自分を信じるのを諦めた在り方だった。

それでも誰かとつながりたい寂しい心。でも自分が信じられないという臆病な心。そんな弱い心を抱え、力のみは皮肉にも壊れる度に「進化」していく。

半年近く前の事件からは少しずつそんな自分を受け入れられるようにはなっていった。守りたい人を壊さず、自分の意思で守りきれるようにもなった。そんな静雄の周りにも少しずつではあるが人が増えていったのだ。

――――――

――――

ま、それでもキレる時はキレる訳だが。

そして一番戸惑ったのは新一達である。

これがドッキリであって欲しい。

テレビスタッフが現れて「大成功！」ってプラカードを掲げて欲しい。いや、映画の撮影だったっていう事でもいいですから誰かそういうオチにして下さい。夢オチでも怒りません。本当です。お願いです。お金なら家にいくらでもありますから……！

混乱する園子の隣で新一も呆然としていた。

この暴力がこっちに向かったらどうしたらいいんだ？

こんなのを相手に勝算も糞もない。

だが、静雄は暴れて気が済んだ。それに一方的に絡まれていた彼らに向ける暴力もない。泡を吹くリーダーを下敷きにしたベンチを取りに行く。そして、強引に元の場所に押し込んだ辺りで、トムやヴァローナが帰って来た。

「あ、おい！　静雄！　大丈夫なのか？」

「あ、トムさん。暴れたらなんか元気になったみたいっす」

「マジかよ。で、この子達は……」

怖い目見たよな……どうしようかな？トムがそう思った時、蘭が突然頭を下げた。

「あ、あの……」

「？」

「助けてくれてありがとうございます」

「え、いや、そんなつもり全くなかったから」

サングラスを掛けながら答える静雄。だが、その会話に好感を覚え

たトムは新一達に言った。

「マジか。だったら、ここで知り合ったのもなんかの縁だからな。今から一緒に飯でも食うか？　怖がらせちまったお詫びに奢るからよ。な？」

なにが「マジか」で「だったら」なのか分からないが、好意的な申し出に思わず頷いた。正直首を振るのが怖かったという事もある。

そうして、高校生探偵とご友人と取立て屋の奇妙なパーティが完成した。

第5話　池袋最強（後書き）

はい。完全にやりたい事だけをやった回でした。

静雄が好きです。

第6話　おそロシア？

「露西亜寿司」
ロシア人が経営する寿司屋で、新鮮なネタを確かな腕で握るって値段も安い、知る人ぞ知る店だ。

何故、それだけ良くて知る人ぞ知るなのか……。
それはクレムリンを小さくして寿司カウンターをくっ付けたような奇妙な内装と、「安心価格オール時価」というたまらなく不安な気持ちにさせられる垂れ幕。そして、客引きをしている２ｍを超えた黒人のサイモンが怖い事が一番の理由だろう。

そんな店に新一らは取立て屋の面子と来ていた。

「えっ、平和島さんって羽島幽平さんのお兄さんなんですか！？」
「お、おう。あんまり言うんじゃねーぞ」
「「すっごーい！！」」

羽島幽平とは今、人気絶頂の若手俳優だ。
何故バーテン服を着ているのか？という質問からの話の流れで先のような会話になり、ミーハーな蘭と園子は大興奮した。

最初こそ、静雄の圧倒的な力に驚き、園子に至っては現実逃避までしていた。だが、話すと以外に良い人だと分かり、途中で合流した小学生の女の子に懐かれているのも見て、大分警戒心は薄らいでい

た。
静雄も静雄で、さっきの暴れっぷりを「カッコイイ」と言われたら、流石に嫌な気はしない。それに蘭が空手部の主将と知って感心していたのだ。自分の力が生まれつきのものである静雄は、自分で努力して強くなった格闘家全般を尊敬している。

「え、じゃ、あの羽島幽平さんとアイドルの聖辺ルリさんの熱愛報道って……」

（そぉい！！）
トムは心の中で悲鳴を上げた。
静雄に弟ネタを聞こうなんて……！最近の高校生は心臓に髭でも生えてるのか！？雑誌記者がそれを聞きに来てぶっ飛ばされたばっかだぞ！

「あ、それ私のおじいちゃんも確かめたいって言ってた！」
聖辺ルリの大ファンの祖父に持つ粟楠茜もそう言って静雄の腕にしがみついた。途中で出会った小学生の女の子とは彼女の事だ。キューティーボブの可愛い子で、説明の9割9分を省くと、命を助けられて以来静雄を慕っている。
静雄はボリボリと頬を掻いたが、やっぱり素直な相手には弱いのか、渋々といった風に口を開く。

「ったく。しょーがねーな。幽も自分で言ってただろ？本気だよ。はい、これ以上話すつもりはねえからな」
「「キャー！！」」

うるさい高校生2人。本当は聖辺ルリの話題はどうでもいいらしい茜は、腕にしがみついたまま隣にいるヴァローナと睨みあいの火花を飛ばしていた。まあ、ヴァローナは「人の獲物（戦闘的な意味と本人は解釈）に手を出すなです」といった感じなのだが、いまいち迫力がない。理由はこの寿司屋を経営しているロシア人達と顔なじみで気まずいという事だった。

とまあ、こんな感じで盛り上がっていた。

■■■■■

（……平和島静雄……どこにいるんだ？）

園子が静雄達と盛り上がっていた正にその時。
京極真は、せめて背格好や特徴だけでも聞いておけば良かったと後悔していた。

というか、せめて帰国を恋人にメールしていれば迷わなかっただろうに。

「イラッシャーイ。イラッシャーイ。露西亜寿司ヨ。寿司はイイヨ～。オイシイヨ～。ア、ソコノ眼鏡ノオニイサンモドウ？」

今まで考え事をしていて気がつかなかったが、目の前に大きな黒人がビラを持って話しかけていた。

ロシア系の黒人で、鋼のような筋肉を板前の服で覆っていて、寿司屋の客引き。充分ただ者ではないが、真は達人の鼻でサイモンが見かけ以上にただならぬ者であると感じていた。

この人も尋常じゃなく出来そうだな……。でも平和島静雄ではなさそうだ。

真新しい名札に「さいもん」と書いてある。

「ドウ？　オニイサン？　今ナラ、缶詰開ケタバカリデ新鮮ヨー」

冗談とも本気ともつかない事を言うサイモンに呆れ、真は答えた。

「いえ、すみませんが、今は持ち合わせがないので」

「オー！　ソレハ残念ネ」

尚も半額だの言っていたが、外人の彼が平和島静雄を知っているとは思えなかった。真はサイモンと別れ、食事処を探しながら駅の反対側を目指す。

ちなみに平和島静雄は露西亜寿司の常連で、サイモンとも仲が良い。

■■■■■

「ワイも池袋に着いたで。飯食おうやないか。で、どこにおるん？」
携帯越しに新一は焦った。偶然の流れで驕ってもらっている身。これ以上人数を増やすのは流石に悪い。
「あ、悪ぃけど飯もう食っちまってさ」
「なんやて？」
「ああ。そういう訳だから、オメーも飯食ってから連絡してくれよ」
すまん服部。
心の中で一言謝って席に戻る。親友故にこれで充分。
すると向こうから蘭や園子の悲鳴が聞こえた。知らない間に随分と盛り上がっていたらしい。
（ってか、冷静に考えれば俺達、変わった人達と知り合いになったな）
合法とはいえ、出会い系サイトの取立て会社の社員3人（内1人は怪物）である。こういう人達はよく事件の被害者として出会う事が多かった気がするのだが。でも、話してみると随分とまっとうな人達（白人美女の日本語を除く）だ。

職に貴賤はないというけど、本当なんだな。

っていうかあの女の子、粟楠って言わなかった？

池袋に根を張る同じ名前の暴力団を思い出した新一だったが、すぐに頭を振ると皆の所へ戻っていった。

第6話　おそロシア？（後書き）

動きがないですね。皆無ですね。

昼食の時間なので許してください。動きは午後から加速させる予定です。

第7話　疾風迅雷

今日の仕事は簡単でいい。

最初は漫画の原稿。さっきは石膏で出来たような海外の人形。それで次も大したものじゃないな。

うん。時間指定が厳しい以外は簡単にこなせそうな仕事ばかりだ。それまでの時間もあるし。

首なしライダーことセルティは黄色いヘルメットをコクコク頷かせると、新聞の番組表を思い出した。今日のワールドカップには間に合うのはもちろん、特番の「世界の不思議映像１００選」も観れそうだ。あ、でもあれ、宇宙人出てきたら嫌だな。

少し前のテレビで観たリトルグレイの眼光を思い出してセルティは微かに身を震わす。

ちなみに、セルティは外ではヘルメットを滅多に脱がない。何故なら、ヘルメットの内側は何もないからだ。

セルティ・ストゥルルソンは人間ではない。

アイルランドに伝わるデュラハンだ。デュラハンとは、コシュタ・バワーという首なし馬の引く馬車に乗り、首のない女性の姿をして

いる妖精である。脇には自分の首を抱え、まもなく死人が出る家の近くを訪れるのだ。

その彼女が何故日本の池袋にいるかといえば、彼女のない首が関係している。

今から２０年程前、目が覚めた彼女には首と記憶のほとんどがなくなっていた。分かっている事は自分がどういう存在であるか、それと微かに感じる首の気配。それからセルティは自分の存在意義を知る為に首を追って日本に来た。その過程で首なし馬は黒バイクに形を変え、手掛かりを求めながら運び屋の仕事をしている。

そして、現在。首はまだ見つかっていないが、最近はもう未練もない。この街も好きだし、日本に来る時に知り合った岸谷新羅は、彼女の内面や外見すべてひっくるめたセルティを好きだと言ってくれる。

もう存在意義を首に求める必要は無くなっていた。

とはいえ、ない首はない訳で、彼女がとっくに吹っ切れていたとしても、急に正体を見せられれば驚く他人は存在する。

ボム。

ゴトリ。

カラン。

「キャーー！！！！」

こんな具合に。

え？とセルティは驚いて振り返った。

落ちているのは子供が遊ぶようなゴムボール。どうやら子供が投げたものが当たってしまい、それが運悪くヘルメットを落としたようだ。

……参ったな。

急いでヘルメットを顔の位置にはめると、バイクに跨った。そしてすぐに発進。

首がないとこういったデメリットがある。もし公園でベンチに座ってヘルメットを取ろうものなら、即席の猟奇殺人事件だ。それに五官の内４つは完備しているが、首がないから味覚だけは持っていない。

せめて味覚があれば新羅においしいものを作ってあげられるのにな。

料理修行中のセルティは一瞬惚け、それからバックミラーに映るバイクに気が付いた。

明らかにスピード違反だ。しかもノンヘル。そして一番重要な所なのだが、さっきからセルティを凝視して、あきらかに追いかけている。

（なんだろう？）

理由が分からないなりにセルティは振りきろうとした。だが、相手も顔は若そうなのに中々粘る。

まさか……人間に変装した宇宙人？

矢甥さんが「宇宙人は日本人に化ける」って言ってなかったっけ？

自分が化け物の癖に、宇宙人やホラー漫画には弱い。

ぞっとしたセルティはスピードを上げ、そうして真昼間のチェイスが幕を開けた。

■■■■■

（なんやねん、あのバイク）

ノンヘルのまま平次は前を走る黒い影を見やった。ナンバープレートはなく、車種も分からない。全てのパーツがほぼ黒で統一され、乗っている人間も漆黒のライダースーツで、ヘルメットだけ黄色のものを被っている。

平次は新一に振られ、仕方なくファーストフード店で昼食を取っていた。それから新一に電話しようとした時、突然悲鳴が聞こえたのだ。急いで駆け寄ると、腰を抜かす女性と、慌しく走り出す黒いバイクが見えた。これは事件や。そう判断した平次は近くに止めて

あったバイクを拝借して動かせるようにすると、後を追った。ただ、そのバイクにヘルメットがなくてノンヘルなのだ。

（せやけど、全然近づけへんな。あそこまで逃げる以上は何か理由があるんやろうけど……）

あのバイクをどこかで見た事がある気がする。

（ん、首なしライダー？）

少し前の特番を和葉と見たのを思い出していた。

確かに見た目は一瞬映った首なしライダーに似ているんやけど……。

まさか、そんなもんおる訳ないやろ。

平次は首を振って、黒バイクの追跡を続けた。

平次はバイクで犯人を追跡して捕獲した事もある。どうせだったら捕まえてヘルメットの中の顔を拝むくらいはやってやる。

そう思ってますますスピードを上げる。

そしてその様子を見る白バイ。目に映るのはスピード違反のノンヘルと、宿敵黒バイク。

「……ノンヘルのガキと黒バイク。葛原さんは非番とはいえ……交機を舐めるなよ」

その警官は宣戦布告の信号を打つように力強くランプを点灯させ、猛然と彼らを追いかけた。

後方からのサイレンに平次はたまげた。

「なんや、警察？」

何を追って……と一瞬だけ考えてすぐ納得した。

……わいや。

盗難。スピード違反。ノンヘル。信号無視。その他多数。

どないしよう。

平次は冷や汗の洪水に襲われた。

温泉旅行中の父親を思い出したのだ。大阪府警本部長の息子が、東京にまで来て盗んだバイクで大暴走なんて……。

「あかん、殺される。物理的にぶつ切りで殺される」

明らかに大混乱な台詞を呟いている間、白バイは追跡を続け、一方で黒バイクの姿は徐々に大きくなっていった。距離がいつの間にか大分縮んでいたのだ。

「なんや、今更捕まえても、もうわいの命は」

相変わらず、意味の分からない台詞を言う平次に黒バイクのドライバーがＰＤＡを目の前に見せた。

「？何を言っているのか分からないけど、何故私を追う？」

何故追うって……？

ようやく平次の頭は普段の明晰さを復活させていった。

（なんで文字が目の前にあるんや？）

目線を辿ると、黒い影が黒バイクから伸びていて、ＰＤＡもその上に乗せてあった。

そして、文字。この距離なら喋ればいいのに何故筆談？

簡単だ。相手は喋れないのだ。喋れない？

脳裏に浮かぶのは特番に出ていた首なしライダーに良く似た無音のバイク、ドライバー。

そして喋る事の出来ない人は大勢いるが、それとは別に口が、言い換えるならば首がなくとも当然喋れない。

せやけど、ほんまかいな。

こうした考えを全て一瞬の間に展開し、処理して、平次は言う。

「悲鳴があがってからあんたが逃げてったから、強盗か何かと思うて追いかけたんや。でもその様子じゃ、悲鳴の理由は分かった気がするわ」

「そう。ヘルメットが落ちてしまったんだ。誤解させて悪かったね。でも、早とちりした君にも責任があるぞ」

「せやな」

「だから、ここは1つ協力して、奴らを巻かないか？」

カッコイイ台詞の首なしライダーに力強く頷く平次。だが、彼は気が付かなかった。実はセルティは交機に追いまわされた事がトラウマで、平次以上に内心ガクブルだった。

筆談とは時に便利なのである。

■ ■ ■ ■ ■

「ん？出ないな……」

「放っておきなさいよ。ほら、行くわよ」

園子に促され、携帯を畳んだ新一は共に雑貨屋を目指す。

こうして物語は次の局面へと徐々に動いていく。

第7話　疾風迅雷（後書き）

以上、ここまでが第1部という扱いになります。さっき決めました。推理物と辛うじて言えるかもしれないタネが出来そうなので、ジャンルを推理に変えます！もし既出ネタだったとしても、ない知恵絞ったので許してください。それと、その影響で私が書いているものも軒並み更新が遅くなります。

幕間１　ダークサイドの攻防（前書き）

この頃、新一達は、本来の目的である雑貨屋へ移動中。

幕間1　ダークサイドの攻防

「あの、すみません」

警察に呼び止められ、宮野志保は足を止めた。

彼女は臨也のマンションを出てから昼食も取らず、真っ直ぐに臨也が作った舞台を目指した。だが、何も食べなかったせいで、却って早く着き過ぎてしまった。

自分がここに来る事は既に新一にも電話を入れたが、これからここで起こりそうな事件については一切話していない。

新一には悪いが彼女にも彼女の目的があるし、彼女自身、自分を善人じゃない事は自覚している。ここで何が起ころうが知った事ではないのだ。

大切な人を守る為ならば手段は問わないが、見ず知らずの他人に命を張るのは工藤新一や毛利蘭の領域だからだ。

もっとも、そう認めるからこそ蘭には劣等感のようなものを感じているのだが。

それでいて、食事もせずに現場へ飛び込む辺りは一見矛盾しているが、筋は通っている。事件自体はどうでも良いし、それで新一が心の傷を負ってもそれはそれでドンマイ。だが、その事件で新一の命を危険に晒さたくない。だから状況を把握している自分が介入して、いざという時はコントロールしようというつもりなのだ。

だが、そのややこしさは裏を返せば、彼女が新一にささやかな好意を持っている表れともとれる訳で。だが、色恋だけで生きられる人間でもない。彼女はそんなややこしい生き方をしている。

そんな志保は池袋で、警察の声に答えた。

「なんですか？」

「先ほど、拳銃を所持した女性がいるという通報がありまして。その人相があなたに良く似ているんです。申し訳ありませんが、念のため検査をさせていただいてもよろしいでしょうか？」

「……！」

しまった。工藤君達と合流できない。これが時間稼ぎにしかならなくてもその間に何かあったら……。

まさか、通報したのも折原臨也の仕業？

そう思った時に、ふと窓ガラスに映った自分の顔に気が付いた。

……あ。

「女性警察官に担当させますので」

「……わかりました。知り合いに電話だけしてもいいですか？」

馬鹿らしい。

志保は肩をすくませると、近くの雑貨屋の隣にある喫茶店を睨みつけた。正確にはその中にいるコートを着た若い男を。それから携帯

電話を取り出して短い会話を済ませると、警官達に付いて行った。

■■■■■

「ふふっ3マス下がって1回休みか。お楽しみはこれからだってのに、残念だったね」

臨也は携帯アプリのすごろくを眺め、楽しそうに呟いた。
通報したのは矢霧波江だ。

だが、彼は指示していない。
強いて言うなら、志保の髪の色、ヘアスタイル、イギリス人の血を半分引いた事がいけなかった。止めに彼女は少し髪が伸びていた。
その結果、波江は少し髪が伸びた志保を見て、こう思っただろう。

首とよく似ている。

首とはセルティの首の事だ。彼女は首に因縁があって恨んでいる。
弟の彼女を首と同じ顔に整形させた癖に、後で酸をぶっ掛けようとするくらいに。事前に「拳銃を持っている」と言っておいたから流石に凶行には及ばなかったようだが、妨害するくらいなら平気でやる女なのだ。似ているというだけの理由で。それを知って、2人が会うように仕向けたのは臨也である。

ちなみに拳銃うんぬんは臨也の勘だ。

宮野志保であれば、いざという時は迷わず自分を殺しにくるだろう。
そう踏んだのだ。出来れば自分に向けられた銃口の奥にある視線も鑑賞したかった。だが、それは本当に命懸けだし、別の仕込みの為に諦めた。

さぁて、そろそろ彼らも来る頃かな？

ハプニングはあったけど、何とか時間通りに来てくれそうだ。

そして、これから事件が起きて、彼らの姿を堪能した後にセカンドステージを贈呈してあげよう。

でも、まさか寿司屋の流れでシズちゃんも着いて来るって事はないよね。

臨也はふと過ぎった考えに冷や汗が流れた。

あの人、さっきの電話で何話していたのかな？

ア、アハハハ……ただの冗談だよね？

臨也の携帯のアプリ。臨也のコマは「スタートに戻る」に止まっていた。

幕間１　ダークサイドの攻防（後書き）

灰原ファン並びにセルティファンの方々、一応謝りますごめんなさい。
最初に思いついたネタで、髪の色とヘアスタイルは雰囲気似ている美人同士、片方は目を瞑っているからいけると思ったんです。

幕間２　異端邪説（前書き）

ひたすらにオリキャラです。

幕間2　異端邪説

その男はある日、忽然と悟った。

この世界には支配者がいると。

それまでは至って普通の少年だった。

体育が好きで、社会も幕末は大好きだし、国語も作家になりたかったからまあまあ。苦手科目は数学と理科。算数の頃から嫌いで、一番の理由は何故勉強するべきなのか分からなかったのだ。ただ、やろうと思えば出来ると信じていた。だが、やろうとしない彼の持論はこうだった。

「だって、数学勉強しても将来には絶対使わないじゃん！」

教師は諭したが、彼は聞く耳を持たなかった。

そんな少年がある日悟ったのだ。

「この世界は数学や物理の法則で支配されている！」

何が将来は使わないだ！

建築物どころか、落書きを書いていた何気ないペン１つ取ってもその製品や工程に無数のそれらが応用されているじゃないか！

そして高速道路のＩＣ（インターチェンジ）やジェットコースターだってクロソイド曲線のお陰で乗る人に掛かる負担は最小限に抑えられている。

更に言えばその曲線のラインはオウムガイの殻と同じ。更に言えばその曲線比率は１：１．６１８。

それは人間のへそまでの長さと全身の身長の比率と同じ。

黄金分割という。

最初はこんな雑学から入った彼だったが、その雑学は更に衝撃を与えた。

彼が大好きな幕末。その中で最も好きだった人物、坂本竜馬。彼が塾頭だった神戸海軍操練所。そこに来た塾生達が弾道計算を必死に勉強していた事を知ったのだ。

その日から彼は数学の虜になった。

彼の言い方をすれば洗礼を受けたと言っていい。彼にとって既に数学は神であり、信仰の対象となっていた。

だが、彼は数学者を目指そうとは思わなかった。
彼が志すのは彼流の実践的数学。
　それも、弾道計算に魅せられた経緯だからなのか、数学や法則といったものを用いて、それらの対極の象徴を支配する事を望んだ。すなわち、計算や法則に裏打ちされた手法で人命を奪うという事だった。
そうすれば神も褒めてくれるに違いない。
その時から、すでに彼は常軌を逸していた。
いつから狂っていたかの起源は彼自身も覚えていないのだが。
彼は高校を卒業すると、親の反対を振り切って自衛隊を目指した。
だが、そこではすぐに挫折した。
彼が望む事は出来なかったのだ。
　彼は質量、エネルギー、重力、風向、空気抵抗、全てを計算された狙撃をしてみたり、芸術作品のような爆破をしてみせたかった。
そして男は渇きに近い心を持て余し、契約の2年間が終わると、より実践的な環境を求めて世界の戦場を放浪する事となる。
それから、どれ程の時が経っただろうか……。

男はいつの間にか、爆破と狙撃のプロと呼ばれるようになっていった。

それでも彼の渇きは癒えなかったが、そんな彼をスカウトしに来た組織が現れた。

彼に要請されたのは後輩の指導と新商品の開発。彼もそこで自分が携われたものの開発にこの上ないやりがいを感じていた。とにかく、彼は渇きから解放され、ただただ完成の日を待ち望んでいたのだ。

だが、その組織もある日、突如崩壊の日を迎える。

辛うじて生き残った男だったが、開発と彼の心は宙ぶらりんとなってしまった。今では何人かの残党と共に組織のノウハウを生かしたグループを作り上げた。だが、彼個人は開発の完成とかつての組織を破壊した男への復讐だけを目的にしていた。

そして、開発していたものはこの前に完成した。

間のいい事に復讐する人物すら現れた。

あいつに私が味わった以上の絶望を与え、そして滅ぼしてやる……！

神も私に微笑んでくれているではないか。

男はモンテクリスト伯爵の気分になって笑う。だが、すぐに気を引き締めた。

……まずは裏切り者を裁かなければ。

彼はかつての組織において「シードル」というコードネームを与えられていた。

シードルとはリンゴから作られる酒である。

そして、彼の所属していた組織のカラーは「黒」

幕間２　異端邪説（後書き）

シードルは蒸留させるとカルバドスになります。
あと、別に理系の人を馬鹿にしてる訳ではありません。むしろ尊敬の念しかありません。

第８話　輸入雑貨店『Ｒａｓｔａ』（前書き）

これまでのおさらい？と、新一達が舞台に到着する話です。

第8話　輸入雑貨店『Ｒａｓｔａ』

「……ああ。また後で」
「服部君？」
「いや、志保だよ。用事が早く終わったからこっちに来るって」
「他になにか言ってなかった？」
携帯をしまって答える新一に蘭が尋ねた。志保とは体が元に戻った灰原哀だ。
「いや、特になかったな」
「そう」
「？」
一瞬だけ不思議に思ったが、すぐに忘れた。さっきまで一緒だった面々の印象が強すぎたのだ。
ベンチを片手で持ち上げる平和島静雄（へいわじましずお）。そんな男を上司に持つ、ドレッド頭の田中トム。語彙（ごい）が尋常なくあるのに、何故か文法がおかしいヴァローナ。寿司屋のビラを配るサイモン。茜（あかね）ちゃんに至っては転んだ時にスタンガンを落っことした。
治安が悪いとは聞いていたけど、ここまで人外魔境なのか？
これぞ、東京コンクリートジャングル……！
新一の脳裏に変な言葉が浮かんだ。

■■■■■

数分前

「んじゃ、俺らは仕事があるからな」

食後、６０階通りに出た時点で行く道が逆だと知ってトムが言った。
茜も柄シャツに色眼鏡のおじさんのお迎えで先に帰っていた。

ちなみにその時の新一は盛大な溜息をついていたのだが、誰も気が付かなかった。

「そういえばよ」

分かれてからしばらくして、トムが呟いた。

「あの高校生、どっかで見て事なかったか？」

「……そうすか？」

テレビをあまり見ない２人にヴァローナが説明する。

「工藤新一です。高校生探偵と呼ばれます。しかし、日本国において探偵という職業と彼の在り方、大いに異なります。正確には、捜査に積極的に協力する高校生です」

「ああ。そういえばテレビで見た事あったわ。凄いんだな」

「凄い……？　表現が曖昧で理解に困難です。ただ、関わった事件の解決率は１００％。協力も無償で行っているようです」
「平成のホームズってか。でも、あんな若い頃から事件に好き好んで立ち会ってんだから、どこかネジが取れてる奴かなとか思ったけど、会ってみると良い子だったな」
「……まともな家に生まれてノミ蟲に育つ奴もいますから」

ギリリリと歯軋りさせる静雄。ちなみにノミ蟲とは折原臨也の事だが、トムにはそれが分からなかった。だが、適当に嫌な奴の顔を思い出して同調する。

「それもそうか」

（若い頃に事件ばかり……）
私と似ているかもしれない。
少し違うのが、工藤新一が殺人事件で、こちらが戦場であったり、銃撃戦の只中という点。
……いや、全然違う。
そこまで考えて首を振った。

データによると工藤新一の父は作家の工藤優作。母は女優の工藤有希子。
こちらは武器商社の仕事にかかりっきりの父と、顔も覚える前に死んだ母。

向こうの方が余程上品だ。怨嗟の声に埋め尽くされる夢も彼は知らないに違いない。

「さ、次のトコ行くべ」
「……ひっクシュン……うす」

「……」
「相変わらずレスポンス悪いのな……」
トムのぼやきに答える事もなく、ヴァローナは無言で2人についていった。
そして、更にその後ろを尾行する影。ヴァローナだけは気が付いていたが、意図が分からずに放置していた。

■■■■■

「あそこよ」
メールで送られた地図を睨んで園子が指差す所を見て蘭が歓声をあげた。
輸入雑貨店『Ｒａｓｔａ』
輸入雑貨を扱う店で、外装から独特な雰囲気が出ている。店舗も思ったよりは大きくてコンビニ程の大きさはありそうだ。建物自体は2階建てだ。
オープンしたばかりという事もあって、店は若い女性客が数人入っている。男性客も1人だけいた。季節はずれのコートを着て、しきりに汗を拭いている。

暑いなら脱げばいいのに。
もっとも冷や汗だからコートは関係ないのだが、新一達に知るよしもない。

「いらっしゃいませ」

変な男性客に気を取られている間に店員が出てきた。出てきたのは線の薄い、大人しそうな少年だ。多分年も新一達と変わらないくらいだろう。そのアルバイトの少年に園子が尋ねた。

「あの、林戸(はやしど)さんっていませんか？」

ちなみに林戸とは奈倉さんの本名らしい。

「あ、えっと……林戸さんは奥で作業していますが、すぐに戻ると思いますよ。呼びましょうか？」

（小説に出てきそうな名前だな）

少年の名札を見た新一はそう思った。

そこに書かれていた文字は……。

『竜ヶ峰帝人(りゅうがみねみかど)』

第8話　輸入雑貨店『Ｒａｓｔａ』（後書き）

第2幕開始。ここまで読んでくださりありがとうございます。

さて、ようやく舞台に到着しましたｏｒｚ奥で汗を拭いているのは例のノミ蟲です。ちなみに……

【竜ヶ峰帝人】デュララララ！！の重要人物。非日常に憧れて上京した平凡な少年。ダラーズをお互いで助け合える良いチームにしようと頑張っています。別名、変人ホイホイ。分かりやすく言うと、彼が動いた時に事件が起きます。

第9話　一路平安（前書き）

いい加減にタイトルにネタ切れ感が……（汗）
あと、セルティが思いついていたらごめんなさい。

第9話　一路平安

首都高にて。

「どエライもん、持っとるなあ」

首都高にはいるが、彼らはアスファルトの上にはいなかった。セルティが作り出した影の上に乗っているのだ。黒いヘルメットを借りて、ハイテンションの平次にセルティは驚かされてばっかりだ。

最初は交機を振り切る為に影を飛ばしているのだが、流石に連中も葛原の薫陶を受けている。平気で掻い潜ってくるし、隙あらば影に乗って距離を縮めようとさえする。

葛原がいなくて本当に良かった。

多分大阪の彼は逃げ切れなかっただろうな。

そう思った時に、平次が言ったのだ。

「なあ、わいらもその影に乗って逃げればええんやないか？」

「……」

そ、その発想はなかった……！！

なんなんだ最近の高校生は！！帝人といい、杏里といい、この子と

いい。まさか、これがゆとり教育の成果……！

そんな意味の分からない事を考えながら、影を展開させては首都高に乗ったり一般道に降りたりをして、セルティはシュー（バイク）ターを走らせていた。……が。

まずい。

交機と追いかけっこしているのが長引いた。次の依頼人が指定した時間まで残り僅かになってしまったのだ。

どうしよう……。

「……頼みがある」

ＰＤＡにそんな文字を書きかけて消した。早とちりとはいえ、巻き込まれただけのこの子に頼むのは気が引けたのだ。でもどうする……？無理やり時間だけ合わせても背後には警官の群れだ。これだと仕事にならない。

仕方ない……今後は走り辛くなるけど、影の鎌で全員ぶっ飛ばすしか……。

「なんや？頼みって」

だが、平次には文字が見えていた。

「いや、実は運び屋をやっているんだが、次の依頼を受け取りに行く時間が近くてね。でも……」

心配するな。と続けようとしたセルティに平次が言う。

「せやったら、交機はわいが引き付けておくさかい、行きや」

「いや、それは危険だぞ」

「平気や。実はわいの親父は大阪県警の本部長なんや。もし捕まっても拳骨で許してくれるはずや」

正式には刀で膾切りなのだが、ランクダウンさせて言う。そこにも当然平次の希望も含まれているが、セルティはそれを信じた。

「分かった。すぐに戻るから持ち堪えてくれ。もし、振り切れたらここにメールして」

そう言ってメモを手渡した。

■■■■■

首都高の上でそんな戦友の会話が交わされている頃、蘭と園子は雑貨屋の売り物を見ては喜んでいた。アフリカ独特のデザインが彼女達の心を捉えたらしい。

様々な点を褒めちぎる2人と、彼女達を白い目で見る新一。

挨拶をしに来た帝人は、コートを着た客と話している。知り合いのようだ。

そんな光景がしばらく続いたが、やがて奥から背の高い女の人が現れた。

年齢は２０代の半ばくらい。ウェーブのかかった茶髪が輝いている。ラフな服装の上にエプロンをして、『林戸響子』という名札を付けている。その隣のポケットにキャップのないペンを突っ込んでいるあたり、いかにも働く女性だ。

「あなたが林戸さんですか？」

その園子の声に彼女は微笑んで白い歯を見せた。

「あなたがレットさん？　はじめまして、私が奈倉こと林戸響子よ。今日はお店にまで来てくれてありがとう」

「いえ、こちらこそ相談に乗ってもらったのに、割引までしてくれるなんて……あ、私は鈴木園子です。こっちが親友の毛利蘭とその旦那の工藤新一」

「はじめまして。高校生で旦那さんがいるなんて凄いわね」

「違います！　ちょっと園子！何言っているのよ」

響子のからかいに蘭は赤面した。すぐに園子を睨むが、彼女は笑って両手を合わせる。

「アハハハ、ごめん。つい、いつものノリで言っちゃった」

「いつものノリじゃないわよ。新一もなにか言ってよ」

「え、ああ。そうだな」

「ちょっと、聞いてなかったでしょ！　いっつも推理の事しか考え

てないんだから！この大バカ推理之助！」
「それとこれとは関係ねーだろ。なんだよ大バカ推理之助って」
こうして口喧嘩を始める2人を遠目に響子が言う。
「成程。夫婦だわ」
「ですよね～。でも、これでくっ付いてないんですよ？」
「いいんじゃない？　下手にくっ付くよりも楽しそうよ」
そういう考えもあるか……園子が感心すると、背後から男の声が陽気な飛んだ。
「あれ、響子ちゃん知り合い？」
振り返ると入り口に色黒と色白の男が2人立っていた。2人とも歳は大体響子と同じくらいだろうが、色白の方は痩せた長身で頬がこけている。
ちなみに声を掛けたのは色白の方だ。声を掛けられた瞬間、響子が少し緊張した様子を見せたが、新一しか気付かなかった。
だが、そんな様子をおくびにも出さず、響子は笑顔を男に向ける。
「ええ、チャットで知り合ったのよ」
それを聞いて男は新一達を見て頷いた。
「そっか、よろしくね。俺は店長の円藤修二。で、こっちの色黒が俺の後輩の村尾洋平」

「ども。店長の趣味で変なものしかないけど、ゆっくり見てってくださいよ」
「おい、変なものってなんだよ……って変なものか……」
さっきまでの元気そうな様子が一転、修二は一気に落ち込んでしまった。その可哀そうに様子に蘭が助け舟を出す。
「いいえ。少し見ただけですけど、好みのばかりでどれにしようか悩んでましたよ」
その言葉に修二は再び元気になって、洋平の肩を叩いた。
「ほれ、分かる奴には分かるんだよ。響子ちゃん、鍵ちょうだい」
「あ、はい」
響子から鍵を受け取った修二は店の奥の階段へと姿を消し、村尾はその手前のレジへ向かった。
「ま、こんな感じのお店よ。どういうのが欲しいの？」
「えっと今はアクセサリーを見ていました」
「だったら、こういうのは？」
こうして大波乱な午前中とは打って変わって、穏やかな午後が訪れたかに思えた。
むしろ、午前以上の事件が起こらない事を願っていた。

第9話　一路平安（後書き）

ちょっと妙なタイトルですね。意味は旅人に平安無事を祈る言葉だそうです。皮肉に受け取ってください。

【少し前の竜ヶ峰君と臨也さん】

帝人「臨也さん。汗どうしたんですか？」
臨也「え、ああ。ちょっと走ってね。運動の汗だから、別にあの女が俺の場所を静ちゃんにバラしたんじゃないかって焦った訳じゃないよ。ああ、そうさ。そんな事で俺が焦る訳ないだろう？」
帝人「？」

以上。冷や汗の理由でした。

第１０話　扉の向こうに

「あ、もうこんな時間か……あの、村尾さん。店長室って」
「ああ。階段あがった奥のドアだよ」

客が新一達と奥で品物を見ている男性客だけになって、しばらくした頃。帝人が時計を見て洋平とこんな会話をした。それから店の奥に見える階段を昇る。

「もう終わりかな？」
「違うわ。彼、今日からの新人だから覚えなきゃいけない事が多いのよ」
「はあ、アルバイトも大変ですね」

バイトをする必要のない園子が呑気な事を言う。
ちなみに蘭は父親がアレでも母親は有名弁護士。新一も金に困る事は決してない。想像も出来ないのは仕方がなかった。

園子と同じく適当に考えていた新一は、店のアルバイト募集のポスターを眺めた。
ボーリング場での記念撮影の写真で、ボールを抱えた修二を中心に洋平と響子。
それともう１人。修二達が帰ってくるまでレジを打っていたショートカットの女の子が写っている。写真の日付は２週間前だ。
その下には「時給９５０円　１日４時間、週４日から応相談！！未経験歓迎！！」「楽しい職場で働きませんか？」というポップ文字が踊っていた。

ふーん。そんなものか。

「あ、これってマイボールですよね」

写真のボーリング場のハウスボールはバスケットボールを模したものだ。写真のボールとは明らかに模様が違う。

そこに気がついたらしい園子が尋ね、響子が頷いた。

「ええ。なんか尊敬している人から貰った金運のお守りだそうよ。でも逆に怖くて投げられないんですって」

「……変な人ね。それで練習して上手くなればいいのに」

「プロボウラーのボールなんだろうけど、指が合わないんですって」

尚、その下には「シャイニング６０の屋上に最新プラネタリウム『メガスターダム？』が期間限定で来る！！」とか、まったくもってどうでもいいポスターも貼ってあった。

どうしてシャイニング６０の屋上まで来てプラネタリウム？隣にあるじゃん。

そんなどうでもいい会話を続けていると、帝人はほんの数分で戻ってきた。少しだけ目が泳いでいる。洋平が驚いて声を掛ける。

「どうしたんだ？」

その問いに、帝人は困った顔を見せた。

「店長室のドアをノックしても返事がなかったんです」
「トイレとかは？」
「いや、いませんでした」
「変だな……？　ちょっと俺見てくるわ」
不審に思った洋平が階段を上がって行った。新一もちょっときな臭いものを感じた。
「なんか急に慌しくなったわね」
「ああ」
園子も似たような感想を抱いたようだ。流石は「推理クイーン園子」か？
一方で、隣では蘭が恥ずかしそうに響子に口を開いた。
「あの、こんな時に悪いんですけど、お手洗いってありますか？」
「え、あるわよ。奥の階段を上がった右手にあるわ」
「ありがとうございます」
そして、今度は蘭までも行ってしまった。
それから数分後、今度は先に上がった洋平が降りてきて帝人に言う。
「修二さん寝ていたらしい。今起きたからもう少しして行くといいよ」
「あ、本当ですか？」
その言葉を聞いて帝人がほっとした時、階段から蘭が現れた。慌てるように階段を降りてきて、ちょっとの運動のはずなのに息が上がっている。

さっきの帝人以上に様子がおかしい。

「あ、蘭。どうしたの？」

「ねえ、ちょっと円藤さんの様子がおかしいの。ちょっと来て」

「えっ？」

その言葉に新一達は急いで2階を目指した。

2階へ続く階段を昇ると、目の前3m程には店長室の大きめなドアが見えた。ドアのすぐ左隣には窓がある。そして階段の右手には響子の説明通りにトイレがあって、その反対側には掃除道具を入れたロッカーがある。

新一がそこに着いてから蘭が言う。

「奥から呻き声みたいなのが聞こえて……あと何かが倒れるような音が」

それを聞いて新一はすぐさま店長室のドアを強く叩いた。

「円藤さん！！　円藤さん！！　大丈夫ですか！？」

それから黒いドアノブを回そうとするが、鍵が掛かっていて開かない。見ると鍵穴が2つもある。

「林戸さん、合鍵ってありますか！？」

「ないわ。鍵は社長のが1つだけ」

「くっそ……。村尾さん、ドアを壊すので手伝ってください！！」

急にテキパキ動く新一を呆然と見ていた洋平だったが、その言葉に

ハッとして立ち上がった。そして、2人で体当たりをしようとした時、背後からもう1人の男性が声を掛ける。

「僕も手伝いますよ」

（いつの間にいたんだ？）

振り返ると、ドアの隣の窓によりかかるように、コートを着た男性客が立っていた。この状況で笑っているのは腹が立つし、妙な邪気を感じるが、今はそんな事に構っていられない。

「お願いします！3、2、1で行きますよ！」

「3、2、1……！」

タイミングを合わせて体当たり。

一発目では手ごたえがなく2、3回と続ける。その後も道具を使いながらドアと格闘し続け、ようやくドアが壊れて開いた。

その奥の光景は……。

部屋の構造自体は細長い。

床は絨毯。

ドアの近くに窓があるが、そこ以外は棚が続いている。

更に奥にはパソコンと水の半分入った蓋のないペットボトルが置いてあるだけのデスク。

そのデスクの後ろにも書類やら写真やらを収めた棚があって、床には書類や白っぽい埃やらが散乱している。

だが、円藤さんの姿が見えない。

そう思った時に、新一の角度からのみ、デスクの隅に何かが見えた。

人間の右腕だ。

少し血に濡れている。修二はデスクと棚の隙間にうつぶせに横たわっていた。椅子が倒れている様子も見て取れる。

なっ……！？

「修二さん……？」

洋平が呆然と呟くと、腕の元へと走っていこうとする。

「待て！！」

万が一に殺人だった場合、このままでは洋平に現場を荒らされてし

まう。

新一が咄嗟に叫ぶが、洋平の耳には届いていなかったようだ。

そのままフラフラと円藤に近づき、肩を掴んで体を揺すろうとしたところで、追いついた新一が止めた。それから、新一が代わりに修二の体に触れる。修二は頭頂部には白い頭頂骨が覗くほどの傷を負っていて、血が流れている。鼻の形は変形し、周りにも血が張り付いていた。

まだ体温を失っていない体は随分と熱いが、声を掛けたり心音を聞いても反応はない。生きている様子も生き返る見込みもなかった。

念のために詳しく調べてから、新一は皆に告げた。

「……残念ですが、もう亡くなっています」

この言葉と共に、穏やかな午後は終わりを告げた。

第１０話　扉の向こうに（後書き）

熱中症から復活しました。
ここらへんは稚拙なりに複線を考えなきゃなので精神力を使います
（汗）
どたばたしているのは、半分仕様の半分実力ですｏｒｚ

第１１話　初動捜査（前書き）

もう漢字４字なら良いんじゃね。というスタンス。こっちの方が分かりやすそうですし（汗）

第11話　初動捜査

「……残念ですが、もう息はありません」

その言葉に何人もが絶句した。

「そんな……どうして？」

響子が搾り出すように呟いた。唇が紫色になっている。

「蘭、警察を呼んでくれ。皆さんも1階へ降りてください」

背後でドタバタとした音が聞こえる中、新一は冷静に状況を観察していた。

血痕は数箇所。大きく2つに分けると、棚などに飛んだものと、デスクに固まっている血溜まり。

棚に飛んだものは形状からすると、椅子に座った状態で出血している事を表していた。

固まった血溜まりは楕円状に広がっているが、ちょうどデスクを頂点とすると、そこから斜め左方向だけハサミで切り取ったように欠けている。恐らくは頭部に怪我を負った際、衝撃で鼻をデスクにぶつけたのだろう。

円藤さんがパソコンを見ている最中に傷を負ったとしたら、背後から人が殴れるスペースはない。単純な話で、すぐ後には棚があるからだ。そして、棚の周囲には棚から落ちたらしい書類やペンが散乱している。

何かの拍子に鈍器のようなものが落ちて、それが頭を直撃して亡くなったという可能性が高い。

これは、ただの不幸な事故……か？

だが、それを認めるには奇妙な違和感が生じて、新一は辺りをもう一度見渡した。

そして、脳裏を電撃が走る。

円藤さんはどれで頭を打ったんだ？

落ちているのは書類、書類、書類。それと埃。良く見ると結構カラフルだったり白いものも多いが、埃は元々そんなものだ。色んな色が合わさるから灰色に見える。

当然こんなもので人は死ぬ訳がない。

紙より重たいものといえば、L判の写真立てくらいだ。プラスチック製で、修二と洋平と黒人が数人写っている。遠くに写る国旗からジャマイカに行った時のもののようだ。だが血痕はないし、こんなものが落ちても人は死なない。
精々1m程の高低差で人を死に至らしめるほどの重量があるのだ。当然重たいだろうから、そんなものが遠くまで転がるはずもない。

つまり事故のはずなのに、その傷を与えたものがどこにもない。

これは事故じゃない……事件だ！

だが、どうやって？

時間は洋平が降りてきて、蘭が呻き声を聞くまでは1分もない。それから扉が開くまでも数分。だが、その間には物音らしい物音はなかった。詳しく話を聞かないと分からない事もあるが、空白の時間はあまりに短い。

まず、鈍器か拳で殴るという方法は……無理だ。正面にいる相手が鈍器を振り上げたら、顔見知りだろうと抵抗くらいは見せるはず。それに数分で仕留めて痕跡も消すのはボクサーでも厳しいだろう。それにもし背後から襲って、その後に遺体を移動させて凶器を隠したとしても、それを出来るだけの時間は外部犯であってもない。

2階にいる人を鈍器で撲殺する通り魔とか、凶器が窓から落ちたって事はないよな？

新一も信じてはいないが、今日は信じられないものばかりを見ただ

けに一応窓も確認する。すると鍵は閉めてあった。

更に念の為に確認するが、一応この窓の下は足場代わりになるものは多く、足跡と思えなくないような痕もある。だが、そこらへんにいるカラスが寝ていたのかもしれないし、そもそも１階から昇るのは難しそうだ。平和島静雄なら出来るだろうが、一般の人間には出来ない。

そして窓の向こうにはすぐ隣のビルがあって間隔は２ｍくらいある。ちなみに地面は路地裏で、建物の位置などで通りからは死角になっているが、何も落ちていなかった。

……可能性だけは考慮するべきか？

思考が止まった時、デスクからジジジという微かな音が聞こえた。急いでパソコンのディスプレイを見ると、スクリーンセイバーに切り変わった音だった。今切り替わったのだから、円藤が最後に何を見ていたかは分かるはずだ。

事件と関係ないかも知れないし、あるかも知れない。
そう思った新一はマウスを動かして、スクリーンセイバーを止めた。そのページは店の外観を写した壁紙だったが、隅に最小化されたウィンドウには、『ＤＯＬＬＡＲＳ』というサイト内のコミュニティ掲示板が開かれていた。

ミタ　【最近、ダラーズの中で悪い事をしている人達を襲うグループがあるんですって】
ラスタ【でも、ダラーズってルールがないのが強みじゃないですか】
ミタ　【ですからぁ、その人達も勝手にやってるって事らしいです

よ】
ラスタ【怖いですねえ。念のために聞きますけど、何か特徴ってあるんですか？】
ミタ　【ええ。確かサメの牙のような柄のバンダナを着けていたって噂です。念のため、そんな人達が近くにいる時は変な事しない方がいいですよ】
ラスタ【変な事……裸で踊りだすとかですか？】
ミタ　【何言っているんですかぁw】

ＤＯＬＬＡＲＳ……ダラーズ？

掲示板は過去ログだったが、その名前をどこかで聞いた事がある気がした新一は、とりあえずその名前をメモした。

■　■　■　■　■

（それにしても、なんて可哀そうな被害者なんだろうねえ）

折原臨也は捜査を続ける新一の背中を見ながら修二に同情した。もちろんそれは心からの哀悼の意ではなく、皮肉に満ちたものだったが。

彼が修二に同情した理由は簡単。

扉が開いた時。修二の死が明らかになった時。そして新一が捜査を始めた時。

この3回の間で笑った人間の延べ数は、ここに集まった人数よりも多いのだ。

これを可哀そうと言わないでどうする？

修二が死んでショックを受けた人間より、そうじゃない人間の方が圧倒的に多い。工藤新一に至っては今や目を輝かせて手掛かり探しに夢中だ。

せめて手くらい合わせてあげればいいのに。

だが、そんな彼だからこそ、臨也は邪気のない微笑みを満面に浮かべ、視線を注ぐのだ。

そして想像する。

もし、この男に己の矛盾を突きつけてやったらどうなるか。間違いなく認めないだろう。だが、矛盾は事実だから彼の心にしこりと

なって残るかもしれない。もし、そうじゃなければ、彼の大事な人間を片っ端から巻き込んでもう一度突きつける。

それから彼が矛盾に苦しんだ頃に臨也は悪人の顔のままで救いの手を差し伸べるのだ。

地獄からずっと高い所まで引き上げて、押し上げて、臨也に依存し1人で降りれなくなった辺りで手の平を返す。

そこで自己崩壊していく工藤新一を眺めるのも面白いかもしれない。もしかしたらそこで予想を裏切る伸びをするかもしれない。

だが、このまま何の指摘もせず、ただ歪み続ける「救世主」を眺めるのも面白い。

折原臨也にとって工藤新一はもう1人と共に宝の山なのだ。

だからこそ、俺はこんなプレゼントを持ってきたんだぜ？せいぜい楽しんで解き明かせよ。

ま、正直ここまで上手くいくとは思わなかったけどね。

もっと新一を眺めたかったが、今日は観察対象が多い。それに彼が閃く瞬間を見れるのはもう少し後になりそうだ。

そう結論を出した臨也は、次に目撃者達を観察しようと階段を降りていった。

第１１話　初動捜査（後書き）

それと本当は事件発生から5分くらいで、救急車呼ぶべき時間なのですが、あまり触れないでください。推理物でも良くあるでしょう？（汗）

第１２話　ひとまず整理を

蘭の通報を受けて、目暮警部達が到着した。
関係者は一階に集まり、周囲は騒然としていた。響子は蘭と園子が見ている。一見気が弱そうな帝人だけがちゃんとして、店員では１人だけエプロンも着けたままだ。根は頑強なのだろう。

その面子の前で目暮警部が口を開く。
「死亡したのは雑貨店店長、円藤修二２８歳。死因は詳しく調べんと分からんが、状況から推測すると外傷性ショック死の可能性が高いだろう。そして、その時現場にいたのが毎度おなじみの……」
「僕と蘭と園子です。あと店員の村尾洋平さんと林戸響子さんと竜ヶ峰帝人君。それと……」

コートを着た男を一瞥する。そういえばこの男の名前はまだ知らない。男は新一の視線に気が付くと、邪気のある微笑みを浮かべて言う。

「ただの一般客。折原臨也２３歳です」
「……」

何故か聞いているだけで苛々する自己紹介だった。口調を例えるなら駆け出しのアイドルという感覚だ。間違いなくわざとやっている。
それに耐えた後、目暮警部は自分の手帳の簡単な名簿を作った。
円藤修二　（２８）雑貨店店長。

村尾洋平　（２６）雑貨店店員。円藤の大学時代の後輩。
林戸響子　（２５）雑貨店店員。
竜ヶ峰帝人　（１７）高校生。雑貨店アルバイト。
品川結衣　（１９）大学生。雑貨屋アルバイト。
工藤新一　（１７）高校生。
毛利蘭　（１７）高校生。
鈴木園子　（１７）高校生。
折原臨也　（２３）嫌い。

他に何か書き足そうと思っても、大した事はなく、手帳をしまった。詳しく聞こうにも皆呆然として、特に響子の様子が酷い。品川結衣も既に帰宅していて、現在を呼び戻している最中だ。話を聞くにはしばらく時間が必要だったのだ。

不毛な作業を終え、新一と2人で現場に上がる。

「で、これが殺人だというのは本当かね？」
「断言は出来ませんが恐らくそうでしょう。ほら、棚にあっただろう物は散乱していますが、人に傷を付けられるものは落ちてないでしょう？

最もこの部屋の入り口付近の棚には商品の在庫が置いてあります。その中には凶器になりえるものもありますが、見る限りその中に血痕が付着したものはありませんでした」
「じゃが、犯人がふき取ったとしたら」
「……」
「どうしたのかね？」
「……その時点で事件ですよ。警部」
「うむ……そうだな。それと工藤君」
気まずそうに言うと、目暮は新一にあるものを渡した。ビニール袋に保管されているが、中身はペットボトルのキャップだ。
「これは……」
「被害者が握っていたものだ。ここに書いてある数字はもしかしたらダイイングメッセージかも知れない」
「！！」
そこには【１９２７】と読める数字が殴り書きされていた。
「分かりました。参考にさせていただきます」
そんな会話をしながら会話を続ける２人をにこやかに臨也は見送る。
「そして、これが事件直前の皆の動きと居場所です。実際の時間はもう少し長かったり短かったりするかもしれないですが、流れはこうなっています」

１３：２０　林戸。清掃作業等の為２階、店長室へ
１３：４０　円藤、村尾。一時外出。
１３：４５　新一、蘭、園子。店に到着。
１４：００　林戸。１階へ。
１４：０５　円藤、村尾。店へ。円藤は２階店長室へ
１４：３０　竜ヶ峰。２階へ。
１４：３５　竜ヶ峰。１階へ「円藤が応答しない」。これを受けて村尾。２階へ。蘭。２階へ。
１４：４０　村尾。１階へ。円藤の最後の生存確認。（入室、退室時の会話のごく一部は蘭も確認）。
１４：４１　蘭。円藤の悲鳴を確認。全員２階へ。
１４：４６　遺体発見。

この事件の不審点。
１　凶器が現場に残されていない。
２　犯行可能時間が極端に短い。
３　遺体発見時、部屋が密室であった事。

ちなみにこの不審点は犯人を除けば新一と警察しか知らない。

「ここに出てこない人は基本的に１階にいます」
「という事はなんだ、犯行時間は１分以内という事かな？」
「ええ」
「それは、流石に事故じゃないのかね？」
「そうかもしれません。ですが、どの道凶器が何かをはっきりさせないと」
「うむ。高木君！　佐藤君！」
「はいっ！」「はい」
「念の為、この建物に外から出入りした人物の目撃証言がないか当

たってくれ。凶器はひとまず検死が終わらないと」

目暮が刑事達に指示を出している間、新一は再び現場を確認した。

遺体が運ばれた分は見えるものもあるかも知れないからだ。

そして最初に状況を再現しようと、椅子の前に立った。

「まず、円藤さんはパソコンで作業をしていた。そして、その時に、何かの拍子で頭に鈍器が落ちてきた。その衝撃で円藤さんはデスクに鼻を強打し、またその反動で椅子から転げ落ち、発見時の体勢になる……か」

ここまでは筋が通っているように思える。だが、１つの疑問が浮かんだ。

鈍器が棚の上にあったと仮定して、それが落ちてくるような拍子ってなんだ？

そう思った時に妙な物を見つけた。屈んだから見えたのだが、デスクの４つの脚だ。正確には脚の下の絨毯だ。

よく絨毯の上に重たいものを載せると、その形に凹む。だがここは違うのだ。

一番凹んでいるところは数センチ棚寄りにあって、そこから脚のある位置まで直線状に凹みが続いている。いや、途中は少し禿げてさえいる。

位置を動かしたとしても変だ。そう思った時だった。

デスクの下、引き出しの部分に靴の痕がついていたのを見つけた。
それもいくつかある。
なんだ？
新一が考え込もうとした時、新たな発見があった。靴痕から一番近い脚から棚に向かって、絨毯の上に一本の紐が伸びている事に気がついたのだ。
これは……！
慌てて棚の背後や上を調べると、その紐は棚と棚の隙間を通って、棚の上に転がる木片に結び付けられていた。その途中では紐が逸れないようにか、ストローの切れ端とビニールテープでコースを作られている所が何箇所かある。
また木片は大体３ｃｍ平方で高さは５ｃｍ程。更に調べると同様の木片が２つ見つかったが、紐が結び付けられているのはその内の１つだけだった。
この仕掛けをどのように使うかはともかく、大体１５分もあれば充分に準備できる仕掛けだ。
そして……その仕掛けの近くにボールペンのキャップが転がっていた。

第１２話　ひとまず整理を（後書き）

取り合えず、ここまでが出題篇です。これからヒント篇になって解答に移りますが、この時点でも簡単かもですね。ただ事件＜キャラ達というつもりなのでお許しください。

第13話　君子豹変

それからも新一は現場にしばらく留まっていたが、やがて部屋を一端出ようと思ってドアノブを握った。鍵は既に壊れているから引っ張れば開くのだが、そのドアノブを握った瞬間、奇妙な違和感があった。

それに扉が重い。

力を入れて引くと目の前に2人の人物がいて驚いた。

「……という目撃情報がありました」

「それは本当かね！？」

目暮と佐藤だった。この様子だとずっとドアの前に立って会話をしていたらしい。2人も突然現れた新一に驚いていた。

「おや、工藤君。ここに居たのか」

「え、ええ。警部もここに？」

「うむ。あ、そうだ。君にも聞いてもらおう。佐藤君、もう一度頼む」

「はい。真向かいの本屋で待ち合わせした人があそこに入って行く黒ずくめの人影を目撃したそうよ」

「何ですって！？」

新一は驚愕した。

この事件に黒の組織の残党が関わっているのか？

1度志保に聞いた事がある。
東京に幹部クラスの人間が潜伏していると。確かコードネームはシードル。
まさか、アイツ……遅れるって言ったけど、ヤバイ事に巻き込まれてないだろうな？
電話してから随分時間が経った。それなのに志保は一向に姿を現さない。
「まあ、その目撃情報によると、入っていくのを眺めていたうちに、死角にすぐに出たみたいだから道を間違えたのかもって言っていたけどね。顔もまったく見えなかったそうよ」
佐藤の言葉に新一はすぐ思考を切り替えた。その時。
「警部！　来て下さい！」
階段から慌しく千葉が現れた。何か見つかったのだろうか。その声に促されるまま、3人は下に降りていった。

■　■　■　■　■

「念の為に聞かせてもらうが、これは何かね？」
急ごしらえの取調室と化した、店員の控え室。

未だにエプロンを着けたままの帝人は俯いたまま椅子に座っていた。ただ、空気すら凍りつかせかねない冷気を放っている。先ほどとはまるで別人だ。

目暮が指し示したのは、目出し帽とゴーグル。目出し帽はサメの牙の柄の布が縫い付けられている。これらは彼の鞄から出てきたものだ。

帝人はしばらく黙っていたが、やがて感情のない声で、ゆっくりと答える。

「今警部さんが言ったじゃないですか。目出し帽とゴーグルですよ。私が持っていたらいけないものはありますか？」

えっ？

新一は面食らった。帝人の感情のない話しぶりはどうしたのだろうか。一人称も変わっている。

纏う冷たさといい、言葉の選び方話し方といい、知能犯と対峙しているようだ。

「いや、別に持っていたらいけないという訳ではないが、何故持っているのかなと思ってね」

「当然持っているからには理由がありますけど、それが今回の事故と関係あるんですか？」

「それは我々が考える事だ」

「そうですか？　今回の事故で店長が亡くなった時には私はみなさ

んの前にいましたし、覆面の男もいませんでしたよね。何を考えるんです？」
「む……」
尋問をやり慣れているはずの目暮が唸らされてしまった。代わりに新一が聞く。
「俺にも参加させて貰っていいかな？」
「ええ。構いませんよ。高校生探偵の工藤新一さん」
「知ってたんだ」
「ええ。ダラーズＭＬに写メが流れていましたから」
こいつもダラーズか。そう思いながら鞄の中を見ると中には筆記用具くらいしかなかった。一応確認した筆記用具はボールペンとシャーペンと消しゴムのみで大した手掛かりはなかった。
ん？こいつもダラーズか？
自分の台詞に戸惑った新一は、午前中に絡んできた連中もダラーズを名乗っていた事に気がついた。喧騒の中の一言を思い出す所は尋常ではない。
「そういえばさ。俺達、ここに来る前にダラーズの人達に囲まれて危なかったんだ。君もそういう人達の仲間なの？」
「……いいえ」
「だって、ダラーズなんでしょ？」
「ダラーズにもいろいろな人達がいるんですよ。特にルールもありませんし」
「でも、最近は悪い人達が襲撃されているそうじゃないか」
「襲撃は良く分かりませんが犯罪行為等をしている人達の中で退会

する人は最近少なくないですね」
「へえ？その退会って彼らの意思なのかな？」
「……さあ、でも退会はログインしないと出来ないですから。それも事故とは何の関係もないようですね」
「そうだな、工藤君。そろそろ話を元に戻してくれないかな？」
あからさまに探るような目つきの新一とまったく表情を変えない帝人。
「……分かりました。それじゃ確認するけど、2階にいた間は寝ていて出てこない円藤さんを待っていたんですよね」
「はい」
「扉の前でずっと立っていた？」
「そうです」
まあ、5分じゃ何も出来ないか。
「そっか。じゃあ次は人間関係について聞くけど、君と他の店員との関わりや、君が彼らを見ていて思った事などを教えてもらえないかな？」
「特にないとしか言えません。私のアルバイトが始まったのは今日の午後からで、店長とも2日前にここで行った面接と今日で2回会っただけです。他の人は面接の時に会ったかもしれませんが、基本的には今日からです。なので、人間関係と言われましても、何も分かりません。名前も今日覚えましたから」
そういえばそうだったか。
頷いた新一はいい加減質問を終わらそうと考えた。

帝人以上にタチの悪そうな男がいるから、その前に精神をすり減らしたくはなかったのだ。

「……最後に1つだけ聞くけど、ダラーズは好き？」

それを聞いた瞬間、帝人の顔に哀しげな色が混ざる。

「ええ。でも、もっと」

「？」

「もっと、皆で助け合えるようになれればいいと思います」

「……そっか。長引かせてごめん。もういいよ」

だが、新一がこの事件で精神をすり減らされたのは実はこの瞬間だった。

先ほどまで無表情で淡々と言葉のみを吐き出していた帝人がぱあっと微笑んだのだ。それも悪意のある笑みではない。歳相応と言うのもおかしいくらい、純粋無垢な好意だけを詰めた温和な微笑み。

「いえ。でも、僕と同じ高校生なのに工藤さんって凄いですね。なんでここまで調べているかは分かりませんけど、頑張って捜査してください」

――――――――！！

背筋を触手に這いずり回された気分だ。

同じ人間のはずなのに、瞬きの間に入れ替わったと信じたいくらいに、気味が悪い。

帝人はすたすたと出て行ったが、目暮と新一は時が止まったように

動けなかった。これまでの会話の意味を正確に把握しているだけ新一の動揺は激しい。

あれは一体、何なんだ…？

先程、帝人は「ダラーズは自分のパスワードを入れてログインしなければ退会できない」と言った。だが、掲示板には「悪い人を襲撃するグループがいる」と書いてあった。両者が本当ならば、恐らく叩きのめした後に携帯を奪い、退会させているのだ。

そして帝人はそうした襲撃グループの特徴であるサメの牙の柄の布を目出し帽に縫い付けていた。彼はそういう事に加担しておきながら、あんな顔を新一達に見せたのだ。

そして、おそらく、この一連の会話や表情の中に演技はない。無邪気な笑みを見せるのと同じ精神で冷酷非情に振舞う。この落差はなんなのだろうか……。

いや、今は忘れよう。捜査と関係ない。

明らかに自分に対する誤魔化しなのだが、そうでもしなければここから動き出せそうになかった。

そして、彼らがようやく動けるようになった時は次の人が入っていた。

「どうしたんですか？　2人して顔色が悪いですよ」

「あ、いえ」

「順番だって言うから来たんですけど、まだ早かったですか？」

「いや、大丈夫です。では、お手数ですが、お名前と職業を確認させてください」

「ええ。折原臨也、職業は情報屋です」

黒いコートを着たその男は、そう名乗ると椅子に深く腰掛けた。
邪気のある笑みにほっとしたのは、恐らく人生でもこの時だけだろう。

第１３話　君子豹変（後書き）

最近の臨也のうざさはラストの説得力作りだったり（汗）
タイトルと意図する意味は若干異なりますが、突っ込まないでください。

第１４話　折原臨也の罪滅ぼし

「で、何を知りたいんですか？」

臨也が聞くのはもっともだった。何故なら彼はあの時以外は２階に行く事もなく、ずっと１階にいたのだ。

「竜ヶ峰君とはどういう関係ですか？」

「お友達ですよ。たまたま知り合いになる縁がありましてね」

「それはダラーズに関係がある事ですか？」

「さあ、どうでしょうねえ」

ニイと歯を見せ、意味ありげに言う臨也に、新一は冷静だった。

「話してくれないんですか？」

「私は情報屋ですから。同じ暴力機構の暴力団からはちゃんと情報料を頂いているんですよ。だから捜査協力とは言え、警察にだけ無料で喋ったら商売になりません」

あくまで舐めたように言う臨也に目暮は怒った。

人が死んだというのに、この男はなにを考えているのだろうか。睨みつけるが、臨也は椅子に深くもたれたままだ。

「何！？　捜査に協力する気がないのか」

「だから見返りがあればすると申し上げたじゃないですか。でも警察はお金持ちでしょうから、安くはないですけどね」

火にガソリンを注ぐ臨也。目暮はいよいよ怒りが収まらないが、臨也は無視した。そして、椅子の前に置かれた長四角のテーブルに身を乗り出すと新一に囁く。

「……だけど、俺も流石に高校生から金を取る趣味はない。この警部さん達に席を外してもらったら、ある程度の事までは話してあげられるよ。まあ、この店の人間関係には詳しくないし、内容次第では申し訳程度の謝礼はふんだくるけどね」

■■■■■

数分後。ようやく目暮警部を説得した新一は臨也の方へ向き直った。それから聞く。

「どうして俺なら教えてくれるんですか？高校生だからって口を開いてくれる人には見えないんですけど」

それを聞いて臨也はニヤリとした。

「ふふっ、言うねえ。確かに俺は何の見返りもなしにこんなサービスしないさ。実は罪滅ぼしなんだ」

「罪滅ぼし？」

その言葉がここまで似合わない男もいない。だが、臨也は深く頷くと、笑みを消して続けた。

「実は昼間に君たちを襲った連中いただろ？あれ、俺のせいなんだよ」
「何？」
「実はさ。今日の午前中、駅前で君たちを見かけたんだ。俺の友達には君の大ファンがいてね。だから教えてあげようと思ったら、間違えてダラーズ全体のＭＬに流しちゃったんだよ」
「……そうだったんですか？」
「そう。だから、それを見た連中に君が絡まれた時は焦ったよ。それから、なんとかして助け出そうと思ってさ。情報屋なりにいろいろ調べたんだよ？でも、あんな事になっちゃったし。だから、その分を今ここで返したいって事なんだよ。分かってくれたかな？」
あんな事とは平和島静雄の事に違いない。
情報屋の命は情報の信頼性だ。だから実際の経緯や言い方のニュアンスはともかくとして、嘘は言っていないのだろう。新一はそう判断した。
「取り合えず、聞いたら答えてくれるって事だけはわかりました」
とはいえ、だからと言って「そうですか、あなたは良い人ですね」と思える訳でもなく。
人の心の隙間を埋める某サラリーマン並みに怪しいこの男を信じたり、近づけば、破滅が訪れるくらい目に見える。
だから信頼しないが、情報だけは利用させて貰うという意思表示をしたのだ。
そして、この返事に臨也は初めて見せる悪意のない笑みで返した。
「流石は工藤新一だね。上等だよ。取り合えず何を聞きたい？」

「そうですね。どうせならさっきの情報屋なりにいろいろ調べてって言う話を教えてもらえませんか？」
「いい質問だ。君に因縁がある連中だしね」
そういえば、彼らも「俺らのボスがよ、前におめーに痛え目見たって言うからよ」って言っていた。取りあえずはそれをダシに臨也の能力を把握しようかと思ったのだ。

一応言うが、まだ捜査とは関係ないつもりだ。

「彼らはダラーズ内でドラッグを販売している。構成員は主に大学生とかなんだけど、中核には裏社会に精通した人間が複数いるようだ。
大麻と何かを合わせてプレミアムドラッグを作って売る手法や組織のつくり方や隠し方が巧妙だからね。第一、まだ粟楠会ですら、そういった組織の存在があるらしい事しか把握してない。
最近は別の組織からも調査依頼があって調べていたけど、面白い事が分かったよ」
「なんです？」
「そこのボスの斉田という男。一応会社経営者って事になっているんだけどね。この男が４年程前に起きたビル爆破事件の現場にいた。これがその写真だ」
そして、臨也は一枚の写真を取り出すと、その中の１人の中年男性を指差した。そして、新一は絶句した。

その無言の間を吟味するように、臨也は目を閉じ、やがて語りかけた。

「この男自体は見た事がないかも知れないけど、その隣の男は面識があるよね？　例の事件で死んだらしいけど」

「……ああ…こいつはジンだ」

黒ずくめに銀髪の男。
明らかにジンと分かるその人物が臨也の指差す男性と、会話をしながら歩いている所だった。服装は同じ黒ずくめ。

「この写真は俺の情報網が独自に手に入れたものさ。だから今日まで残っていた」
「まさか……黒の組織の残党がこの街に……！」
「そのまさかだよ。もしかしたら午前中の騒動で、君がこの街に来ている事を既に知っているかもしれない」
「……そう…かもな」

「そして、とどめだ。工藤君。その斉田が経営しているって会社。
……ここの雑貨店の取引相手だよ」

なんだって？

新一は自販機でも投げ付けられたような衝撃を感じた。そんな頭に佐藤の言葉が過ぎる。

――――――1人の人物が、あそこに入って行く黒ずくめの男を目撃したそうよ。

まさか、こんな所と繋がるとは……！

そして、あれから何度掛けても繋がらない志保の身を思って冷や汗が吹き出した。黒の組織は裏切り者を決して許さない。

その2つを中心とした無数の想いの嵐に、新一の心は揺れに揺れた。

だからこそ、それらと匹敵するくらいに肝心な事に彼は気が付かなかった。

それは情報だけもらうというスタンスから自分が外れてしまったと

いう事。
　言葉の衝撃度に気が付けなかったのだが、自分の心をかき乱す全ての想いは臨也の言葉を契機に強まったという事。
すなわち、彼の言葉を言葉のままに受け入れてしまっていたのだ。

それでも、帝人の豹変に不意を突かれなければ十分に気が付けたというのに。
たまたま臨也がトイレに立った間に行われた荷物検査で順番が入れ替わってしまったのだ。
そして、衝撃を受けた新一は最初から意地悪く振舞う臨也に安心のようなものを抱いてしまった。

そして、新一の友人で、唯一臨也の危険性を把握している人間は音信不通。

止められるものは新一自身しかなく、折原臨也の罪滅ぼしはまだ続く。

第１５話　盤根錯節（前書き）

処理に困難な事柄の意。

第１５話　盤根錯節

「……何を取引していたんですか？」
「流石にそこまでは分からないな。まだ円藤と村尾しかいない頃という事もあってね。分かるのは商談で上の部屋を使った事があるという事だ。大体週に１回ペース。一番新しいので、大体３週間くらい前かな？何かトラブルがあったらしい」
「……それでか」
「？」
「いえ、こちらの話です。では次の質問です。サメの牙のバンダナを着けたグループについて教えてください」
「もしかして、帝人君の荷物から出てきた？」

新一はゆっくりと頷いた。

「そっか。彼らはダラーズ内の犯罪に手を染めるグループを襲撃して退会させているグループだよ。主な構成員は違うカラーギャングから来た連中だけど、連中もどっちかというと性格的には粛清される側だから、新しいリーダーの指示なんだろうなあ。まあ最近は連中の話だと１つのグループを怪しいと睨んでいるけど、まだ証拠を手に入れていないって言っていたよ」
「証拠がない？」
「怪しいだけでは動けないんだって」
「……」

妙な所で几帳面な連中だな。それもリーダーとやらの指示か？

「さて、この事件に関係ありそうな事柄はもう話したと思うけど、何か聞きたい事はあるかい？」
「１階にいた時や、２階に上がった時に不審なものはありませんでしたか？」
「ないよ」
「最後に１つ。なんでずっと笑っていたんですか？人が死んだんですよ」
「え？　ああ。そんな事か」
「そんな事じゃねーよ」
「笑うくらい君でもするだろ？でも、そうだねえ。その状況で笑う事に理由をつけるとすると、俺はねえ、人間が好きなんだよ」
意味の分からない事を言う臨也に新一は怒りが湧いた。
人が好きだから人が死んだ時に笑ってる？何言っているんだよ。
「はあ？　人間が好きだっつうなら殺人とか許せねえだろ、普通」
「それは君の意見の押し付けだよ。俺が好きなのは人個人じゃない。人間という種だ。だからそいつの色んな側面が見たいんだよ。分かりやすく言うとほら、好きな子に怒った顔が見たくてわざとちょっかい出す子がいるだろ？　あんな感じ。それがこういう事件ではもっと濃厚な愛憎が渦巻いてそうじゃないか」
この考え方は許せない。そう思った新一は臨也を黙って睨みつけた。
「参ったな。君なら分かってくれると思ったんだけど」
「なんだよそれ。分かる訳ねえだろ！」
「だって、君も笑っていたじゃない」
「は？」
一瞬唖然とする新一を尻目に臨也は立ち上がると、出口を目指した。

「さて、最後の質問も終わったから俺は行くよ。バイバイ」
「おい、待て！」
だが、その頃には既に臨也の姿はなく、代わりに目暮警部達が入ってきた。
「何か分かった事はあったかね？」
「ええ。いろいろありました」
目暮の心配そうな顔を見て、新一は自分が振り回されかけていた事に気がついた。
ダメだ。冷静にならないと……。
深呼吸して、心を落ち着かせ……くそっ。
それでも音信不通の相棒がいる事だし、心は落ち着かない。
「では次の人をお願いします」

■■■■■

それからは洋平が呼ばれた。洋平の所持品は筆記用具と葉巻とライターと痛み止めとプリントされた瓶には赤と白のカプセルがいくつか入っている。

「では円藤さんと最後に話したのはあなたですが、どういう会話をしていたか詳しくお願いします」
「ええ。まず2階に上がって扉を何度か叩きました。その途中でえっと、君のお友達の女の子が上がってきた位で反応があったんです。それから修二さんが出てきて、一端部屋に入りました。で、しばらく世間話をした後に竜ヶ峰君を呼びに降りて……でもまあ、誰も見ていないでしょうから証拠はないですけど」

視線を伏せた洋平に新一が首を振る。

「いいえ。実はあなたが扉を開けた円藤さんに『どうしたんですか？』といって何かを答える円藤さんの声と、出るときの『じゃ、もう少ししたら竜ヶ峰君を呼びますよ』『ああ。じゃそれまでに何とかしておくわ』という会話は蘭も聞いています。念の為に聞いておきますが合鍵とかはないんですよね？」
「ええ。合鍵はないですよ。確か複製も不可能って言って修二さんが言っていました」
「そうですか」

ちなみにそのたった一つしかないカギは修二が倒れていた近くで見つかった。

「午前中に店長室に入った人はいますか？」
「いや、円藤さんも店に出てたから誰も入ってなかったと思います」

そうか……新一はメモを取った。

「話は変わりますが、最近トラブルはありましたか？」
「いえ、特になかったと思います」

「あの、この店は最初にあなたと円藤さんが立ち上げたそうですが」
「ええ。修二さんが海外好きで、一緒に行こうってよく誘われたんですよ。それで何度か行くうちに円藤さんが、こうしたものを売る店を作りたいって言い出して」
「ちなみに林戸さんとはどういう知り合いですか？」
「彼女はアフリカでＮＧＯ活動していた時に会ったそうです。でも、この前たまたま日本で再会して、仕事がないっていうから修二さんが誘ったんですよ」
「成程……それは大体いつですか？」
「そうですね。開店する少し前なので１ヶ月前くらいでしょうか」
「分かりました。最後に１つだけ質問しますが、円藤さんは几帳面な性格でしたか？」
「いや、几帳面で言えば俺や林戸さんの方が几帳面かな」

■■■■■

「工藤君。さっきから余計な質問が多くないかな？」
「ええ。犯人の目星はついているんですが、その人が単独で犯行を行うのは難しいんですよ。だから今はどんな手掛かりでも欲しいんです」
「じゃが、このままだと事故として処理するしかないぞ」
「そうですね。でもなんとかします」
「そうか。では次は林戸さんだ」
いよいよか……。あまり期待は出来なさそうだけど。

泣き腫らした顔の響子が入ってきた。持ち物は財布と携帯電話のみ。家が近くにあるからなのだそうだ。

「落ち着きましたか？」

「ええ」

「では質問します。私達が来る前、あなたは店長室にいたそうですが、何をしていましたか？」

「掃除や在庫の整理をしていました」

その後は新一の予想通り、新しい情報はなかった。響子と修二達が知り合ったきっかけも洋平の言葉通りだった。それどころ新一が知りたがった黒の残党に繋がる話や薬の話も一切聞き出せなかった。

新一は質問を打ち切ると、最後にポケットからペンのキャップを出して、響子に見せた。

「あの、林戸さん。ずっと言おうと思ってたんですが、これ林戸さんのですよね」

「あ、そう。探していたのよ」

「いつからなかったんですか？」

「今日よ。さっき気が付いたの」

新一は深く頷いた。

「早く見つかってよかったですね。ですが、これ少しだけ借りていいですか？」

「？ええ。構わないけど……」

第１５話　盤根錯節（後書き）

大変に雑でしたｍ（＿＿）ｍ　特に後半……ｏｒｚ
許してください。精進致します。

第１６話　ガーネットの石言葉

「あの、新一を知りませんか？」
「へっ！？」
突然蘭に声を掛けられた佐藤美和子刑事はびっくりしすぎて立ち上がった。
最初は事故だと思って来てみれば、殺人事件の可能性が濃厚で。現場に工藤君がいた時から何かあるんだろうなとは思ったけど……。この事件が今日中に終わるとはとうてい思えない。
あ～あ～。高木君が良いお店探してきてくれたのに。
なんて惚気ていた所の一撃だった。天罰覿面だが驚くのも無理もない。しかし、すぐに冷静さを取り戻すあたりも美和子らしい。
「工藤君ならまだ……」
取調べ中と言いかけた所でガチャと扉が開いた。中から出てきたのはゲッソリした新一だった。
「新一！」
「ああ、蘭か」
「どうしたの？　顔色が悪いわよ」
無理も無い。

密室こそ解決したが、未だに凶器が消えた理由が分からない。あの仕掛けは最低でも１０分以上はかかるのだ。

尚且つ棚の上にキャップを落とすほど部屋の隅々まで掃除していたらしい響子が出て行った後じゃなければ、彼女に仕掛けが見つかってしまう。そんな時間があった人などいない。

逆説的に条件を満たす人間が被害者以外１人しかいない以上、犯人は絞り込めている。だが凶器の１点が解決しない。しかも共犯という線も考えられなかった。どうやって凶器を隠したのだろうか？

そもそも流石の名探偵でも、ここまで精神を消耗する連中を相手にした経験はそう多くないのだ。しかも、胸の中には臨也の別れ際の言葉が今も心に留まっている。

（俺は笑っていたのか？）

ありえなくもない。暇な時に事件を望んでいた自分が確かにいた。ならば、つまり……俺は……人の死に……

「だからどうしたのって聞いてるでしょ？　顔色が悪いわよ」

「ああ。ちょっと疲れたからさ」

「そんなに大変な事件なの？」

「事件って、何でそうおもったのさ」

「だってそんな顔してたもん」

一瞬前の疑問が鎌首をもたげる。

「……もしかして俺笑ってたか？」

「え？　笑ってなんかないわよ。使命感に燃えて格好良いっていう

か……あれ、私何言っているんだろう」

え？笑ってない……？

その後の蘭の言葉は耳に入らなかったけど、その後の慌てる様子だけを見て思わず口元がにやけて、なんか楽になった。

そして、心に余裕が出来たからだろう。蘭の顔に違和感を覚えた。

「ところで蘭。そのイヤリングどうしたんだ？」

新一が感じた違和感はそのイヤリングだった。針金状の金や銀が小さい鳥籠のように編まれている。そして、その真ん中にあるのは小粒のガーネットだった。

「あ！　つけたままだった！　このお店で売っていたんだけどね。ほら、振るとガーネットが中で転がるんだよ。可愛いでしょ。色んな金や銀の糸が編まれているけど、どれもガーネットとは繋がってないんだよ」

成程……。

繋がっている糸は１つもないけど、それが絡みあうように編まれているからガーネットは落ちない……。

ん？待てよ。

――――ツナガッテイルイトハ１ツモナイ――――

まさか！！？

新一の脳裏に今までの情報が一気に流れ出てきた。そしてその逆りに合わせるように急いで階段を駆け上がる。

「新一！？」

そうなると蘭の声も聞こえず、一気に店長室に戻った。

そして、死体発見現場の血溜まりのデスクとあまり血で汚れていない絨毯を見た。それから、パソコンを開いた。最初は気が付かなかったが、ダラーズのサイトのページをブラウザバックで戻るとメールの受信箱になった。そこに広げられていたメールは午後２時過ぎに受信したものだった。

『君には失望した　　斉田』

よし！

更に調べると、ダイイングメッセージの理由も分かった。あれはただ単にｗｏｒｄのタイトル名だったのだ。だが、この内容は新一には関係なかった。

その時、下から品川結衣が来たという声が聞こえた。

取り合えず見たいものは見た。後は鑑識を……そう思ってドアノブを握った時だった。窓の向こうで鳥の鳴き声がして、新一は思わず右を見た。先ほど新一が開けた窓が微かに開いていた。

……。

そして、窓を閉めようと手をドアノブから離すと、そのタイミングで平次から着信が来た。何度掛けても繋がらなかった片方の無事が分かって、新一は少しホッとした。

第１６話　ガーネットの石言葉（後書き）

ガーネットの石言葉は真実、友愛、努力……など

第17話　枯木逢春（前書き）

弱った木が勢いを取り戻す。苦境からの脱出という意味もあります。

第17話　枯木逢春

（危なかった……！）

平次は適当なビルの非常階段に隠れて息をついた。警察がセルティとどっちを追うか迷ったのが救いだった。

とはいえ、外ではまだ捜し回られている訳で。もし、あれに見つかったら今度こそヤバイ。取りあえずはセルティにメールを送ろうとした平次は、新一からの着信履歴に気がついた。

まずは工藤からやな。

「もしもし、服部か？　何やってたんだよ！」

「なんやねん。そんなにわいがおらんのが寂しかったんか？」

ふざけて言う平次に新一が突っ込んだ。

「バーロー、事件が起きたんだよ」

「事件！？」

「ああ。犯行時間は1分で全員にアリバイがあって、密室だから一見すると事故なんだけど、凶器がどこにもないんだ。なかなか骨が折れそうだろ？」

「せやなあ……せやけど、わいは今回力になれんわ」

「はあ？　なんでだよ」

「深い事情があるんや……」

そういうと、平次は悲鳴が聞こえた時から現在までの経緯を、セル

ティがいかに凄いかといった興奮も込めて、そりゃもう詳しく話した。

電話越しの新一はしばらく黙っていたが、やがてボソリと言う。

「何が深い事情だ。全部おめえが原因じゃねえか」

「やかましい！」

「それに首なしライダーの運び屋だって？おめえ夢でも見てたんじゃねえの？」

「んな事あらへん。せやったら連れてきたる！」

「だったら連れてきてくれよ。俺も見てみたい」

「……へ？」

てっきり電話越しに嫌味言われると思った平次はびっくりした。

「とりあえず、警部に頼んでみるからよ。だからその都合で首なしライダーさんも連れてきて欲しいんだ。もし交機退かせられたらまた連絡するわ」

「マジか！　さっすが工藤！　わいの親友や！」

「おう！　じゃあな」

会話を終えた携帯を握り締めて感動する平次。

（せや、セルテイさんにも連絡せえへんと）

■■■■■

新一が再び目暮のいる部屋に入ると、写真に写っていたショートカットの少女がいた。もし、彼女がそれまでの新一を見ていたら驚いただろう。表情の輝きがまるで違うのだ。そして、新一はこう思っていた。

うん。彼女からは確認を聞ければいいや。

「あなたには店内での人間関係や彼らの性格についてお尋ねします」
「はい」
「林戸さんは何かトラブルを抱えていましたか？」
「え、ええ。何かに悩んでいて、辞めたいって言っていたのを聞いた事があります」
「林戸さんと円藤さんは特別な関係でしたか？」

その言葉に驚いた結衣は目を見開いた。

「え！？　……いえ、実は見ていると店長は好きそうなんですけど、響子さんはそうじゃない感じだったんですよね……」
「そうですか……。あと店長と村尾さんは最近よく話していませんでした？」
「いえ、それは分かりません。よく2人で部屋に入って話していましたけど」
「円藤さん最後に海外に行ったのっていつですか？」
「分かりませんが、私がここでアルバイトしてお店がオープンした2週間くらい前からは1度も行っていません」
「そういえば、アルバイトの募集のポスター。あのボールを円藤さんが貰ったのって2～3週間前くらいからではありませんでしたか？」
「はい！……そうです」

「では、僕からは最後の質問です。店長は結構怒りっぽく、物に当たる癖とかはありませんでした？」

その言葉にとうとう驚ききった結衣は椅子から立ち上がった。

「なんでそんなに分かるんですか！？」

「探偵ですから」

新一はニヤリと笑顔を見せた。

■　■　■　■　■

ああ。間違いない。

この部屋で被害者がどんな行動をとって、死んだのか。そして、凶器が紛失した理由も。

つまりこれは蘭が付けていたイヤリングのまんまだ。

ガーネット単品だと小粒だし単品だし取るに足らない。金やら銀もそれ１つなら貴金属にも思えない位な出来だ。でもそれが複雑に絡むから凄く見える。

いつものようなトリックばかりを考えていたら、ここに辿り着けなかった。

それにあの男、平和島静雄に出会わなければこの街の異常性を考慮する事すらしなかっただろう。

だが、結果的に全ては繋がった。

完全に読めたぜ……この事件！

第１７話　枯木逢春（後書き）

そして……

工藤君は小説初のバーローを言った訳です。

第１８話　第１の動機（前書き）

あとがきに用語集を実装しました。

複線回収の補佐と難しい言葉の解説（※がついている奴）を行います。
難しい言葉はちゃんと調べた方が分かりやすいかと思いますが、一応載せました。
あくまで知識の取っ掛かりとして載せたので、内容に対して過度な期待はしないでください。また、根本的な間違いがあれば連絡ください。

第１８話　第１の動機

新一は全員を２階に集めた。
すでに目暮に頼んだから平次とセルティは彼らの元へ向かっている。
そうした状況で新一は尋ねた。
「あの、言われて集まりましたがこれは事故なんですよね？」
洋平が不安そうに言うのを新一は首を振った。
「いえ、これは殺人事件です」
「なんだって……！？」
新一の言葉に一同に緊張が走った。
「だって、修二さんが亡くなった時は密室だったじゃないですか。誰かが外から入ったとでも言うんですか？」
「いえ、犯人はこの中にいます。その実験を今からしたいのですけど、誰かボールのようなものを持ってますか？」
その声に臨也が手を上げる。
「俺、野球ボールなら持ってるよ。１つでいいかい？」
「ええ。ありがとうございます」
臨也は鞄からまだ袋に入ったゴムボールを取り出した。２個入りの

ようだが既に1個は使われていて、1個しか入ってなかった。（※）
その袋に新一は一瞬だけ鋭い視線を向けると、すぐに微笑んでボールを受け取る。
そして、それを棚の上にある木片の位置を少しだけ動かして、デスク側を頂点とした3角形を作ると、その上に書類の中で比較的硬いものを拾うと木片の上に置き、更にその上にボールを慎重に置いた。
それから言う。
「現在、こうしてボールを載せた訳ですが、実はデスクに一番近い木片には紐が結び付けられています。そして、その紐は棚の裏を通ってこのデスクの下にまで繋がっています」
それから新一はデスクの足元にある引き出しを指差した。
「生前の円藤さんは感情の揺れが激しい人だったんです。だから、苛々が溜まるとつい、物の当たってしまいました。例えば、ここの靴痕のようにデスクを蹴っ飛ばしたりね。円藤さんを傷つけた犯人はそれを利用してこの仕掛けを作ったんです。そうすれば、自分は完璧なアリバイを持ちながら被害者を傷つける事が出来るからです。このようにね」
そういうと新一がデスクを蹴っ飛ばした。
すると、デスクの紐が引っ張られて木片が倒れ、バランスを失ったボールはポテンと椅子の上に落ちた。台座代わりの書類も床にすべり落ちる。
「こんな感じです。この仕掛けは現場に残されていたままのものを使いました」

「でも、そんな人を殺せるような球体なんてここには……」
「ボーリングの球を使ったんですよ。円藤さんの頭部にぶつかった時の破片もちゃんと回収してます」
新一はまだ見つかってない凶器をあたかも保管しているかのように言った。
だが、騙しとおせるとも確信していた。
何故なら警察と新一以外は凶器がない事を知らない。それにいくらボーリングの球とはいえ、金運のお守りというならば店に置かない訳がない。（※）
それがどこにもないのならば、同じくどこにもない凶器であると結びつけるのは不自然ではない。
新一のはったりに案の定、1人を除いて、皆が騙されたようだ。その1人とは帝人だ。ちなみに臨也は最初っから除外してある。
だが、その帝人も何も言わないのを確認すると話を続けた。
「最近、取引相手と上手く言ってなかった円藤さんは今日もいつものように苛々を抑えられずにデスクを蹴ったんです。そして、その衝撃が紐を伝って木片を動かし、円藤さんにボーリング球を落としたんです」
「……！」
「それさえ分かれば犯人が誰かなんてすぐに分かりましたよ。この仕掛けは数分では流石に出来ないし、ある程度は円藤さんの状況を

知っていないといけないですから。ねえ……林戸響子さん？」
「……！」
響子は青い顔を隠そうともせずに俯いた。ずっと彼女を見ていた蘭や、ネットで知り合った園子、そして店員の全員が驚愕の目を林戸に向けた。
「わ、私は……」
「やってないなんて言い訳はできないですよ。
さっき見せたキャップ、あれどこにあったと思います？
棚の上ですよ。
あなたが最初降りてきた時にはポケットに入っているペンにキャップはついてなかったですよね？
もし、あなたが犯人じゃないなら掃除中にあそこを覗いて仕掛けに気が付かない訳がない。だが、あなたが掃除を終えても仕掛けはあのままだった。それが何よりの証拠ですよ（※）」
その言葉を聞いて響子は大きく首を落とした。観念したのだ。
「わ、私は殺すつもりなんてなかったんです……」
「どういう事ですかな？」
目暮が尋ねると、響子はゆっくりと顔を上げた。
「私はアフリカでＮＧＯ（※）の活動をしていました。少年兵（※）にされて心の傷を負った少年達を救おうと思ったんです。
ですが、治安は悪化の一途を辿り、仕方なく帰国しました。そんな時にたまたま出会ったのが円藤さんなんです。
円藤さんとは１度アフリカでも会った事がありまして……ここでアフリカの雑貨を扱う店を開くから一緒にやろうと誘われて、仕事も

ない私はすぐに頷きました」
それから今度は唇を噛み締めて言った。
「ですが、彼は、この店を隠れ蓑にして悪事をしていたんです」
「……麻薬ですね」
「なんだと！？」
驚き、詰め寄ろうとする目暮を新一は手で制した。響子は話を続ける。
「ええ。
少年兵達から人を殺す罪悪感を奪って心を麻痺させ、傷を大きくしたものはガンパウダー（※）や大麻（※）です。
それを密輸して、売りさばくなんて……よくこういう話を円藤さんにもしていたのに……私自身がその片棒を担がされていたと気が付いて、許せなくなったんです」
「それで殺したのかね？」
「ですから、殺すつもりはなかったんです。ネットで知り合った人が読んだミステリーこんなトリックがあると聞いて、それでちょっと懲らしめるつもりだったんです（※）」
「ネットで知り合った人？」
園子の呟きを聞いて、響子はハッとして園子を見た。それから園子に言う。
「ごめんなさい。本当は私、奈倉じゃないの」
「え？」
「トリックを教えてもらった代わりに今日だけ私の振りをしたの。奈倉さん、あなたについ調子に乗って私の事を自分の事のように言

ってしまったから、1日だけ変わって欲しいって。その人が本当に奈倉さんよ（※）」
「え……？」
園子は首を傾げるが、新一は頷いていた。メールの奈倉の言葉と実際の状況は異なる点があったのだ。
「ま、とりあえず詳しい話は署で聞きますよ。いいですね林戸響子さん？」
「あ、待ってください」
響子を連れて行こうとした目暮を新一が再び遮った。今日一日で何度行動を遮られたか分からないが、それでも目暮はいつも通り尋ねる。
「ん、まだ何かあるというのかね？」
「だから、警部、あの事を忘れたんですか？」
新一がそういうと、目暮は首をかしげた。彼にとってそれは答えを辿り着く為のヒントで、裁判が始まる前に手に入れればいいとだけ思っていたのだ。だから言う。
「忘れた訳ではないが、殺人犯は誰か分かったじゃないか」
「違いますよ」
それから一旦間を置いて言う。
「彼女はこのトリックを仕掛けた犯人に違いはありませんが、罪に問われるなら傷害罪なんです」
「何？」

「彼女は円藤さんを殺してなんかいませんよ」

第１８話　第１の動機（後書き）

解決パートもとい、カオスパート突入です。

■　用語集　■

【ゴムボール】
そういえば誰かにもぶつかりましたよね。でも、都会の街中で子供が野球なんてしますかね？セルティさんはそう思ったようですけど。
【キャップ】
帽子のアレもキャップって言うんですよね。これはペンのキャップでした。日本語って難しいｏｒｚ林戸響子初登場時をご覧ください。キャップがありません。
【ボーリング球】
「球」の漢字合ってますかね？アルバイトポスターの会話で「金運のお守り」って言っていましたね。
【偽奈倉】
響子さんはこうした事情で奈倉を名乗っていたそうです。あれ、でもミステリーにこんなトリックがあるって、アレ？
【ＮＧＯ】
非政府組織。彼女はどうやら人権系の国際ＮＧＯで活動していたようです。ＮＧＯ＝ボランティアのイメージもありますが、反捕鯨団体等もＮＧＯなので過度に良いイメージを持つのは危険でしょう。
【少年兵】
軍事活動に動員された者の内、１８歳未満のものを指します。目の前で両親を殺されたり、誘拐されて強制的になる者が多く、殺人の恐怖を麻痺させる為に薬物投与される事例は多い。性的虐待や地雷原に突入する役目を遭う事も報告されている。また、残虐行為に参加した者も多数なので、彼らの社会復帰も非常に難しい。たまにラ

ノベで「だから強いんだ」って裏付けで出てきますが、現実は数行の文字でもこの位酷いです。調べるともっと深刻です。

【ガンパウダー】

弾丸に使われる火薬の事。安価ですが麻薬と似た依存性や中毒症状を持つので、食べ物に混ぜて少年兵に与える武装組織が多いとの事です。

【大麻】

マリファナ。研究の仕方ではタバコやアルコールよりも安全という意見もありますが、社会的制裁がシャレになりません。海外では合法の国もあるので、留学中の誘惑にはくれぐれをお気をつけください。

第１９話　実事求是（前書き）

格好良いタイトルの割に内容は新一が話を引き伸ばす話です（※）。

第１９話　実事求是

「なんだと？　彼女がトリックを作ったのだろう！」
「でも彼女はこの事件の全容を知らないじゃないですか」
「どういう事？」

園子の問いに新一は頷いた。

「実は、まだ凶器が見つかっていないんだ」
「え……？」

その新一の言葉に響子すらも首を傾げた。

「なのに林戸さんは自供をはじめた。ただのペンのキャップが見つかったくらいであっさりとね。彼女とは凶器がなくなった事は無関係なんですよ」

「どういう事だね？」

「彼女には当然隠蔽する時間はありません。仮に共犯がいた所で、凶器を隠す事は不可能ですし、凶器だけを隠すのはあまりに杜撰です。何故、不可能かというと、先程のトリック通りではいつ仕掛けが動くかは円藤さんの感情次第で犯人にも分からないからです。さすがに円藤さんの感情の操作まで彼女は行わなかったようですし」

「では……一体誰が……？」

「落ち着いてください。まずはこの事件の特徴を理解していただけ

なければこの先には進めません。
僕は最初にこの事件は『困難の分割』（※）という考え方を利用したのではないかと思いました。そして、その可能性がありえる事も分かりました。
ですが、壁に当たりました。つまりは、今日の隙間のない予定の中で凶器を回収するトリックなんて、この状況の彼女に限って言えば作れない事に気がついたんです。先ほどの理由でね」

「今日の君は随分と話を引き伸ばすな。だからそれを一体誰がやったというのだ」

もう夜になって大分経った（※）。
事件の犯人以外は電車がある内に帰してあげたいし、捜査官達も同様だ。そんな思いから目暮は先を急ぐのだが、新一はそのつもりが一向にないのか、話を続ける。

「だから、落ち着いてくださいよ。続けますね。ですから林戸さんに凶器を隠すのは不可能なんです。共犯を作っても不可能なんです。でも凶器は現場には残されていませんでした。超常現象があった訳でもありません。これが何を指すか分かりますか？」

「ん、凶器が残されていない事が……ん？」

「ここで、殺人事件が起きた時間帯に違う事件が起きていたという事です」

「なんだと……！」

「だからこそ、今回は苦戦したんです。
この事件は1つに見えて、実はいくつかの事件が集合体となって1つの事件に見えていたんです。

しかも、これら1つ1つの事件はたまたま同じ日に起きただけで、街の人間模様のように複雑に入り組んではいますが、本来は関連のない別々の事件でした。
トリックと呼べるものは林戸さん以外には一切なく、場当たり。だからそこにトリックを見出そうとする限りは一生迷宮から出られない」

その言葉にようやく数人が動揺を見せた。その中には当事者も混ざっているのだろう。
何を言いたいのか少しは分かってきたようだ。

「でも、分かったんでしょ？」

不安そうな顔の蘭に新一は頷く。

「ああ。最初の発端と最後の事件は当事者だからね。今回は運にも恵まれたんだ。では僕の推測も交えてゆっくりと時系列で説明しましょう。まず最初の事件は『黒の日』です」
「『黒の日』だと？」

目暮や高木、佐藤は顔色を変えた。

『黒の日』とは黒の組織が崩壊した日だ。
多くの命が失われ、その対価として、とある犯罪組織が壊滅したのだ。あの事件は未だに彼らに「良心とは」「正義とは」という問いを突き付け続けている（※）。

「ええ。あの日、1人の幹部が密かに逃げ延びたんですよ。コードネームはシードル。組織を失った彼は再起の為に斉田と名乗り、都内に潜伏しました」

「ちょっと待ってくれ。なんで斉田がシードルなんだ？確かにジンと一緒にいる写真は見せたけどさ」

臨也が言った。顔には臨也らしくない疑問符が浮かんでいる。

「斉田をカタカナにするとサイダー。シードルの英語読みです（※）。黒の組織が好んで使っていた偽名の手法の1つですよ」

「ほう……」

満足そうに納得した臨也が下がるのを見て、新一は続ける。

「で、それから潜伏を続けていた斉田はこの街で面白いものに出会いました。
それがダラーズです。
ダラーズは入ろうと思えば誰でも入れる異色のカラギャンです。更にその会員数も膨大で、横のつながりは薄く縦もありません。こういった環境では人々は自分と趣味や思想が合う人間は固まる傾向があります（※）。
斉田はここに目を付け、自分にとって都合のいい集団を探しました。
そして、黒の残党達も利用して、その集団を黒の組織をモデルにし

た会社に作りあげたんです」

一回息を切ると再び口を開く。

「彼らの主なビジネスは大麻を複数の薬物を組み合わせたプレミアムドラッグを作り、高値で売りさばく事です。そして、その大麻の仕入れ先が……ここ、輸入雑貨店『Ｒａｓｔａ』なんですよ」

ようやく、この店に話が繋がった……。

一同は緊張感が高まるのを感じていた。

「この店の店長、円藤修二さんはかつて海外を良く旅行していたそうです。

かつてはジャマイカ。

今はアフリカが多いようですが、ジャマイカにあるラスタファリズム（※）という思想運動の中でも、特に一部では大麻を神聖なものとして服用する習慣があり、一方のアフリカでは大麻の栽培は盛んです。彼自身も服用していたのでしょうけれども、同時に密輸していました。その取引現場として作られたのが2階の店長室なんです。

ほら、あの部屋のドアって随分硬いですよね？それに防音対策がしっかりされていますよね（※）。ただの部屋にしてはあまりに異常です。あれはここで麻薬の取引をするからだったんですよ」

「……」

先ほどの林戸の動機に繋がり一同は押し黙った。特に詳しく知っているのだろう。洋平は項垂れた。

「でも、どんな防音対策をしても情報が少しも漏れなかった訳じゃ

ない。彼らの悪事に気がついた人がいたんです。その1人が林戸さん。彼女については先程自供があったので良いでしょう。ですが、もう1人いたんです。それが竜ヶ峰帝人君です」

「……竜ヶ峰君？」

響子が帝人に不審の目を向けた。

「彼はダラーズを良くしたいと本気で思っていました。そんな時に、ダラーズ内にプレミアムドラッグを作っているグループがあると知ったんです。許せなかったでしょう。だから彼は証拠を入手する為にここのアルバイトに潜り込みました」

「ちょっと待って下さい。その話はおかしくないですか？」

洋平が疑問を口にした。

「俺も円藤さんも知り合いも皆がダラーズです。でもダラーズを良いグループにしようなんて考えるような奴はダラーズには1人もいませんよ。それをダラーズの為にそこまでするなんて……」

「あなたはそうでも、あの日、最初の集会の日に集まった人の中にはそういう人もいるかもしれないじゃないですか」

答えたのは帝人だった。

目が怖い位に真剣だ。

それだけダラーズというものを愛しているのだろうという気持ちが伝わる。だが、新一は急ぐように、半ば強引に話を続けた。

「しかし、一方この少し前から円藤さんの様子がおかしくなった。かつてのように海外に行く事もなく、斉田との取引にも応じようと

しなくなった。焦れた斉田はやがて円藤さんが自分を裏切るのではないかと思うようになります」

ドゥルルルルルルル！！

窓から聞こえるバイクのエンジン音はすぐ近くまで迫り、店の入り口辺りで止まった。やがて階段を上って2人の人影が姿を現した。

後の人は漆黒のライダースーツにヘルメット。彼女が平次の絶賛する首なしライダーこと運び屋のセルティさんだろう。そしてその前に入っていた平次はニコニコしながら入ってきて、手を上げた。

「よう、工藤！　助けに来てやったで……ってなんや。もうわかったんかい？」

喋る間にみるみるやる気をなくしていく平次。手助けのつもりが既に推理ショーになっていたら当然だろう。

一方の新一はセルティにニッコリと微笑むと、言った。

「いや、助かった。あなたがセルティさんですね。服部から話は聞いてます。ご覧のとおり事件の最中ですが、せっかくなので少々眺めていただいてよろしいですか？」

セルティは無言のままコクンとヘルメットを傾けた。

それからようやく皆の前に向き直った。

「え～っとどこまで話しましたっけ……あ、そう！　斉田が円藤に疑惑の目を向けるようになりました。そして、こうした経緯があって今日の事件が起こる訳です。
では、林戸さんが殺人犯じゃないという話に戻しましょうか」

第19話　実事求是（後書き）

■■用語集■■

【困難の分割】
デカルトの名言「困難を分割せよ」。よく推理物で使われる王道の発想です。ですが、これは元々読み解く側の考え方なので、トリックを作る側としてこの言葉を使うのは少々微妙な気も……。という事でこの事件も「困難の分割」で見るという視座は決して間違っていません。新一らしくない誤用です。

【もう夜になって大分経った】
読んでいるとまったく実感ありませんよね。実は捜査には随分と時間がかかるようです。コナンでも昼の事件が推理する頃には夜になったりしているので、それを参考にしました。

【『黒の日』関連の記述】
私なり、黒の組織考察の一部分です。本当はコナンの2次創作でやるつもりが挫折して、設定の名残だけが残っています。詳しくやりたいなあ……。

【シードルの英語読み】
「えっ、三ツ矢サイダーってお酒なの？」いいえケフィアです。幕末、横浜に商売に来たエゲレス商人がリンゴの炭酸飲料をサイダーと言って売ったら、やがて日本では無色の炭酸飲料を指す言葉となりました。

【ダラーズの内部状況】
Ｍｉｘｉのコミュとかで友人が出来た人には理解しやすいのではないでしょうか？

【ラスタファリズム】
アフリカ中心主義の思想。レゲエやドレッドなどこの運動で花開いた文化も多いです。田中トムさんは感謝しなければなりません。ち

なみに大麻を神聖な草とする考えはここに限った事ではなく、もともと薬草ですが、ラスタファリズムの人全員が服用している訳ではないので、誤解なさらぬよう。実は店名もここから取っていました。

【防音対策】

そういえば扉の目の前で会話をしていた目暮と美和子の声も聞こえませんでしたね。

【新一が話を引き伸ばす話】

の割りには最後の方急いでませんでした？さすがに名探偵も尺には勝てないのでしょうか。

第２０話　繋がらない意図

「そうだ。おかしいとは思ったんだ。どうして君は林戸さんが殺していないと言えるのかね？」
「実は、あのトリックが動いた後、まだ円藤さんは生きていたからですよ。司法解剖が終わらなければ詳しい事は言えませんが、トリックの一撃は致命傷じゃなかったんです」
「何？」

目暮は不審の目を新一に向けた。

何を言っているんだ？

そう思ったのは洋平も同様だった。遠慮がちに手を上げながら口調だけは強く言った。

「何を言っているんですか？　呻き声が聞こえてすぐ部屋に入った時には円藤さんは亡くなっていたじゃないですか」
「ええそうですよ」
「何が言いたいんですか？」
「円藤さんの呻き声と林戸さんのトリックは無関係だと言いたいんです」

！！！？

「なんだって……！？」

凍りつく一同。もっとも平次とセルティは取り残され、臨也は観客気分だったがこの際無視する。

「このパソコンの画面を見てください。斉田というさっき話した取引相手からメールが来ています。恐らく円藤さんがデスクを蹴るほどに激昂したのはこのタイミングでしょう。時間は2時過ぎです。つまり、竜ヶ峰君がノックしても円藤さんが出てこなかった理由は、寝ていたからじゃなく、デスクの上にうつぶせに気絶していたからなんです」

「……！」

「そんな証拠……」

「証拠ならありますよ。このデスクの血溜まりです。蘭は呻き声が聞こえた直後に物音がしたと証言しました。ならば状況と遺体から見て、頭にボーリング球がぶつかった衝撃でデスクに鼻をぶつけてから、その反動で今度は床に倒れたと考えるしかない。しかし、それは有り得ません」

「どうして？」

きっぱりと言い切る新一に響子が疑問を漏らす。

彼女としては、自分が殺していないという可能性が出て少しホッとしているのと同時に不安にもなった。

どうしてそんな事が言えるのだろうか？

「一瞬の間に血溜まりが出来る程、円藤さんの鼻からの出血があった。そう言い切るには絨毯にはここ以上の血溜まりが出来ていないといけないんです。

また、そうした人体の動きを裏付ける血痕もね。しかしそんなも

のはなかった。
　そこから考え直すと一番可能性の高いのは血溜まりの形状から言って、パソコンを操作している両手の間に顔を衝突させ、そのままうつぶせに気絶した可能性なんです。
　その場合、血溜まりの欠けた所は左腕の袖が堤防となって出来たと言えば血溜まりの形状も既に発見時には乾いていた事も説明がつきますし（※）、２時過ぎに始まった出血なら、死亡推定時間に血が止まっていた事も充分考えられます」
「な、成程……」
「これで凶器を隠すのに必要な時間は５分から４０分以内になりました。そして、次に凶器がなくなった事件の犯人である竜ヶ峰君の話になります」

「竜ヶ峰君？」

さらりと重大な台詞を言った新一に一同は再び驚愕した。それはセルティも同様で、無口で顔が見えなくてもそれと分かるくらいに動揺している。

「ええ。証拠隠滅をした犯人は彼です。彼は気がついていたんですよ。彼らの麻薬取引の証拠こそが今回のボーリング球である事に」
「な……！」
「円藤さんと斉田が取引をしなくなったのが３週間前。
　そして、その頃から円藤さんは『ボールを貰った』と言い出し始めた。でもボーリング場へ行っても彼はボールを投げようとはしませんでした。
　なぜなら、それは中には麻薬が隠されているからです（※）　。現にここに落ちていた破片のいくつかからはそうした反応が出ています。大体、この程度の落下でボーリング球が破損するような事もなかなかないんですよ」

「そうだったのか……」

「ええ。竜ヶ峰君もそれを目当てにバイトを始めました。そして、いよいよ入れると思ったのにノックをしても円藤さんは出てこなかった。

普通なら諦めるべきですが、ここでチャンスを逃したら犯罪はもっと広がる。そう思った竜ヶ峰君は扉の横の窓を伝って店長室へ侵入し、ボールを手にいれたんです。この扉のせいで分かりづらいですけど、あの2つの窓の距離は非常に近いんですよ（※）」

ここまで言い終えた所で、ようやく帝人が反論した。だが、それも予想範囲内だ。

「面白いお話ですね？　私がそんな事をした証拠はあるんですか？」

「そのエプロンを脱げない事が証拠さ。取って貰おうか」

「……」

さっきは動揺させられたけどな。推理勝負で負けっかよ！

その新一の挑発的な瞳や、目暮達に根負けした帝人は仕方ないという風にエプロンを脱ぎ捨てた。

そして、エプロンで隠れていたシャツの部分は雑巾掛けでもしたのかという程に真っ黒に汚れていた。

エプロンをつけていてその内側だけが汚れる作業なんてない。窓と窓の間を移動した時に出来た汚れをエプロンで上手く隠していたのだろう。

「あ……！」

「でも、まだ無理です。凶器を仮に私が入手したとしてもボーリン

グの球を抱えて窓の間を行くなんて出来ませんし、階段を降りれば必ず誰かの目に留まります。私がどこに凶器を隠したというんですか？」

「残念だけど、そこも既に分かっているよ。確かに君は凶器を隠す事も凶器を持ったまま戻る事も出来ない。でも、凶器を窓から落とす事は出来る筈だよね」

「……ッ！」

明らかに顔色を変える帝人。勝利を確信した新一は目暮に謝罪も兼ねて説明する。

「警部には悪いと思いましたが、実はさっき話を引き伸ばしていたのには理由があったんですよ（※）」

「理由？」

「ええ。あれは凶器がここに到着するまでの時間を稼ぎたかったんです」

言葉の意図を掴みかねている目暮を新一は放置して、今度はセルティに向き直る。

「あなたが今運んでいるものを見せてもらってもいいですか？　竜ヶ峰君が2階の窓から下にいるあなたに渡したのは分かっていますよ。ここで出してもあなた達の行為は犯罪にはなりませんから」

（そんな事になってたのかぁ。ここに呼ばれた時から怪しいと思ったんだよな）

セルティは一瞬思案げに首を巡らすと、一瞬だけ帝人を見た。

一応クライアントの意向を伺わなくてはいけないと思ったのだ。そして、帝人もこれ以上の言い逃れは無理と見て頷く。

『分かった。取りに行く』
文字をＰＤＡに表示して見せると、１階にセルティは降りて行った。
「どうして分かったのかね？」
「１つは目撃情報です。
黒ずくめの男と聞いて、最初は黒の組織を考えました。ですが目撃者は顔が全く分からなかったと証言していましたよね。黒の組織の連中は覆面を被ったりしませんでしたし、不思議には思っていたんです。
そこで服部から話を聞いて気がつきました。
顔が分からなかったのはフルフェイスのヘルメットを被っていたからだったんです。そこにさえ気付けば、ここに来たのは彼女じゃないかって所まで推測できました。
彼女は丁度、竜ヶ峰君が動き出す辺りの時間に受け取る依頼があったようですし」
「だが、待て。だったら何故竜ヶ峰君。君はどうしてもっと早く真実を言わなかったのかね？君のおかげで捜査は大混乱したのだぞ？」
「……事故だとばかり思っていたので、こんな事件になっていたとは分かりませんでした。僕が部屋に入った時には円藤さんはデスクに伏していて、床にはボールが転がっていたんです。
ボールだけが狙いだったので、まさか円藤さんが怪我をしているとまでは見えませんでしたが、それを言ってしまえば自分が疑われると思いました。
それに言えなかったのは……」

「ダラーズから犯罪者を出したくなかった？」
「……」
帝人は黙ったまま、頷いた。
やがてセルティが上がってくると、彼女は予想通りボーリング球と、それに加えてスタンガンを持って現れた。帝人は当初このスタンガンで修二を気絶させるつもりだったようだ。
そして、これの発見でトリックと凶器の紛失、そして、殺人事件が別々のものであるという事が証明された。
（ふう）
と新一は額の汗を拭った。竜ヶ峰をなんとか押さえきったとはいえ、ここは運頼みの要素が強かった。だが、これで、事件解決まであと一歩だ。
「さて。そういう事で円藤さんを傷つけたトリックと凶器が消失した理由と2つの事件の動機が明らかになりました。そして、ここまで分かったら今度は逆に明らかに不審な言動を取った人物が浮き彫りになりましたね」
そうだ。
一同は1人の人物に視線を注ぎ、その人物は慌てふためいた。
「ど、どうしたんです？　みんなして」
「この日、ここで起こった最後の事件は殺人事件です。その事件を

解き明かしましょう。と言っても皆さんはもう分かったようですけど」

第２０話　繋がらない意図（後書き）

西の名探偵服部平次……出番なし。

■　用語集　■

【血溜まりの欠けた所】
椅子に座ってパソコンにキーボードに手を置くと、ハの字になります。そして、次にその間に顔を埋め、左を向いて目を閉じます。最後に勢い良く鼻血を出すと、あら不思議。袖の素材次第で欠けた円のような血溜まりが出来ます。（第１１話の描写のような）特に血は固まりやすいので尚更です。

【ボーリング球の中に麻薬？】
以前、実際に麻薬をガソリン等と混ぜてワールドカップの模型を作って密輸しようとした人達が掴まりましたよね。あんな感じに石膏っぽくして隠す事がよくあるそうです。大麻で出来るのかは試した事ないのでアレなんですけど、新一君も言ってるし、多分大丈夫じゃないでしょうか……。

【２つの窓の距離】
第１０話の階段側の描写と、第１６話の店長室を出ようとする新一の首の動きから距離を推測してください。

【引き伸ばしの真意】
用語集はあくまで適当な解説って事ですね。我ながら悪意に満ちています。

第２１話　因果応報（前書き）

コツ、コツ、コツ、コツ……コ……

第２１話　因果応報

「わ、分かったって何の事ですか？　俺が不審な言動なんて…」
洋平は全員から視線を向けられて焦った。そんな洋平に新一がゆっくりと言う。
「ありますよ。あなたがノックして円藤さんが扉を開けたとき、彼は頭部から出血していたんですよ？何故その事を黙っていたんですか？」
「な！　いや、えっとそれは」
「竜ヶ峰君みたいに気がつかなかったんですか？」
「あ、ああ！　そうだ」
出された助け舟に不用意に飛び移る洋平。新一の狙い通りだった。
「その言い訳には無理がありますよ。
竜ヶ峰君の時と違ってあなたは鼻からも出血している円藤さんを正面から見ていますし、円藤さんはタオルか何かで血を拭った形跡もない。
恐らくノックの音に反応して出たけれど、まだ意識は混濁していたという所でしょう。だから、扉が開いて最初に血まみれの円藤さんが出てきた時はあなたも流石に驚いたようですが（※）」
「……！」
「しかし、すぐに考えを変えた。『今だったらチャンスじゃないか』ってね」
「チャンス？」

園子が疑問符を浮かべる。

「彼は斉田側に付いたんだよ。そして、彼の抹殺を頼まれていた」

「！！」

「そして今日、あなたは血が付いた円藤さんを見て、今だったら事故死に見せかけられると考えた。そこで、ドアや窓を閉めてそこから先の会話を誰にも聞かれないようにした後、毒薬を痛み止めと偽って飲ませたんです」

「そんな、毒殺なんかしたら死体調べりゃすぐに分かるんだろ？俺じゃないぞ、調べてみりゃいいさ。死体から毒は出てこないんだからな」

「出てこないんじゃなくて見つからないの間違いじゃないですか？何故ならあなたが飲ませたのはＡＰＴＸ４８６９（※）ですからね」

「！」

平次と目暮達は息を飲んだ。蘭達をはじめ皆はキョトンとしている。

「ＡＰＴＸ４８６９とは体から検出されない毒薬。ただ、あなたにとっての一番の誤算は実はもともとこれがただの事故じゃなかったという事と、その薬に苦しめられた俺が現場にいたという所だ。

だからこれが事故じゃないという事が分かって、更に組織しか持っていないはずの薬をあなたが持っている事で斉田との関係も分かった。

遺体から検出できない薬ですが、鞄の中身さえ押収すれば……」

「……」

洋平はじっと黙ったまま、視線を反らしていた。

これで殺人事件が解決した。

そう思った時だった。息を切らした捜査官が部屋に飛び込んできた。
「警部、村尾の持っていた薬が消えています！」
「なんだと！？」
捜査官の声に驚いたのは目暮と新一。
待ち望んでいたのは洋平だった。
先ほどの洋平の表情は、この様子を予感して笑いに耐えていたのだろう。視線を反らしたままニヤけると、頭を掻きながら顔を上げた。小悪党に相応しい下卑た笑みだった。
「あ～あ～。痛み止めでしたら、さっき手が滑ってトイレに落としちゃったんですよ」
「な……っ！」
「せっかくの面白い物語だったけど、くっくっく。証拠がないんじゃ裁判だと勝負にならないなあ」
「くっ……」
本性をさらけ出す洋平を前に新一は歯噛みした。
新一が一番危惧した事だった。ＡＰＴＸ４８６９は口に入れてすぐに効果を発揮する薬である。流されれば見つけようがない。
彼自身は見覚えのあるカプセルを見た時から油断はしていなかった。一応警察の１人にも見張るよう頼んでいたのだが、その警官が一瞬の隙を突かれたようだ。

最後の最後で爪が甘かったのか……！？

「で？どうするんですか？警察っていうのはガキの空想で人を逮捕するんすか？ほら、なんていうんでしたっけ？物的証拠がないと。くっくっくっく」

「ぬ……！」

「だから僕が渡したのは痛み止めだったんですよ。でも結局、その前の傷が大きすぎて円藤さんは亡くなった。それでいいじゃないですか」

「くっ、痛み止めの成分が検出されなければ君の主張は通らんぞ」

「いやあ、もしかしたら何か言い忘れている事があるかもだし、なんたって証拠がないんだものなあ？」

「……！」

「あっはははははははは！！

言葉に詰まる目暮に洋平は勝利を確信した。そして、犬歯をむき出しにして笑った。

それは敗北感にも似た空気を漂わせた新一や捜査官達をあざ笑うものだった。

だが、次の瞬間。

「馬鹿じゃない？」

鈴を転がしたような声が空気を切り裂いた。

そんな声と共に現れる赤茶の髪に碧の瞳を持った、冷気漂う女。宮野志保である。

（……おめぇ無事だったのか！）

新一は喜びと驚きが入り交ざった表情を見せ、その近くではセルティが自分の首を思い出したのか、若干の動揺を見せていた。

事態を悟れないのはあざ笑っていた洋平。

「なにが馬鹿だと？」

「あなた誰？　私は工藤君に『証拠なら遺体に残っているのに悔しがるなんて馬鹿じゃない？』って言っているのよ」

「は？」

「え、おい……」

志保の登場にもその言葉にも驚いた新一が声を掛けようとしたが、

彼女は碧の瞳を軽くウインクをして視線を外した。詳しい話は後でするという事らしい。

見せ場は確実に奪われたが、ここは彼女がいないと決着が着きそうにない。黙って引き下がった。

「でも仕方ないからあなたにも教えてあげるわ。
大方、あなたの飼い主から『これを使えば絶対に検出されないから安心しろ』とでも言われたんでしょう？でも本当は『薬物』という括りじゃなくて、最初からＡＰＴＸ４８６９に絞って探せば検出できるのよ。その為の検査薬だってあるし」

初耳だった新一はハッとして目を向けるが、志保は余裕に満ちた笑みすら浮かべて、瞳だけは冷ややかに洋平を見据えていた。

「な、何を…出鱈目を……だいたいあんた何者なんだ！」
「ＡＰＴＸ４８６９の開発者。斉田と同じ組織で幹部だった女よ（※）。斉田から私への恨み言くらい聞いた事があるんじゃない？シェリーって名前をね」

洋平が目を見開いて、冷や汗を噴出させた。どうやら名前は聞いた事があるようだ。揺れ動く瞳の動きが彼の心の動揺を表していた。

「……う、嘘だ！」
「別に信じなくてもらおうと思って言っている訳じゃないんだけどね。ついでに言うと検査薬を開発したのも私。調子に乗っていた所悪いけど、もうチェックメイトよ」

それから志保は目暮に声を掛けた。

「目暮警部」
「なんだね」
「私の研究室に検査薬があるから、とりあえず今日のごたごたが全て済んだら指定するサンプルを送ってもらえるかしら？　まだ普及はしてないけど信頼性は充分あるから」
「うむ。分かった」
目暮と志保の会話に洋平は両手で頭を掻き毟って叫んだ。
「う、嘘だ、嘘だ、嘘だ！」
だが、その叫びにも志保は冷静に言葉の刃を突き刺す。
「だから名前も知らないあなたがどう思おうとこっちは知ったこっちゃないわよ。とりあえずアルバイト感覚で人を殺しておいて、他人に罪を被せるような奴には相応しい罰が待ってるって事よ」
その奥冷えする瞳に感ずる所があったのだろう。洋平は叫ぶのを辞めて、殺気の篭った目で志保を睨み付けた。
「くっそ……貴様さえ現れなきゃ……！」
「人の推理を空想と言った次は自分がもしも話？もういい加減見苦しい現実逃避は諦めなさい。その方が身の為よ」
志保の言葉のナイフはザクザクと殺人犯の心を切り刻む。まるで生身の体に黒ひげ危機一髪でもしているかのようだ。
志保を知らない人は突然現れては洋平を滅多打ちにする志保に面喰い、知っている人間は洋平が逆上する事を恐れた。だが、一方の志保は最初から逆上させるつもりだったらしい。

「……ち、ちくしょおおおお！！！！」

洋平は絶叫すると、咄嗟にデスクに置かれたボールペンを手にして志保に襲い掛かった。だが、志保は小馬鹿にするように左手で髪をくしゃりと掻き揚げた仕草を見せるが、避けようともしない。

「はあっ！！」

代わりに立ち塞がった蘭がボールペンを弾きつつ、がら空きの鳩尾にするどく拳を叩き込んだ。

ビシッ、ドスッ！

「ガッ……！」

一瞬の重低音と、呻き声の後、悶絶した洋平はゆっくりと崩れ落ちる。志保は蘭へ驚きと感謝が少し混ざった視線を一瞬傾けると、何かを握っていた右手をポケットから引き抜いた。

「言ったでしょ？　諦めたほうがいいって。あの検査薬って結果が出るまでに時間が掛かるのよ。暴れなければ別件逮捕が減って、少しは裁判も楽になったのにね」

「う…がっ……く、くそ……全部あいつのせいだ！」

「私の次は誰？」

完全に呆れ返った志保の口調。

それは男性陣たちが目を背けたくなるほどの、そりゃもう強烈な一撃だった。

そして完全に戦意を喪失した洋平は力なく言葉を呟く。

「畜生……はぁ……え、円藤だ。あの人が急に斉田さんとの取引さえ止めなけりゃ、俺はこんな事する事もなかったってのに……」

目暮が手錠を手にゆっくりと洋平に近づいた。

心を圧し折られ、悶絶してまで下らない責任転嫁をする洋平の言葉を聞いていられなかったのだろう。

「話足りないなら、この後いくらでも聞かせてもらおう。村尾洋平、２３時３１分、暴行の現行犯で逮捕する。一応、林戸響子さんと竜ヶ峰帝人君にも話だけ聞かせてもらっていいかね？」

カシャンと洋平の腕に手錠が掛けられた。

複数の事件が同時に起こって、手錠をかけられたのは黒の組織の残党の下っ端の１人。そんな様子を新一は複雑な気持ちで見守った。

一回は危なくなったが志保のアシストで事件は何とか無事に解決する事が出来たのだ。

ん、待てよ。サッカーならアシストしたのは俺か？

そんな事考えていた新一は最後の謎を思い出して目暮を引きとめた。

「あの、ちょっと待って下さい。最後に林戸さんに見せたいものがあります。まだ明らかになっていない円藤さんの謎です」

「え？」

「そもそも彼はあなたを悪事につき合わそうとしていた訳じゃないんです。一段落着いたらこの番号と同じ名前のテキストファイルを開いてみてください」

そう言って新一はダイイングメッセージのふたを響子に手渡した。

最後の謎、何故円藤修二が命の危険を冒してまで麻薬の取引を止めたのか。これは彼女が知っていればいい謎だったからだ。

そんな訳で奇妙な事件は解決を迎えたのだった。

そして――――

この事件の解決が次のステージへの扉を開いた事を彼らは間も無く知る事となる。

ピピピピピピ、ピピピピピピ、ピピピピピピ、ピピピピピピ、ピピピピピピ

inued

To be cont

第２１話　因果応報（後書き）

コピーし忘れた一文があったので、修正しました。

■　用語集　■

【円藤を見た洋平の反応】
第１５話の蘭の証言を話す新一の言葉を見ていただければ分かります。

【ＡＰＴＸ４８６９】
工藤新一をコナンにした例の毒薬です。検出されない毒薬と原作でジンが言ってましたが、もともとは違う目的で作られたようです。ちなみに発見時の修二の体温が随分と熱いと書きましたが、これは薬を飲まされた新一の描写を元にそうしました。

【灰原の正体】
別にネタバレでもなんでもないですが、灰原哀の正体は黒の組織の幹部のシェリーで、コナンをちっちゃくした薬の開発者でした。本名は宮野志保。

■　あとがき　■

そんな訳で、推理ショーがなんとか終わりました。やったーーー！！！！

新一も平次もあんなに動いたのに、最後は志保さんが総獲りしていきました（笑）
怖いですねえ。確実に臨也達への怒りもぶつけてます。

ちなみに今回どうしてこんな事件を書こうとしたかは、いずれ活動報告に載せます。

それと若干、帝人の描写が衝撃的な所もあったと思いますが、彼の行動はダラーズへの愛と責任感ゆえという事で許していただければと思います。まだ不明な点のいくつかは第3部で明らかになるかと思います。

それでは随分長くなりましたが第2部も終了です。
また幕間を置いて第3部へ移行しますが、ここまで読んで頂き誠にありがとうございました。このような駄文がこれからも続くのですが、今後ともどうぞよろしくお願い致します。

幕間３　理由なき理由

静雄と新一が別れてから２，３時間後。

「うぉらぁあああああ！！！！！！！！」

「ぎゃあああああああああ！！！！！」

怒るバーテン。泣き叫ぶチンピラ。空飛ぶ自販機。今日も池袋は平和だ。

そんな光景を見ながら京極真（きょうごくまこと）はどうしたものかと頭を抱えたくなった。

真が平和島静雄こそ平和島静雄である事に気がついたのはついさっきだ。

たまたま引き返した６０階通りで寿司屋から出てきた園子の姿を彼

は見てしまったのだ。喜びつつスカートの長さを「あのような露出過多のスカートは控えていただきたいと言ったのに」とか思っていると、続けてバーテン服の男が出てきた。しかも、園子と親しげに話している。

長身で細身。サングラスで顔は良く見えないが、周りのパーツは整っている。晴れて恋人となった園子はイケメンに滅法弱いと蘭が教えてくれた。

これは……まさか……。

そう思った真は気がつけば静雄を尾行してしまっていたのだ。とりあえず雰囲気からそういう関係じゃないとはしばらくして分かったのだが、今度は尾行した人物がずっと捜していた平和島静雄だった。

ガラこそは悪いが言動は大人しく、挙動にも武術家らしい様子は伺えない。その点であれば、彼の隣を歩く白人女性の方が余程出来ている。身長が近いのに体重は少なくとも2階級こちらが上だ。

ガセネタでも掴まされたか……？　と思った途端に今度はこの騒動である。正直混乱している。

どこまで鍛えたかではなく、単純な生命体としてのものが違う。成程、ご老体が言った意味も分かる。

それほどまでに彼我の戦力差がありすぎるのだ。

正直、戦う前から諦めたくなったのは人生で初めてである。

今まではどんな強敵であろうが多勢だろうが果敢に挑み倒してきた。

そして、高校生にして国内の相手では物足りず、海外へ武者修行に

出たのだが……。
やはり勝負を挑むべきなのか？
そうだ。そうに決まっている。
強い相手との手合わせを望んできたのは自分じゃないか。ずっと願っていた時が叶うはずだ。

覚悟を決めた真は静雄に向かって歩き出した。尾行した時から気付かれていたのだろう。すぐに白人女性が真の前に立ち塞がった。

「尾行、察知済みです。要件は？」

少々おかしいが、それでも上手い発音に感心しながら真は答えた。

「あなたはあそこにおられる平和島静雄さんのご友人でしょうか？」

正確には暴れておられるのだが、あくまで礼儀正しく答える真。だが、ヴァローナは警戒を解かない。

「その質問の回答、避けます。日本では自分が先に名乗るが礼儀。詳細な情報の開示、要求します」
「あ、失礼致しました。私は帝丹大学空手部1年の京極真と申します。海外武者修行中に平和島静雄さんの噂を耳にしまして、是非お手合わせ願いたいと思い、参りました」

真はここまで話せば大丈夫だろうと思った。あそこまで強い人間が

自分の強さを誇らない訳がない。だが、その言葉に彼女はキッと睨むと敵意まで込めて言った。理解に苦しむ言葉を。

「拒否します。平和島静雄。私の獲物です」

ど、どういう事ですか！？

そんな言葉が喉まで出掛かったのを真は押さえる。さっきの日本語の事もある。彼女はきっと色恋の話と勘違いしているのだろう。そう思って詳しく説明するのだが、何故か詳しく話せば話すほど敵意をむき出しにする彼女。

（ま、まさか本当に言葉通りの意味なのか？）

ようやく真が理解しかけた所で、暴れ終わった静雄がのっそりと現れた。

「あ？　誰と話してるんだ？」

■■■■■

「……悪ぃけど、そいつは断る」

「え？」

話を聞き終わってから静雄は言った。
真は思わず詰め寄るった。
はるばる池袋まで捜しに来た静雄に理由が分からないまま、断られるのは流石に納得がいかなかったのだ。

「どうしてですか？」
「あーなんだ？　俺は自分で強くなりてえって鍛える奴は凄いって尊敬するし、そういった意味じゃ俺なんて人間が全然弱くてよ。所詮俺なんか力が強いだけなんだよ。でも、だからこそ、俺と戦うって違うんじゃねえのかって気がするんだよ」
「ど、どういう事ですか？」
「なんつーか。別に俺と戦っても金にも名誉にもならないしよ。強さを極めるって言っても、単純に強い生き物と戦いたいんだったら、ライオンやゴリラと殴り合えばいいだろ？　でもそうしないのは、あんたら格闘家が目指す強さと、猛獣の強さっていうのは違うからかなって勝手に思ってたんだよ」
「……」
「……つい、ガラにもなく長話しちまったな。もっと極端な理由を言えば、俺には手合わせなんて出来ねえ。ぶっ殺すか、ぶっ壊すかだ。だから嫌なんだよ。格闘家は格闘家と勝負しな」

それを言い終えると、静雄は真から背を向けて歩き出した。

そして、途中から合流していたトムが真に近づいた。

「あいつがあんな語るのは珍しいからさ。今日の所は引きな。話を聞く限り相当強いらしいけど、今のおまえさんじゃ負けたがっているようにしか見えないぜ。だから振られても逆恨みするなよ。じゃ

あな」

なにが「だから」なのか分からない話をしたトムもすぐに静雄を追いかけていなくなり、ヴァローナも何か考え事をするような仕草を見せた後に行ってしまった。

残されたのは真とそこらへんで痙攣しているチンピラ共。

1つの言葉が心に残った。

―――負けたがっているようにしか見えないぜ―――

真は蘭を上回る空手の達人である。

これまで公式戦で無敗。その結果は武者修行に赴いても変わらず、唯一の負けはトラブルにより不戦敗になった1つのみ。欧州選手権にも代表に選ばれるレベルだ。侍のような男で、無敗を誇りながらも更なる強さを目指し続けてきた。

その輝かしい戦績と秀麗なルックスから「蹴撃の貴公子」とメディ

アでも持て囃され、今では恋人と呼べる人も出来た。

と言った風に、これまでの人生は努力量以上の報いが常にあった。

恋人となった園子であっても、たまたま応援席で友人の応援をしている彼女に一目惚れし、そんな彼女がたまたま彼の実家の宿に泊まりに来たのだ。

そして、彼女が犯人に襲われた所を助け出したのが出会いである。

その後もそうした事が何度もあって恋人となったのだ。彼女を守る必要があると思った時はストーカーに勘違いされる位に見守り、欧州選手権よりも彼女との約束を選んだ。そのくらいに彼女を大事に思っている。

しかし、その一方で園子に自分の試合を見せたことは1度も無い。負ける姿を見せたくなかったからだが、試合前から勝利が目に見えていたものはいくつもあった。でも何故連れて行かなかったのか？

彼女が蘭を応援している姿を見た時からずっと気になっていたのだが、恋人になって間も置かず自分は海外武者修行へ出かけた。それは何故か？

それでも海外まで行って強い人間を求めたのは何故か。本当に俺は理由がないまま、ただ強くなりたかったのか？　どうして？

「強くなろう」というモチベーションの中に「彼女を守る為」というものは含まれていない。園子を危機から救えた事はある。それは空手を極め続けていたからこそ出来た事だった。それでも、「彼女

を守る為」は含まれてはいけないのだ。
いくら結果的に救えたとしても、彼女を放置して修行しておいて、そんな台詞を吐こうものなら、この舌は詐欺師のそれであるし、園子の想いも踏みにじっている。

強くなる理由もなく、彼女の為でもなく、だが、自分には強くなりたいと思うような経験が人生で1度でもあっただろうか……？　上手くなる事をだけを単純に楽しめなくなって、強い敵に渇きを覚えたのはいつからだ……？

もしかしたら……。

本当は……どんなに足掻いても、修練しても、超えられない壁や敗北と言ったものにぶつかる自分を見たかっただけじゃないのか？

つまり、本気を出しきって負ける自分を見たいという事。だから、今まで必死に修練して、常に上を目指して強くなったというのに、未だに心が満たされていないのではないか？

だから園子を連れて行けなかったのだ、園子が期待している真の姿と、真が待ち望んでいる自身の姿はまるで逆だから。

（だとしたら、あの言葉は的を射ていたのかも知れないな）

きっと平和島静雄にも中国の老人にも見透かされていたのだろう。
だから、老人は静雄の名前を挙げ、静雄は「付き合いきれない」と断ったのだ。

そこまで考えた時、真は強烈に気分が悪くなった。舗装された道路に放置された汚物を見た気分だ。

（園子さんに謝るべきでしょうね……）

真はそう決めると再び池袋の街を彷徨った。
来た時とは違って酷く陰鬱な気分で、足取りも重い。

そんな彼を救える人物がいるとしたら1人しかいないのだが、生憎、その人物は現在事件の参考人として事件現場の1階にいて、しばらくは解放される見込みがなかった。

幕間3　理由なき理由（後書き）

静雄と真を戦わせるべきかは随分悩みましたが、結局不発にさせました。
ここでの考察は完全に私のオリジナルです。
取り合えずデュララララ！！と絡ませた以上は完璧な所に矛盾を見出すスタイルを取っているので。

幕間４　破壊衝動（前書き）

サブテーマは「深夜の他愛ない会話」
無駄な描写と無駄な展開を重ねて無駄な話を作る事を目標にしました。

幕間４　破壊衝動

同日２３時頃

「あ……」

コンビニの入り口の手前。

平和島静雄はガラスの壁越しに見知った顔を見つけて立ち止まった。

それは白人の女性だった。

歳は妙齢で長く見事な金髪を持っている。スラリとした肢体は、服の生地を内側から押し上げる豊かな膨らみを併せ持つ。

いかに静雄が鈍感で朴念仁で年上好きな池袋のフォルテッシモであろうと、彼女がいかに魅力的かは嫌でも分かった。

もっとも彼女の顔は手にした雑誌に視線やら色々を集められていて、いつもの彼女と随分違うのだが。

そのまま数秒後、ヴァローナはピクリと顔を動かして正面を見て、そして硬直した。

「……ッ！」

お、こっち気付いた。

彼女は慌てて読んでいた雑誌を閉じるが、静雄にはガラスの向こうから雑誌のタイトルが丸見えになっている。雑誌は『Ｔｏｋｙｏ Ｗ●ｌｋｅｒ』で、その下には「絶品！スイーツ特集！！」と打たれていた。その内容は静雄の家に１部あるから知っている。

「ヴァローナ、こんな所で何してんだ？」

「……先輩」

だからそんな事よりも静雄が驚いたのは、ここにヴァローナが静雄のアパートの近所にいる事だった。

「体調、芳しくないようでしたので」

「もしかして……それで来てくれたのか？」

ここまで話しておいて、もしかしても無いだろうに……。

ヴァローナはそう思いながら頷くと、静雄は無邪気な笑みを見せた。

「言われた通りに寝たからな。トムさんにユン●ル皇帝液貰ったし、大分元気になったぜ」

「了解しました。それは良好です」

ニコリともせずにヴァローナは言うが、静雄は気にしない。表面は人形のような弟とずっとやってきただけはある。

むしろ複雑な気分になったのはヴァローナの方だ。

理由は静雄の服装にある。寝てきたのにバーテン服？と、静雄の異様な生活環境を垣間見た気がした。だが、すぐに気を引き締めて言う。

「先輩に質問事項、聴取に来ました」
「あん？」
「構いませんか？」
（聞きたい事があるって意味だよな）
いいぞ。と安易に言いかけて、静雄は一瞬口を止めた。
ヴァローナの目は真剣そのもので、聞きたい事を聞くためだけにここまで来ているのも妙だ。長い話になりそうな確信がある。コンビニの前で立ち話は流石にマナーが悪い。
「いいけど、とりあえず場所移さねぇか？」

■■■■■

「で、聞きたい事って？」
コンビニで買った弁当を食べ終えて、デザートのプリンを手にしながら静雄が尋ねた。公園の3人掛けのベンチの両端に座っているから、真ん中がすっぽり空いている。
静雄の言葉にヴァローナは出会い頭と同じ表情を見せた。結局買ったあの雑誌は太ももの上に広げられたままだ。

そのまま表情筋を硬直させる事数秒。やがて、ヴァローナはゆっくりと切り出した。

「……午後、空手家との会話です。何故、貴方が全然弱いなのですか？　かつて私に大しても同様の発言がありました。しかし、対戦時の先輩の優位、確実です。故に先程の発言、理解不可能です。詳細な説明を求めます」

「……なに言ったっけ？」

彼女が言いたい事とは今日の午後に起きた出来事だ。

突然現れた空手家の青年が静雄に手合わせを申し込みに来た。

静雄は断ったのだが、その時の静雄の言葉が「俺は自分で強くなりてえって鍛える奴は凄いって尊敬するし、そういった意味じゃ俺なんて人間が全然弱くてよ。所詮俺なんか力が強いだけなんだよ。でも、だからこそ、俺と戦うって違うんじゃねえのかって気がするんだよ」

というものだった。

その言葉に、静雄と出会った当初の会話がフラッシュバックした。あの時は聞き間違いだと信じて疑わなかったが、どうやらそうではなかったようだ。

だが、余計に何を言っているのか分からない。

腕力があって頑強というのは強いという事ではないのか？あの空手の青年が達人級の腕を持っているのは見て分かったが、彼に乗用車を蹴り転がすほどの脚力があるとも思えない。自分に至っては赤林

にも敗れたのだ。

「そういう事か。あ～、なんて説明すりゃいいんだ……？」

勝手に悩み始めて自分の髪を手でくしゃくしゃにする静雄。その様子をヴァローナはじっと見つめていた。だから、静雄がタバコに火をつけて、次に静雄が口を開いた時、急に話を振られて驚いた。

「あのよお、ヴァローナもいろいろ訓練とか実戦を積んだから強くなった訳だろ？」

「え、いえ、部分的に肯定です。技能を身につける為の訓練は行いましたが、先輩よりは遥かに軟弱です」

「いや、そういう事言いたいんじゃねえんだけどよ。そういうのってやっぱり辛い時あるだろ？」

そう言われたヴァローナは自分の半生を思い出した。

物心ついた時には既に母は亡く、多忙な父に与えられた書籍のみを糧に生きてきた。

そうした知識を吸収する過程で出会った「人は本当に脆い生き物なのか？」という問い。

それを確かめる為に殺人技巧を学び、その実験の過程で破壊衝動が与えるままの快楽に身を委ねていた。

だが、この街で彼女は自分の弱さを思い知らされる事となる。

そして、生きる目的を失った時に静雄と再会し、目下「自分も強くなり、静雄の全てを知った上で壊す」という結論に落ち着いた。

その中で、辛い事は無かったかと言えば、辛い事しかない。
特に夢では顔も忘れたはずの死者達が蘇る。そして怨嗟に塗れた呪詛と腕に五官の全てを覆いつくされる事すらある。最近は少しずつ減ってきたが……。

「……こ、肯定に抵抗はありますが、私の力量では、鍛錬及び実戦には心身に苦痛は介在しました」
「いや、力量とか関係ないから。そうじゃなくて、それでも続けてきたんだろ？って事だよ」

だったらそれは……そうなのだろう。

「肯定です」

やっと会話が通じて、静雄はふうと煙を吐き出した。

「俺は続けられなかった。
自分に課すとか、技を覚えるとか、それ以前の問題でよ。自分を抑えるとか、信じるとか、人と繋がるとか人間として当たり前の事すらも続けられなかった。
壊れ続ける身体に自制を諦めて、自分を抑えられた事もないから自分を信じる事も出来ねえ。守ろうとしたはずの人すら俺がこの手で傷つけたんだ。去る人の手すら壊しそうで掴めねえ。それが俺の心というよりは人間としての弱さでよ。だから自分から困難にぶつかっていく人間が凄いって言うか、尊敬しているんだ」

ヴァローナは静雄の言いたい事がようやく少し分かった。だが、逆に疑問が生まれた。先程は肯定してしまったが、私がその1人に値するのだろうか？と。

「だからよ。俺は強くなりてえんだ。分かったろ？俺がお前達より全然弱いって意味が」

その言葉を聞いた瞬間、ヴァローナの中で結論が出た。

私は……静雄の言うそれに値しない。

破壊衝動のままに、殺戮を繰り返しただけだ。快楽のままにいただけだ。人との交流もなく、悪夢はいつか終わるのを信じて黙っていただけ。精神を練磨する機会なんてこの人生のどこにも無かった……！

「やはり発言の撤回を要求します。私は……貴方の発言内容に該当しません……！！」

顔に朱を浮かべて立ち上がった。目標の人間に自分が過大評価されているなんて恥辱だ。そう思うと居たたまれなくなり、思わず走っ

て逃げ出そうとした。

「おい、ヴァローナっ！」

ガシッ！

「……！」

手首を掴まれた瞬間。そこが壁と繋がっているかのように身体が動かなくなった。ヴァローナが自身の脚力で一瞬浮き上がりかけ、それが収まった時。静雄が自分のした事に気がついて慌てた。

「――――――悪い！」

「……」

慌てて手を離す静雄の声に、ヴァローナは答えるよう自分の手首を目線の高さにまで上げた。それから1回だけ小さく手首を回すと腕を下げた。

そして振り返る。

「悪かったな。おめえの辛い事も何にも知らねえのに」

「先輩の謝罪、筋違いです。短絡的思考に陥り動揺した事、こちらの非です。謝罪します」

「それは謝らなくてもいいけどよ、手首は大丈夫か？」

池袋最強の男は今、自分が何を言うかを怯えも混じった目で見つめ

ていた。
きっと、雨に打たれた子犬ならこんな表情をするんじゃないだろうか。という感じに。
こういうのをなんていうんだっけ？
そう考えている間にも静雄の瞳はどんどん不安の色を強めていく。
そんな様子に、ヴァローナは少し微笑ましく思いながら言った。
「大丈夫です。私は壊れません」

■■■■■

こいつ、さっき笑ったか？
バレないように恐る恐る横を伺うと、悩ましい曲線が目に映った。
そのまま視線を上げていくと、やがていつも通りの無表情が見える。
だが、次の瞬間にその唇が動き、静雄は慌てて顔を前に戻した。
「やはり先輩の主張する強靭な人間像と私が程遠い事は事実です」
「そ、そうか？」
「ええ。心身共に脆弱です。１度も自制心を働かせた事並びに精神面における防衛目標、存在しません。しかし、先輩が強さを目指す

というのであれば……」
「？」
「その……共に目指す事は許可出来ますか？」
え？
一瞬だけ驚いた静雄はすぐに苦笑した。
ヴァローナは部下としても後輩としても何かと初めてな人間だ。同じ目標を持つ仲間になる事が嫌な訳がない。ん、仲間って括りでも初めてか？まあいいや。
「ああ。許可するよ」
「……ありがとうございます」
胸の支えが取れたようなヴァローナに静雄も小さく笑った。胸の支えが取れたのはお互い様だ。
「俺こそ、さっきはありがとな」
「？」
「あ、いや、こっちの話」

■■■■■

「そういえばよ、絶品！スイーツ特集で『レジネッタ』って店があ

ったろ」
「……ッ！攻略予定の第一候補です。何故それを？」
「丁度良かった。トムさんにこの前無理につき合わさせちまったからよ。今度は2人で行ってみねえか？ここ」
「……望むところです」

3人掛けのベンチは座りなおしても真ん中が1人分空いたまま。
数分後。着信音が鳴った時も、この距離は変わらなかった。

幕間４　破壊衝動（後書き）

完全に暴走です。
短編にしてもいいつもりで書きました。
そして、ヴァローナはせっかく物語最初のほうに簡略化したのに、原作仕様に戻してしまいました。ただ、本筋にも重要な影響を与えるかもです。
いや～好きなんです。この位の距離感。コナンも新志にしてしまおうか少し悩みました。

第２２話　闇からの着信

「助かったぜ」
「当たり前よ。別に解毒剤供給係じゃないんだから、この位やるわ」
新一の当然の疑問に、志保は鼻を鳴らして答えた。
「なんだよそれ？それよりも、今まで何やってたんだ？」
「あら、遅れるって言わなかったかしら？」
「いや、言ったけど。いくらなんでも遅いだろ。しかも、来たばかりにしちゃ事情を知りすぎだって」
「当然でしょ。事情を知ってから来たんだし」
「だ、か、ら。それをどこで知ったんだっていうんだよ」
「ほんまや。わいも全く話題に入れんかったのに！」

事件解決直後、新一と志保と時たま平次がそんな会話が繰り広げられていた。そんな様子を一歩離れて見る園子は蘭に話しかける。
「なんかあの掛け合いって見慣れている感じしない？」
「そうかしら？」
２人に視線を送りつつ、蘭は園子に頷かなかった。園子は言い足す。
「ほら、海外に行っちゃったガキンチョとその同級生の哀ちゃんよ。

服部君との絡みもあんな感じだったし」
「それは似て当然でしょ？　だってコナン君は新一の弟子で哀ちゃんは志保さんの妹よ」
「いや、そういうんじゃなくて……」
「元気にしてるかな……」

懐かしそうに天井を見上げる蘭に園子は何も言えなくなっていた。

何かにつれ競争心を煽りたいのが、園子の発言の意図なのだ。正直そっちの方が楽しいという野次馬根性によるものだ。後は単純に疑問を突き詰めたいというのもある。江戸川コナンと工藤新一は学園祭以外、常に入れ違いで現れていた。

そして、新一が帰ってくるとコナンは海外へ行ってしまい、それは灰原哀も同様だった。だから一時期蘭がしきりに言っていた「新一＝コナン」がますます濃厚に思えてくるのに、言い出した蘭が最近そういう事を一切言わなくなった。
何か事情があるのだろうか……？

向こうでは志保が新一にようやく折れていた。

「分かったわよ。言えばいいんでしょ。
放って置いても自分で辿り着かれそうだし。
今回の事件で隠れ蓑が明らかになったシードルはＦＢＩが追っていたの。私も彼らに参加していたわ。
だから構成員にこの店の人間が含まれている事も予想はしていたし、警察無線から事件がここで起きてる事を知ったからここに来た。
後はあの男が人の作った薬で殺人して調子に乗るから、懲らしめ

ただけよ」
「ん？なんで追っている事を最初から俺に教えてくれなかったんだよ。いくらでも力を貸したのによ」
その言葉に咄嗟に何かを言いかけた志保は、開いた口をキュと結ぶと、小さな声で呟いた。
「……面倒だったのよ」
「は？」
意味の分からない志保の物言いを追及しようとした時、2階に高木が上がってきた。
「工藤君！」
手には携帯電話。円藤修二の所持品だ。
「どうしたんですか？」
「それが、さっきこの電話に着信があってね。実は斉田からなんだ。君に代わってくれと」
なんだって！？
これからとっ捕まえてやろうとしていた相手からの電話だった。新一は思わず驚く。それから音をスピーカーにして、慌ててやって来た他の捜査官が録音機材をセットするのを待ってから、保留をオフにした。
「もしもし」
「……工藤新一だな？」

電話越しのしわがれ声が訊ねた。
「ああそうだ。手前の子分はさっき捕まえたぜ。何の用だ」
「君に報告をしようと思ったのだよ」
「報告？」
斉田は自嘲するように鼻で笑った。
「ああ。君達が黒の組織を潰した時、様々な関連施設が摘発された。だが、その時に私が携わった施設に気がつかないでいてくれたね。そのお陰で私の開発はとうとう完成した。１時間後にお披露目をしてやろう。それが報告だ」
「……何を作った？」
「新型爆弾だよ。ふふふふ」
斉田の含みを持たせた言い方に新一は顔色を変えた。新型爆弾とは昭和２０年８月８日、多くの新聞が一面で報じた記事だ。英語にではＡｔｏｍ　Ｂｏｍｂとなる。
「これ以上ヒントはやらん。何も出来ず、この街が地中深くからの一撃で崩壊する姿を見るが良い」
「……そんな馬鹿な事をして何になる！」
「良い宣伝になるのだよ。池袋は先進国の都市だ。もしこの中心街を一晩で破壊する爆弾と、それを設置し、作動させる組織力を持っていれば、欲しがる勢力は世界に無数にある」
「そんな事させるかよ。爆弾とやらが完成する前にとっ捕まえてやる」
「……ふっやってみろ。１時間後だぞ」

プツン。

薄笑いの中、会話が終わった。

※※

空気が重苦しい。

ピンと張り詰められたような中、汗が流れ落ちる感覚が、やけに大きい。その位に緊迫していたのだ。無理も無かった。この街のどこかに爆弾が仕掛けられているのだ。それもただの爆弾ではない。

「ど、どういう事？」

「……」

会話の内容の全てを聞き取れなかった蘭が新一の袖を掴むが、新一は口を結んだままで反応は一切ない。

やがて、平次が恐る恐る志保に聞く。

「なあ、気になる言葉があったから聞くんやけど、奴らは何を開発しとったん？」

「……」

志保は眉間に皺を寄せ、強く目を瞑るとその総称を告げた。

「戦術核兵器（※）」

「なっなんやて……！」

覚悟していたとは言え、衝撃は大きい。

「……」

「あいつら、そんなものまだ隠してたのかよ」

「え、何？　せんじゅつかくへいきって？」

志保の言葉に、一同がそれぞれの反応を見せた。だが、志保は未だに理解出来ていない園子や蘭の姿を見て気付かされた。

この子達をここから先へ巻き込む訳にはいかない。

「くっ、高木刑事。蘭さん達を１階へ」

その声に我に返った高木が頷いた。すぐに蘭と園子を下へ連れて行く。折原臨也は一般人扱いだが、この場に残っている。

「具体的にはＳＡＤＭのようなスーツケース型核爆弾と聞いたわ。爆風が届く半径は２ｋｍ程で５００ｍ以内であればほぼ助かる見込みはない。冷戦時には開発されたけど、核抑止的には意味がなくて既に廃れた技術よ。でも最近は核抑止が通じない勢力が数多く存在しているから」

「そういう組織に売る為に開発していたのか」

「ええ。特に最近の日本ではテロリストと一括りにされる組織の中でも最も過激で資金もある連中よ。彼らの欲しいのは注目。そういった人達に戦術核兵器はとても魅力的だった。もっともアメリカとかが厳重に管理していて手は出せないけどね。

だから組織は開発したらしいのよ。あの男はそれの管理、設置、運用の指揮官として期待されていたと聞いたわ。あと１時間で解決

しないと、街が滅ぶわよ」
「せ、せやけど、手がかりはあるで！」
「ああ。池袋の中心街をもっとも効率よく破壊できる地点だ」
「絶対に止めたる！」
「ああ……！」

諦めの悪い平次と新一はこの状況で却って勢いづいた。だが、それを聞いて志保が複雑な表情を浮かべる。

「その手がかりなんだけど……」
「ん、どうした？」
「いえ、なんでもないわ。手掛かりが足りないし。折原臨也、貴方は何か知らないの？」
「さすがに核兵器というのは把握してなかったからね。まいったよ」
「そう……」
「とにかく、今は場所の特定だ。このパソコンで地図を出そう」

※※

「ああ、まいった。本当だ」
折原臨也は独り言を呟いた。だが、その口調の軽さとは裏腹に、虚空を鋭く睨みつけていた。
臨也は斉田が特殊な爆弾を開発していたのは知っている。だから、この事件を新一が見事に解決し、斉田が接触する事も想定内だった。

そして、黒の残党と工藤新一やその仲間の決戦が起こる未来を予定していた。事実その通りに進んだが、斉田が核兵器を持ち出すとは把握していなかった。

日時も想定外だった。

数日後に丁度いい時間と場所になるように調整していたのだ。それをわざわざ完成前から宣戦布告するとは思っていなかった。斉田は間違いなく暴走している。原因は恐らくあの男がずっと抱いていた執着。

そこまで執着するのか。

それは臨也にとってはあまりにアホらしく子供じみたものだったが、その執着が臨也の予想を結果的に上回った。いつもと違って妙にプライドに触った。

フフフ……だったら、どこまで執着を貫けるか試してやろうじゃない。

臨也はそう決断すると、先ほどの表情から一転して皮肉に満ちた笑みを浮かべた。

それは一見すればいつも通りの折原臨也の人間愛。だが、実際にそこにあったものは、下らない執着から池袋の街を破壊しようとする者への純粋な敵意だった。

爆弾でビル等を破壊するのはまだいい。だが、街1つ壊されちゃ、それは人間殺しだろ？

だから、人間を愛する俺は愛する人間を守る為にどんな手も使うのさ。

内心そんな事を呟きながら、取り出した携帯電話から数箇所に連絡した後、とある番号に発信する。

「もしもし？　君の友達の折原臨也だよ」

電話の向こうからは予想通りの怒鳴り声がした。早く要件を伝えないと携帯を圧し折られるだろう。

「アハハハ、怒っている所悪いけどさ。今から一時休戦してくれない？　ちょっとぶっ壊したい奴がいるんだ」

第２２話　闇からの着信（後書き）

第３部開幕。ちなみにこれからはタイトルを「コナン調」「デュララ！！アニメ調」の交互にするのを止めようと思います。

用語集

【戦術核兵器】
戦術核兵器とは戦術（通常戦闘のドンパチ等）において運用する事が目的の核兵器。戦略核兵器や戦域核兵器との違いは使用目的ですが、現在の定義では射程距離で区別されています。
その破壊力は大概にして核兵器の中では弱い一方、その最大の特徴は戦術兵器故に歩兵が単独で運用できる点にあります。
サイズも無反動砲の砲弾だったり、スーツケース型だったりと小型で持ち運びが出来るのも大きな特徴として挙げられています。
今回登場するものは核出力１ｋｔ（ＴＮＴ１，０００ｔ分）を予定しています。
核兵器と言えば大国間のみが関係ある事柄と思いがちですが、こうした兵器も存在する為、未来の選択を誤れば核が身近なものになってしまう可能性はまだあります。
ちなみにもし斉田の運用の仕方に疑問を感じた場合は、事情により見逃していただけると嬉しいです。ただし、ここに書いてある事に誤りがあればどんどん教えて下さい。私の畑はどちらかというと安全保障なので、戦略核兵器の意義や射程や配備数等はある程度調べていた時期がありますが、実際の威力や計算等は詳しくありません。だからといって安全保障を突っ込まれても逃げます。そんな感じでした。

【核抑止】

「俺の国攻めたら核兵器で報復してやるから攻めるなよ！」

「やってみな！こっちも核兵器で報復してやるぜ！」

をお互いにひたすら言い続ける結果、どっちかが手を出した瞬間にお互いを破壊する事になります。だから却ってどっちも尻込みして戦争が起きないという考え。

しかし、これを行うには？破壊力で負けない？こっちのが先に命中する？？の為に発射位置がバレない（潜水艦とかメタ●ギアとか）という自信を一方だけが付けちゃいけないから、自然とお金が掛かります。ソビエト崩壊の一因です。

ちなみに戦術核兵器が廃れた理由は、威力的に核戦争の引き金にしかならなかったからです。

しかし、これはそもそも領土をもたないテロリストにとっては「知るか！」という話なので、核抑止はテロには通用しません。

第２３話　「しかし私には数があります」（前書き）

そういえば「にじファン」トップページの人気原作名一覧で引っかからなくなりました。どうやらクロスオーバーはそうなってしまうようです。
検索が非常に面倒になったので、もしお気に入り登録やお気に入りユーザーへの登録をして頂ければ、更新がわかりやすくなるかと思いますので、宜しくお願い致します。ｍ（＿＿）ｍ

第２３話　「しかし私には数があります」

「なんだと！？」

パトカーの中で電話を受けた目暮は顔色を変えた。無理もない。この街のどこかに爆弾が仕掛けられていて、それがあと１時間で爆破するというのだ。

まもなく日付が変わると言っても、ここは池袋。今から避難させるのは不可能だ。すでに目暮にも分かりきっている内容が、高木からも指摘される。

「分かった。だが、何もしないという訳にはいかん。出来る限りは避難を行うぞ」

「ですが、まだ、どこに仕掛けられているかも分かりません！」

「落ち着け！　工藤君はどうした」

「……はい、工藤です」

その冷静な声が目暮の平静を取り戻させた。

「何か分かったのか？」

「いいえ、何も。現在、最も効果的に破壊できる場所を調べています。しかし、それにも単に死傷者を増やすのが効率か、建築物を破壊する事かは分かりません。また街のシンボルという話になればより、範囲が広がります。ひとまず可能性がある地点の１つに服部が向かっていますが、人手が足りません」

「分かった。応援を送る」

「あの……避難て、何があったんですか？」

隣に座っていたのは竜ヶ峰帝人だ。目暮の事件解決後とは思えぬ剣

幕に、目を丸くしていた。

「先ほどの話に出てきた斉田という男が街に爆弾を仕掛けたのだよ。だが、君が知ってどうする？」

目暮はそう言って振り返り、驚いた。帝人の雰囲気が一瞬前とまるで違う。まるで取り調べの時のような迫力を持った帝人だ。

ただ、１つ異なる事は口角が吊り上がっているという事。

「確かに私自身はそれを知って何も出来ない。しかし私には数があります。工藤さんと話をさせて下さい」

迫力に圧し負けた目暮は黙ったまま、携帯電話を差し出した。

「工藤さんですか？」

「君は帝人君？」

「ええ。人手不足だと聞きました。私に任せて下さい」

「……！　そうか、やはり君がダラーズの……！」

新一は推測が正しかった事を知った。帝人のダラーズに注ぐ情熱は恐ろしいものがある。新一はその背後に責任感がちらついている事を感じ、その理由から推測していたのだ。

一方の帝人も新一ならば気づかれても仕方がないと、さくさく話を進める。

「分かっているなら話は早い。こちらでダラーズに呼びかけるので工藤さん、今から送るアドレスに指定するパスワードを入力してください」

「そうか、助かる！　ひとまず、『黒ずくめの男達を今日見た人はいないか』と聞いてくれ！　連携したいから、こっちに来てもらうよう目暮警部に言って貰えないか？」
「分かりました。それと、さっきダラーズのデータを洗って気がつきましたが、その部屋には盗聴器が仕掛けられています」
「ああ。さっき処理した」
「だったら安心です。今向かいます」
会話を終えた帝人はダラーズに緊急のＭＬを送信した。
こうして池袋最大のカラーギャング「ダラーズ」は久々に共通の敵を打倒する為に動き出す。

■　■　■　■　■

とあるワゴンでの会話。
「緊急連絡？　こんな夜中にどうしたんだろう。遊馬っちどう思う？」
「いやーまったく分からないっすよ。でも、ひょっとしたらっすよ。これが実は美少女を誘拐した闇の秘密結社でって話だったら盛り上がるんすけどねえ」
「遊馬っちもベタだねー。そんなの古くない？」
「何を言ってんすか！　ベタが何故王道と言われるのか！　狩沢さんは分かってないっすよ！　王道が王道なのは王の道だからで、すなわちそこが真理だからに他ならないんす！　だから、ありきたりなボーイミーツ……」

遊馬崎ウォーカーが更に何かを言いかけた所で、門田京平が遮った。
「とりあえず嫌な予感がする。俺たちは情報はねえが、足ならあるからな。いつでも動けるようにしておけ」
「うーす」

■■■■■

「これで一気に数千は味方になったか」
目撃情報が集めやすくなった。危機的状況は依然変わらないが、その事に新一は大分肩の力が楽になった気がした。
そんな新一に臨也が更なる追い風を送る。彼は通話中の携帯電話を弄びながら、新一の正面に立った。
「やあ、工藤君」
「どうしたんですか？」
「実は俺も情報屋だけあって、知り合いは多くてね。その顧客と連絡が取れたから、君に回すよ。当然、ダラーズよりは人数は少ないけど、情報や組織力は正確だよ」
それは助かる。そんな思いで携帯電話を受け取ろうとした新一は気がついた。
折原臨也が微笑んでいる。まともな顧客な訳がない。

「ところで、その顧客って？」
「……目出井組系粟楠会」
ぎょっとする間もなく、新一は携帯電話を押し当てられた。その様子を察したのだろう。向こうの相手が話をはじめた。
「もしもし、貴方が高校生探偵の工藤新一さんですか？　お噂はかねがね。私は四木と申します。概要はそこの折原さんから伺っているんですがね。より詳しい手がかりを教えて頂こうと思いまして」
「こちらは構いませんが、よろしいのですか？」
「ええ。まあ、自衛ですよ。よその連中に我々の縄張りを塵にされちゃ堪りませんし。それに、以前貴方が解決された事件のおかげで、私共の社員が疑われずに済んだ借りがあるんですよ。なので、出来る限り尽力する構えです」
以前、新一が相対したチンピラまがいのヤクザとは違って、電話越しでも空気を押し殺すような威圧感がある。
「そ、それは恐縮です。現在私たちは、黒ずくめの格好をした集団の目撃情報を捜しています」
「……そいつはひょっとして、黒の組織じゃあないですか？」
「え、ええ。そうですけど」
「だったら、それを言ってくれないと困ります。例の残党がこの街に潜伏した所までは把握しているんですから。助け合いなんだから情報は開示しなきゃダメですよ。まあ、これは私共のお願いに過ぎませんがね」
「ええ……」
「取りあえず、貴方との連携は私が担当します。何か変化が起これば こちらの番号までご連絡を……。それでは失礼します」

電話が切られた。新一は半ば呆然としたままで、臨也に携帯電話を返した。

「は、ははは。一日でカラギャンになって、ヤクザとメル友になっちまった……」

妙な頼りがいを感じながら、新一は呟いた。

■■■■■

「っていう訳だからよ。杏里ちゃんは一旦この街から離れちゃくれないかな？」

「……ええ。でも、黒ずくめの男達ですよね……。分かった事があれば電話します」

「了解。じゃ、またな」

久しぶりの友人からの着信は、信じられない内容だった。紀田正臣はこの街のどこかに爆弾が仕掛けられているのだという。

だが、彼がそういう事を話すという事は爆弾を捜しているからなのだろう。もしかしたら、何かと緊迫した現場に顔を出すもう1人の友人も街に残っている可能性がある。

ならば、その爆弾を必ず見つけ出さないといけない。

そして、そんな母の号令を受け、息子、娘達が街に動き出す。

■■■■■

「これは、どうしたというのだ？」

街を見下ろしていた斉田は不審に思った。街の様子が変わった。

既に盗聴器は破壊されて新一達の様子は分からないが、何かしらの手を打ったのだろう。

だが、私の障害にはなるまい。

悠然と斉田は構えていたが、まだこの時斉田は気がついていなかった。彼が敵に回したのは工藤新一と警察ではなく、

この街そのものであったという事に。

第２３話　「しかし私には数があります」（後書き）

登場人物多数になりました。まだ増えます。しかし、彼らを上手くまとめる気は皆無です。思い思いにやってくださいよって感じです。

第２４話　怪物と怪物と……（前書き）

念の為にもう1度だけ前回と同じ説明をさせて頂きます。

「にじファン」トップページの人気原作名一覧で引っかからなくなりました。どうやらクロスオーバーはそうなってしまうようです。

検索が非常に面倒になったので、もしお気に入り登録やお気に入りユーザーへの登録をして頂ければ、更新がわかりやすくなるかと思いますので、宜しくお願い致します。

第２４話　怪物と怪物と……

「な、なんじゃこりゃ！」

ジーパンの刑事を思わせる言葉が響く。とある倉庫にたむろしていた若者達の１人が、携帯を片手に唖然として言った言葉だ。服装は黒のスーツに黒の帽子とサングラス。服装は渋いが声の若さから明らかに２０歳程度だと推測させる。彼らはある目的から変装していた。

「どうしたんだよ」

「ダラーズのＭＬに俺たちを捜している連中がいるぞ！」

「なんだと？」

若者達は色めきたった。

――今日、池袋で爆弾をぶっ放す――

そんなイカした連絡をボスから受け取った彼らは花火見物よろしく、見晴らしのいい倉庫に陣取って火が上がるのを待っていた。

だが、どうやらダラーズ内にそれを知って阻止しようとしている連中がいる。これはヤバイ。

「早くボスに知らせねえと」

「俺たちの情報も出ているぜ？」

まだＭＬを流されて１分も経っていない。このペースならあと数分で本命がバレるかもしれない。

「これが……ダラーズ？」

自分が所属するチームの恐ろしさを始めて知った彼らは大慌てでボスと呼ぶ人物へ連絡した。

「大変だ！」

彼は必死だったが、ボスは温度差がありすぎる声で答えた。

「なんだ。この忙しい時に」

「ダラーズで黒ずくめの男達が捜索されている。ダミーの2ヶ所がすでに割れた。その内の1ヶ所はここだ。誰か来るかも知れない！」

「来たら返り討ちにすればいいだろ。大体、ブームを過ぎたカラーギャングなんて……」

「ダラーズはただのカラギャンじゃない！」

半ばパニックになりかける若者に電話越しの人間は辟易した。

「……なんだというのだ」

「最初に話したはずだろ。ダラーズは構成員の規模も全て分からないまま膨れてるって。もしかしたら、警察や粟楠会のヤクザだっているかも知れねえし、街を歩いている誰がダラーズかも分からない！　あんただってそれを利用してるんだから知っているだろ！　あれが敵に回ったら何が起こるかなんて想像出来ないんだよ！　とにかく、俺達は場所を変えるからな！」

叩きつけるように電話を切ろうとした時、急に背筋が冷たくなった。身体が竦んで心臓の鼓動だけがどんどん早くなる。

何故だろう。

まだ輪郭しか見えていないというのに絶対的な恐怖を感じる。

「おい、人の街吹っ飛ばす爆弾作っておいてどこへ行くんだ？」

な、何故この男が？

現れたのは男女のペア。女の方は知らないが、男の方は良く知っている。何故なら、今日の昼前、このバーテン服にベンチで殴り飛ばされたからだ。

その男の名前は……。

「へ……へ、へへへへへ」

「あん？　何笑ってんだ、コラ！」

その男は勘違いで怒ると、手前に置いてあったバイクを片腕で掴むと軽々持ち上げた。若者達は腰を抜かして地面に尻餅を付く。

「へ……平和島静雄！！」

「年上には敬語を使え」

「あ……すみません！　平和島静雄さん！　い、命だけは……」

すると今度は隣の女が一歩踏み出した。月明かりに金髪が栄えて白く光る。その彼女は淡々と用件のみを言い渡した。

「助命嘆願。受け入れるかは提示する情報によります」

「へ？」

「つまり、もっとも有益な情報提供者1名。助命します。残りの全員。埋めます。早い者勝ちです」

彼女の目的はこの一言で達成された。

若者達は慈悲深い2人のおかげでいずれも命を助けられ、汚い顔面をまるごと整形する機会を得たのだった。だが静雄は目標が達成

出来たというのに、何故かより血管を浮き上がらせて携帯電話を開く。理由は電話をする相手が大嫌いだからだ。

「もしもし」

「やあ、シズちゃん。何か分かったかい？」

「ち……。連中の話だと池袋駅の副都心線の構内が怪しいらしい。じゃあな」

出来る限り短く会話を終わらせると、静雄は携帯電話を切った。

少し前、公園でヴァローナと話している時に臨也から着信が来た。応援を頼まれた時は何かの冗談かと思ったが、話を信じて仕方なく手を貸す事にしたのだ。流石に家を核で吹き飛ばされたら路頭に迷う事になるし、何よりこの街で守りたいと思える人達に出会えた。そんな奴らの事を何も知らないで街を吹っ飛ばそうとする奴を許せない。

この街を簡単にやらせはしねえぞ……！

静雄はそうした理由で臨也と休戦し、現在公園から近かったこの倉庫を襲撃したのだ。

ちなみに静雄が首を縦に振った最後の条件が「死なない程度の本気で一発ぶん殴る」だったのは内緒だ。

それはともかく、携帯電話をポケットに突っ込んだ静雄は2歩離れた所で同じ事をしていたヴァローナに視線を向ける。彼女もどこかに電話していたのだ。

「なんだって？」

「デニスからです。次の行き先は露西亜寿司に行きます」

「苦手じゃなかったのか？」
「デニスが武器を供給してくれるそうです」
「なるほど……あ、もしあったら防弾チョッキ貸してくれって言ってくれよ。鉛中毒にはなりたくねえからな」
「……疑問点の所在は理解に苦しみますが了解です。では行きましょう」

そう言ってヴァローナはヘルメットを被らないままバイクにまたがった。静雄はそれに気がつくとフルフェイスのヘルメットをもう一つ借用してヴァローナに渡す。ちなみに彼は若者達の１０個のヘルメットの中にセルティのと似た形のヘルメットを見つけて借用している。

「ほら、被らないと捕まるぞ」
「しかし……」

（もしかしたら、以前に戦った事を気付かれるかもしれない）
そう思うヴァローナは中々受け取れない。
彼の性格からして既に忘れている可能性も大きいが、それでもどこか気まずいのだ。
だが、静雄はそんな彼女の思惑とは関係なしにヘルメットを押しつける。

「それに怪我したら困るだろ」
（誰がどう困るというのだろう？）

静雄の発言は相変わらずスローン並に不明瞭だ。しかし、それ故に何を言っても受け取るまでは聞かないだろう。思わずため息をついた。

「わかりました。被りますから、しっかり掴まっててください」

静雄は一瞬「ああ」と返事をしかけたが止め、セルティを意識して首だけでコックンと深く頷いた。どうせセルティのモデルに似たヘルメットだからと思ったのだろう。特に意味はない。

そして、またヴァローナの懸案は静雄が後ろに乗る以上は起こるはずも無かった。

■　■　■　■　■

同時刻。

断続する銃声音が廃ビルに轟いた。

フルメタルジャケットの弾丸はむき出しのコンクリートに激しく当たって跳弾する。発砲しているのはいずれも同一の組織の人間で黒ずくめの男3人。対する敵は拳銃すら携帯していない1人なのだが、その1人が3人を圧倒していた。

その1人こと、セルティ・ストゥルルソンは映画っぽく物陰に隠れて不敵な笑みを漏らす。もっとも、首がない彼女にとっての笑みとはあくまで心の中の話なのだが。

（ふん、そんな闇雲に撃っても私には当たらないわよ）

なんて映画の台詞を頭に思い浮かべるくらいの余裕がある。理由は簡単だ。さっきはあんな台詞を思い浮かべていたが、実際の所は何発も当たっている。ただ、それを全て黒い影で押さえ込んでいる

から絶対に彼らの弾丸では傷つけられない。それが彼女の余裕の根拠である。だけど、あまり時間がない。
そろそろ勝負を決めなくては。
セルティはそう決めると、ふわりと物陰から飛び出した。

「く……化け物め！」

黒ずくめの男達は半ばパニックになりながら銃をフルオートにして、乱射をはじめた。弾はコンクリートに火花を散らし、跳ね返りながら飛ぶがそれも一瞬。あっという間に弾切れとなる。
そんな精神状態で撃った弾など当たらないし、当たったところで彼らにとっては時間稼ぎにしかならない。だが、もしかしたらまだ違う武器があるかも知れない。

ここが勝負点と見たセルティはタンと床を蹴ると、一瞬で風を引き裂いて男達に肉薄した。そのまま一閃。大鎌をいつ振りかぶったかも悟らせない速さで2人を叩き伏せる。一瞬の内に味方を失って慌てふためく1人を片腕で掴んで持ち上げると、コンクリートに叩きつけ、無力化した所にＰＤＡを向けた。書かれた文字は短かった。

『本命はどこだ？　言わないと……』

結論がない文章だったが、その代わりに男の身体を黒い影を覆い始めた。
男は死の予感を感じて絶叫する。
この影はただの脅しとはいえ、温厚なセルティも今日に限っては容赦がない。1時間以内に止められなければ新羅も巻き添えを食らうかも知れないのだ。一応連絡はしたが「セルティが危ない所へ行くのに僕だけ逃げられないよ」と言われてしまった。いつもなら惚気ている所だが、逆に後戻りが出来ない。まあ、当然止めるつもり

だが。

それから数秒後、あっさりと白状した男を気絶させ、セルティは新一と同じ場所にいるだろう帝人にメールをした。

「場所は池袋駅の地下４階だそうだ。今から向かう」

この街を破壊させる訳にはいかない。

■■■■■

「場所が分かった」

「どこです？」

「池袋駅、地下鉄の副都心線です。セルティさんがもう向かっています」

帝人と臨也から情報を受けた新一はその情報を信じた。何故なら情報源の２人は知り合いだったからだ。帝人を連れてきた目暮ともう１人の初老の捜査官も近くに立っている。

「分かった！じゃ今から俺も行く！」

「待って」

飛び出して行こうとする新一を志保が呼び止めた。

「何だよ」

「あなた、自分の武器を置いていくつもり？」

そう言うと足下の大きなトランクケースを開けた。そこから出てきたのは大人の身体の新一でも使えるように再設計されたターボエンジン付きスケートボード。それからキック力増強シューズに伸縮サスペンダー。対凶悪犯仕様のどこでもメタルボール射出ベルトや腕時計型麻酔銃まである。

新一は喜んだが、当然の疑問が沸く。

「お前、これどうしたんだよ。来るときは手ぶらだっただろ？」

「さあ？　昔の事は覚えてないわ。それよりも早く行かないと」

「……なんか納得いかねえけどな」

「ほら、早く行く」

「ったく、おめえも女は秘密があって綺麗になるとか言うクチかよ」

新一は当然不平たらたらだったが、志保は答えるつもりがまるでなく、時間がないのも変わりない。道具を身につけると、スケートボード片手に仕方なく出て行った。

そして、それを注意深く見届けた目暮はゆっくりと志保に近づいて囁く。

「ねえ、俺も動きたいんだけど。電話一本で助けてやったし、あいつの道具も持ってきてやっただろ？　そろそろ……」

不思議な事が起きた。

目暮の囁き声はやけに若く、新一と何も変わらないのだ。今までの目暮とは口調もまるで違う。だが、志保はそれが当たり前のように聞いている。

「どうして私に伺うのよ。確かにあなたにお願いしたのは私だけど、動きたいなら勝手に動けばいいじゃない。それに道具を持ってきたのはそこの寺井さんでしょ？」
「酷いなあ。折原と工藤が2人で話すまで隙が無かったんだよ。もともとは君が『青子さんがこの前行きたいって言ってた遊園地のチケットあげるから助けて』なんて言うからバイト気分で目暮警部に化けて警視庁に潜り込んだのにさ。来てみたら事件が起きて行かなきゃだし、行ったらまさかの工藤がいるし、容疑者も変な奴ばっかだしで散々だったんだぜ？　それなのに、律儀に目暮警部のまま捜査した俺って凄すぎない？　ほら」

目暮はそう言うと胸を張って警察手帳を見せた。志保は疑わしげに手帳を眺め、それからため息を吐く。

「あのねえ……目暮警部は容疑者に『嫌い』なんて書かないわよ」
「ユーモアだよユーモア」
「ま、暇なら気がかりな事があるから1つお願いしていいかしら？　ハートフルな泥棒さん？」

こうして、新たに参戦する男が1人。その名は黒羽快斗。

通称……『怪盗キッド』

第２４話　怪物と怪物と怪物と……（後書き）

第２４話　怪物と怪物と怪盗

いかがでしたか？

ちなみに最初のジーパンの刑事はあの超有名ドラマの人気キャラの殉職シーンを指しています。

それと「対凶悪犯仕様のどこでもメタルボール射出ベルト」というのは創作です。

今回は専門用語は無かったと思いますが、どうやら畑の関係で感覚にズレがあります。分からない事があったら聞いて下さい。出来る範囲で答えます。

それと評価、感想などもありましたら、どうぞ宜しくお願い致します。

第２５話　トラップ

スケートボードが尋常ではない速さで風を切る。だが、上に乗る新一は携帯電話を片手に会話をしていた。目の前にオブジェが見えているが、避ける様子はなく、むしろ飛び越さんとばかりに重心をぐっと沈めた。

「ダラーズのＭＬに追加。『大きなスーツケースを電車か池袋駅に置いてきてしまいました。誰か見た人はいませんか』で頼む」
「了解です」
「それ、じゃ！」

その声を自分への合図に宙を舞った新一は、駅前のロータリー中央にある大地の像を飛び越し、驚く人達に中に着地した。そのまま人混みをかき分けながら地下鉄の駅を目指す。

そして、改札も飛び越え、地下４階のホームへ辿り着いた。

だが、そこはいつも通りの駅の姿があるだけだった。新一は注意深く不審物がないかと探しまわり、階段から降りてくるセルティを見つけた。「そういえば彼女もここへ向かうと言っていた気がする」と新一は思い出す。

『何か見つかった？』
「いや、まだ……」

そう言いかけた時、急に身体を強張らせたセルティが新一の肩を掴んで半回転させた。疑問を挟む間もなく視界に映ったのは線路の奥、駅の照明が届くか届かないかの所に立つ黒服の男だった。手に

は携帯電話を持っている。
明らかに怪しい。
当然追わない訳にはいかない。運良くここには戦闘力が高いセルティもいる。新一は決断した。
「あれを追います！」
セルティにそれだけ言い放つと、線路に飛び降りて黒ずくめの男を追った。
男は新一にすぐに気がついて逃げたが、その距離はだいたい１０ｍ。すぐに線路とは違う、非常灯しかない通路に入っていく。その明かりでもはっきりと姿は捉えられたが、男は１００ｍ程走ると突然姿を消した。扉があってそこに入り込んだのだ。
どうやらこの先に敵のアジトと爆弾があるという事らしい。
「この先に敵が待ち構えています。用意はいいですか？」
その新一の言葉にセルティが首を振ると黒い影を新一に纏わせる。新一が驚く間もなく影はコートのように全身を覆った。
『これで銃弾をストップ出来るはずだ。衝撃は防げないが、その程度の備えはした方がいい』
「ありがとうございます」
新一は頷いて、そして扉を開けた。

刹那に銃弾が飛ぶ。用心して身体は死角になるようにして開けたのだが、メタルジャケットの弾は新一達の背にあるコンクリートの壁に当たって跳弾する。
慌てた新一だったが、曳痕弾のないマシンガンの弾は薄暗い中で何も見えない。ただ銃声と硝煙の臭い、そして背後で金属音が連続して聞こえるだけだ。身動きの取れない状況でセルティのコートを信じるしかなかった。結局、運が良い事に弾は彼らを逸れ、発砲した男もようやく誰の姿もない事に気がついて銃を止める。

今、13発だったよな。それに多分サブマシンガンだな。

発砲の音から銃声からある程度の目星を付けた新一は思い切って扉から顔を覗かせた。向こうにはこちらよりも照明があり、男が1人で先ほどの銃はUZIだという事が分かった。顔を覗かせた新一に気がついた男はすぐに銃を乱射したが、その時には新一は既に顔を引っ込めている。そして、冷静にキック力増強シューズのスイッチを回す。

(UZIでマガジンはハワイで見たのと同じだから装弾数は25。残り、5、4……ちっ、止めやがった)

再び顔を出して、3発を出し切らせると、ベルトのスイッチを入れながら前に飛び出す。そして膨らんだメタルボールを蹴り飛ばして男にぶつける。その強烈な威力に男は一撃でノックアウトする。だが、直後に物陰からもう1人が現れた。咄嗟に麻酔銃を構えるが、その前に男が吹き飛んだ。セルティが影で作った棒で強烈に突いたのだ。

他に物陰はなく、これで制圧したようだ。そして、目の前には大きなスーツケースがあり、大きな寝袋のようなものが括り付けられ

ている。

１度本で見た事があるスーツケース型核爆弾とそっくりだ。

それを見て、新一は眉間に皺を寄せた。

（やはりこれは……）

轟音が響いたのはその直後だった。

■　■　■　■　■

地中の轟音も地上には聞こえない。

一方のキッドは新一の身に起きた事を知るよしもなく、とあるビルに忍び込んでいた。

既に目暮警部の変装を解いて警備員の格好になっている。このビルは今日に限り１０時以降は全館メンテナンスの為に一般人はいない。だが、同時にメンテナンスとやらをしている様子もない。

（これは……何かあるかもしれないな）

もっと深く探る事にしたキッドは志保にその旨を伝えるメールを送る。もし、ここが本命だったら駅に行った新一が危ない。どうせ新一もその可能性を考慮して突っ込んだのだろうが、こんな所で死

なれるには惜しい。
ところで何故この2人が互いのメールアドレスを知っていたり、電話一本で助けに行ったりしているのだろうか？　数ヶ月前まではイメージしにくい構図だが、この背景には黒の組織が関係している。

というのも、組織が壊滅した『黒の日』。その発端となった情報を手に入れたのはキッドだったのだ。

もともと、父親の仇である「パンドラ」という組織を追っていたキッドは、ある日「N県の山奥に不老不死の研究を続けている組織がある」という話を聞きつけた。不老不死とはパンドラの最終目的である。

「その組織はパンドラに違いない」そう思ったキッドは約1ヶ月（1年が10年にも20年にも感じられた妙な時間での話であって正確には3日ほど）かけて潜入に成功し、ここがパンドラではなく黒の組織のアジトという事に気がついた。
結果として、徒労に終わったようであるが奇妙な収穫があった。黒の組織とパンドラに類似点が見て取れた事である。犯罪組織である黒の組織がどうして不老不死と関わっているのだろうか？

キッドはその理由を聞きに組織の元一員である新一達を訪ね、先ほどのように条件次第では電話一本で助けたり助けられたりはする仲になった。条件次第という所がミソだが、1人を例外としてすれば仲は悪くはない。

その例外が工藤新一なのだが、彼とはあまり親しくない。
第三者に言わせれば大変仲がよろしいようのなだが、キッドにとってはあんな堅苦しい奴は嫌だし、新一にすればあんなおちゃらけた奴は御免なのだ。まあ、それでも出会うと漫才のような掛け合いが

続く点から見て、１番的確な評価は第三者によるものなのだろう。

それはともかく、こうした背景でキッドは彼女を取り調べから解放し、その直後に事件が起きた。そして、ずっと新一の前で目暮警部を演じながら耐えてきたのだ。

（それにしては遅かったな。何やっていたんだろ）

彼が思うのは志保の事である。自由に動けるようになった時間はキッドと同じ。ただ、歩きか車の違いで何時間もの差は生まれない。

（ＦＢＩにでも応援を頼んだかな？）

キッドは彼女から「今度、再来日しているＦＢＩと協力して斉田達を叩く作戦がある」という話を聞いた事があった。内容が内容だけにキッドは反対したのだが、意志は変わらなかったのだろう。多分工藤新一は知らされていない話だ。

その事を思い出して若干気が沈んだ時、遠くのエレベーターが起動した。どうやら上から誰か降りてくるようだ。キッドは思考を切り替えると気を引き締めた。

（おっ、来たな）

さっきから監視カメラにダミーの人形を見せつけていたのだが、それの確認に来たのだろう。これまでの折原臨也や黒バイクからの情報だと下っ端を囮に使っていたようだが、その下っ端ですらサブマシンガンを持っていたようだ。もしここが本丸だったら最低でもそのくらい持っていなければおかしい。仮にＦＢＩが来た所で火力では勝負にならないだろう。

（そうなる前に敵陣に潜入して）

いざという時に助けたり混乱を起こすのが狙いである。当然命懸けになるが、やはり街が吹き飛ぶという事態は見過ごせなかったのだ。

（怪盗キッド様が人助けしたって罰は当たらねえだろ？）

そしてこの行動が大きな転機を呼ぶかもしれない。

第２５話　トラップ（後書き）

はい、タイトルがネタバレでした。でも大した事ないんで安心してください。

後半に随分と捏造設定が入りました。
キッドと新一達の関係とか、黒の組織のＮ県とか、ＦＢＩ云々ですね。ちなみにそこら辺は結構掘り下げてもいいように考えてたりします。

ひさしぶりに書く時間があったので３時間程度で一気に書きました。なので粗があったら教えて下さい。

第２６話　小休止

「えっ！？　セルティさんが入っていったんですか？」
「はい。黒いライダースーツに黄色のフルフェイスヘルメットを付けている人が地下鉄の駅を目指していました」
「そうですか。では引き続きよろしくお願いします。時間が近くなったら退避してください」
「分かりました……『母さん』」

池袋駅東口。中年男性とまだ成人になっていないと思われるメガネの少女が会話をしていた。中年男性は赤い眼を細めて少女の事を『母さん』と呼んだが、彼らが特殊な家庭を持っているという事でなければマニアックなプレイでもない。

少女が体中に隠し持つ、妖刀『罪歌』の能力の作用である。人格を持つ妖刀『罪歌』の望みは全ての人を愛する事。愛する故に触れ合いたいと思い、触れた相手に愛の証を残す。これを事象として示せば宿主（所有者）を操って人を斬らせ、斬った相手の精神を侵して『子』として操るという事になる。
要は一度斬ってしまえば支配出来るという怖い刀なのだ。先ほどの会話を解説すると、中年男性は以前『罪歌』かその『子』に斬られて『子』になっていた。それでも普段は普通の生活を送っているが、『罪歌』の宿主である少女が号令を出せば『子』として動き、今回は黒づくめの男や帝人達の情報を探して貰っていたのだ。だから中年男性は年下の少女を『母さん』と呼んでいたのだ。

言うなれば、パートタイマーのゾンビと言った所か。

この少女、園原杏里もまた宿主である以上は『罪歌』からの侵略を受け続けているが、彼女は世界を額縁越し見ている。心の自分から実社会で行動する自分を隔てて観るのだ。そうした在り方によって『罪歌』をコントロールし、現実世界のいかなる出来事も客観的に見る事が出来た。

最近は額縁を越えて彼女の心を揺るがす人――例えば竜ヶ峰帝人のような人物が現れたのだが、今回の事件がもし防げなかったら彼らの日常は二度と元には戻らない。

――今の私に出来る事をしないと……。

■■■■■

――ほんと、最近の高校生って……。

「まあ、確証はなかったんですけど、罠じゃないかって。確かに斉田が電話で漏らした条件には全て適合しますし、囮の連中はここだと白状しました。おまけに目の前には今もこうして爆弾まであります。

でも、それにしてはここの守りは脆弱です。斉田達の中には組織の実行部隊もいるのにこれではまるで子供の遊びですよ。それにもう

1つ大きな理由もあります。だから罠の可能性は最初から疑っていて、だからこそ自分で向かったんですが……」

――まったく……

彼らがいるのは小さな照明1つしかない狭い空間。広さは6畳ほどで、大きなスーツケースとオフィスデスクが3つ。入り口だった場所はバネ仕掛けで落ちてきた鉄板に塞がれ、そこに気絶したのを含めると男3人にセルティ1人がいる空気も悪く、もしセルティに呼吸をする必要があれば不快に感じていただろう。
そこに閉じ込められたセルティは新一に呆れた。
セルティと新一はあの爆弾を見つけた時、轟音とともに落ちてきた鉄の扉に閉じ込められてしまった。その扉は持ち手になる所が一切なく、おまけに上からつっかえ棒のようなもので押さえられていて、彼女の力でも持ち上がらない。
だからセルティは焦ったのだが、新一の冷静な様子に面食らった。彼らは罠に嵌って地下に閉じ込められたハズであり時間がない上に自分も行動出来ない。ここにあるスーツケースは偽物でただのプラスチック爆弾だというが、パズルでも解くような顔でテキパキと爪切りで解体してしまった。
それでも爆破物には違いないというのに、スーツケースに寄りかかって何かの機械をいじる工藤新一の様子はどうもおかしい。気味が悪いくらいに冷静すぎる。そう思ってセルティが以下のような会話をした所、冒頭の言葉が出てきたのだ。

『随分冷静だな』
「まあ、想定内でしたから」
『想定内？』

――まったく、どういう神経しているんだ。

最近巷では「ゆとりだから云々」という論調が盛んだが、少なくともセルティの知り合いにはそんな奴はいない。むしろ自分がそこまで異常じゃないと思ってしまったくらいだ。

「ま、その想定というのが、この爆弾に仕掛けがあるという続きがあったんですけど……。そこは見誤りましたね。赤外線までは用心しましたが、どうやらこの暗視カメラの映像をモニターしている誰かがスイッチを押す仕組みになっていたようですねレンズと目が合わなかったので気がつきませんでした」

――　一瞬でも見れば気付いたのか？

セルティは一瞬沸いた疑問を堪えてそれよりも聞くべき事を聞く。だが、ようやくセルティも目の前の名探偵が池袋の奇人達に引けを取らないという事は覚悟出来た。

『だが、ここからどうする？』

「携帯の電波は入っているので指示とかは辛うじて出来ます。それにあの会話が罠だった事も分かりました。それだけでも充分収穫はあったので、後はここで指示だけしながら、救助を待つしかありません。幸いにも今回は動いて頂ける人が沢山いますし、銃撃戦も織り込み済みとは折原さんも言っていました。前線に立って斉田をとっ捕まえてやろうとは思っていましたが、今はやるだけの事をやるだけです」

『そうか……』

セルティはデュラハンである。人間とは根本的に異なる能力を持

ち、人間達には不可能でも彼女には出来る事がある。それだけに出来る限りの事は協力したかったのだが、こんな地下の核シェルターみたいな所に閉じ込められてはどうしようもない。セルティはそう思ってため息をついた。

――新羅は大丈夫かな？

セルティと同居している岸谷新羅も彼も闇医者として情報網を持っている。そういう理由から「避難してくれ」という意味も込めて先ほどメールをしたが、返信は「セルティ、君を置いて俺だけが逃げる訳がないだろ」と絵文字も何もなく、少し怒ったようにも取れる文面だった。もしセルティに顔があったら今頃微笑んでいる事だろう。

殺伐な状況、閉ざされた空間ではあるが、それに耐えられる人間にとってはちょっとした休憩となったのだった。

第27話　疑惑

「いままで何していたの？」
『え、えっと……』
「このまま帰って来なくなったらどうしようって思う側の気持ちとか考えた事ないでしょ？」
『いや、そんな事は……』
「大体、小さくなった時だって蘭さんの姿を間近で見なければ考えもしなかったのだからね。それすら良く忘れてたようだけど」
『バーロー！　んな事ある訳……』
「胸に手を当ててその続きが言えるのかしら？」
『……いいえ。おっしゃるとおりです』

人の怒り方にはいくつか種類がある。
その様は火山の噴火のようだ。

例えばマウナ・ロア火山のようにすぐに怒るが大した爆発ではなく、すぐに流れるもの。これは度を過ぎれば却って熱血とか呼ばれてプラスに転じる時がある。海底火山の噴火も繰り返せば島になるようなものだ。だが、欠点としては聞く側の心からもすぐ流れていってしまうから、どれだけ怒ってもその積み重ねは結構薄かったりする。

あるいは富士山の宝永大噴火のように堪りに溜まった怒りを見境もなく大爆発させるもの。怒りの形としては一番しっくりくるし、怒る時は怒るからバランスもいいが、たまに怒りすぎて人生そのものがぶっ飛ぶ事もある。富士山も次の噴火で上がぶっ飛ぶ可能性が

あるから今の内に写真を撮っておこう。

そして昭和新山のように粘性の強い怒り。急に膨れあがる時もあったり、じっくりと溜まるなどバリエーションがあるが、どちらも怒りが表に見えないという点で共通している。割と優しい人に多いパターンだ。自分の怒りを自分で抑え込むから、心に苛立ちやら妙な敗北感やらが残って歪む。優しい故に歪むという悲しさが味噌だ。

という具合にである。

だが、どうも人間を一つの自然現象に当てはめるのは無理があるようで、火山とは関係ないもう一つの怒り方を付け加えなければならない。

それは頭から液体窒素をぶっかけたような怒りだ。

液体窒素は冷たい。そんな事は空気が読める位の歳になれば大体常識として分かる。だが、液体窒素はぶっかけられても体温で気化するから大して冷たくないのだという。見た目は明らかに冷たいはずなのに冷たくない。だから気持ち悪い。そんな感じで明らかに怒っているのは見て取れるが口調は冷静に追い詰めるような感じであるといった実態がない故の恐怖を孕んだ怒りである。

そして、何故冒頭から怒りの説明をたらたらと述べていたかと言えば、今携帯電話で会話している女性の状態がまさに怒りの類型の４つ目になるからだ。

口調はむしろ穏やかなのだが、故に怖い。

今頃電話の向こう側にいるのが「女は黙って付いてこりゃいいんだよ、バーロー」を割と地で行く工藤新一であっても萎縮させるに

は充分だった。
だが、彼の強がる態度が彼女を余計に苛立たせる原因であるとは気が付いていない。

「まあ貴方が気を利かして携帯電話を通話状態にさせたままで突入したのは良い判断だったわ。おかげでこっちは発砲音が聞こえたり、大きな物音が立て続けに起こったり、とても賑やかだったしね」
『スリルがあって良かっただろ』
「馬鹿じゃない？　今私の後ろには折原臨也とアルバイト君がいるのよ。電話越しであんな効果音立て続けに聞かせられて冷静でいられたと思うの？　そして、それを放っておく折原臨也だと思うの？」
『いいだろ、別に減るもんじゃねえんだし。それよりもさっきセルティさんに説明していた内容、おめーにも聞こえただろ？』
「……」
『おーい、聞こえたんだろ？』

携帯電話をきつく握る女性――志保はこめかみを震わせた。
たとえどのようなタイプの怒りであろうと、のれんに腕押しとなるのが一番やる気を奪われるのだ。
この男の幼馴染みを続けて好意まで抱ける蘭の気が知れない。
最も半分は人に言えた事ではないのだが。

『おーい』

繰り返される催促の声に志保はぶっきらぼうに返した。

「うるさいわね。聞こえているわよ。さっきの説明もね」
『……何怒ってるんだよ。とにかくそんな訳で俺は大丈夫だから事件が片付いたら目暮警部に頼んでこっから出してくれよ』
「わかったわ。気が向いた時に電話で聞いてみる」

『え、そこにいないのか？』
「ええ。警部は今日非番よ。奥さんと日帰りで温泉だって」
『どういう事だよ』

――は？

志保は目をパチクリさせた。今日の名探偵はどうも抜けている所が所々あるようだ。怪盗キッドとまったく関係のない事件だからなのか、それとも折原臨也とかにペースを狂わされたのだろうか。
取りあえず反応が面白そうだから素直におしえてやる事にした。
「今日一日貴方と事件を捜査していたのは……キッドよ」
『……は？』

間違いなく電話の向こうで新一が凍った。
その姿を想像して、志保は胸のつかえが取れたような爽快感を覚えると思わずにやけて言う。

「驚いた？」

更に凍る事1秒。新一は慌てて反論した。どうせ戦線離脱宣言をしたのだから多少苛めてもいいだろう。

『おっ、驚いちゃいねーけどよ……』
「へえ、そう」
『あ、あったりめーだ！　お、俺がキッドなんかに騙される訳がねえだろ！』
「だったら、そういう事にしてあげようかしら？　まさか平成のホームズとあろう人がキッドに遅れを取る訳にはいかないものね」
『う、うっせー』

「あら、どうして噛み付くのかしら？　貴方は騙されていなかったという事にしてあげたはずなのに」
『いい加減に勘弁してくれよ』
「そうね。飽きた」

この一言には流石に向こうも堪えたらしく、電話越しに唾を飲み込むような音が聞こえた。

『もう、それでいいや……そ、それでよ。そのキッドはどこに行った？そこにいないんだろ？』
「地下に罠があるなら本命は逆の所にあるんじゃないかって思ってね」
『良い勘してるぜ。俺もここがハズレだと分かってからそっちに行こうとしてたからよ』
「ま、それで閉じ込められちゃ様ないけどね」
『うっせーな。行ったのはキッドだけか？』
「さあ？　今どれくらいの人間が動いているのか、私には分からないのだから」
『そうか。あとさ。もう一つだけ聞きたい事があるんだけど』
「斉田の事かしら？」
『ああ。斉田から電話があった時よ、あの男はそれの管理、設置、運用の指揮官として期待されていたと聞いたって言ったよな』
「ええ。そうよ。あの男、『俺が開発した』とでも言った？」
『なあ、それって……』

■■■■■

「あん？」
「どうしました？」
「いや、なんか見覚えあるなって思ってよ」
「見覚え？　何がですか？」
「お前の後ろ姿」
「……！！　お、恐らく既視感による錯覚と推測します」

駆けるバイクの上。後ろから発せられた静雄の一言はヴァローナを動揺させるには充分過ぎた。
あの時、結果として5ミリしか刺さらなかったとはいえヴァローナは静雄にナイフを突き刺したのだ。
もう忘れられているかもしれないが、静雄はまだあのライダースーツの人物がヴァローナだと知らない。

「あっ！あれ、そういえば……うおっ！」

再び上げる静雄の声に動揺しきったヴァローナは驚きのあまり重心を崩し、バイクは蛇行した。急ブレーキを踏んでなんとか事なきを得たが、背筋を冷たい汗がしたたり落ちる。

「すみません」
――バレてしまった……

静雄はどんな反応をするだろうか。
それが怖くてなかなか振り向けない。
その「怖くて」が静雄の絶対的な暴力に対してのものだったのかと問われると、何故「怖くて」と感じたのか、ヴァローナは自分自身に戸惑ったのだが。

詰まるところ、静雄の反応はそこらへんの心情に一切関係なかったのだ。指を明後日の方向に向けて疑問を投げかけた。

「なあ、あれってよ。泥棒のマークじゃなかったか？」

「え？」

「だからよ、ビルの根本に浮かんでいるやつ」

動揺してピッチを上げる鼓動のまま、言われるがままに視線を辿ると、そこにあったのは怪盗キッドのマークをぶら下げた黒いアドバルーンだった。

適当に描かれたようで妙に愛嬌のある姿は間違いない。

だが、それがどうして、ビルのそれも低い位置にあるのだろうか。

よく見るとアドバルーンは空調の室外機の近くで固定されているようだ。目立ちたがりの怪盗にしてみればやけに微妙な位置だ。

「なんか匂わねえか？」

当然だ。静雄はその間の経緯とかあまり知らなくて、野生の勘で言っているのだろうが、怪しすぎる。

つまりはそういう事なのだろう。

それにもし先程の連中が真実を知らされておらず、このビルこそが本命ならこの先にいるのは精鋭で固められているに違いない。

先程まで動揺していた心が彼らとの戦いを想像して今度は昂ぶる。

ヴァローナの結論は固まった。

「取りあえず乗り込みましょう」

第２７話　疑惑（後書き）

読んで頂きありがとうございました。

噴火の件がわかりにくかった人はごめんなさい。しばらく間が空いて説明力がいままで以上に酷くなったと思って下さい。

一応解説すると、確か高校の地学で出てきた盾状火山と成層火山と溶岩円頂丘ですね。

昔、授業中に先生がこういう話をしたのが割と印象にあったので液体窒素を足して出してみました。受け売りでごめんなさい。私の９割は知ったかぶりと受け売りで出来ています。

第２８話　断層破砕帯Ａ（前書き）

お久しぶりです。
タイトルの意味は「一枚岩とはほど遠い人達」という感じです。

第２８話　断層破砕帯Ａ

数分後。

「……誰もいねえのか。潰し殺す気満々だったのによぉ」

乗り込もうと言った超高層ビルの一階入り口。入り口が無数にあるこのビルの入り口を守りきるのは困難だから、敵は最初から諦めたのだろう。まるで人の気配がない。

ガラス扉から奥を覗いていた静雄は何もない様子にそのまま扉を破壊しようとして、後ろからヴァローナに声を掛けられた。

「強行突破の中止を要求、侵入地点の変更を提案します」

「あん、どうしたんだ……うおっ！」

そう言いかけた静雄は振り返って驚いた。

ヴァローナの顔に大きな双眼鏡のような物が括り付けられていたのだ。

キュイキュイと奇妙な作動音を立てる青いレンズが静雄を正面から見据えている。

もし主人公が段ボール愛好者のアクションゲームをやった事があれば赤外線ゴーグルだと気が付いただろうが、それでもライダースーツの金髪美女が赤外線ゴーグルで顔上半分を覆い隠している姿は誰が見たって違和感の塊だ。正確には違和感というよりも絵図が残念でならない。

一応正常な美的感覚を持ち合わせている静雄もドン引きした。

「何だそりゃ」

「ノクトビジョン。物体が発する赤外線を感知、可視光へ変換します。目視が困難な暗闇での視界確保に最適です。また、赤外線センサー等の発見にも有効です」

対するヴァローナは外見以外、至っていつも通りである。静雄は却って自分一人取り乱すのは失礼だという妙な観念に囚われた。

「……お、おう。すげえもん持ってるんだな」

「ゴーグルで確認した結果、広範囲にトラップが仕掛けられていました」

「トラップって何だ？」

「配置は死角により確認、困難です。しかし、爆発物と推測します」

「殺す気って事だな……覚えとくぞ。で、ここがダメだったらよ、どこから行く？」

「赤外線センサーの隙を捜索し、窓ガラスを破壊後侵入します。同行を要請します」

いかついゴーグルを付けた金髪美女とバーテンダーという奇妙な二人は、いつもと違って明かりのないビルを建物に沿って周り、やがて地下1階に目的の場所を見つけると道具を器用に使って窓を器用に開き、中へ侵入した。そのビルは見慣れているはずだったが、明かり一つないという状況で、また指示されるままに見えない線を避けて進むビル内はいつもとまるで異なる印象を受ける。

最初は慣れない動きや、煩わしさに苛々していた静雄だったが、その怒りが爆発する前にエレベーターの前にまで来た。

ヴァローナが警戒等で離れているが、少なくてもエレベーターの周りには人がいない。

ならばとエレベーターのボタンを押そうとした時、ボタンがあるべき場所に妙な機器が括りつけられている事に気が付いた。
大きさはティッシュ箱程度で、1から9までを入力するボタンが付いている。

「あん？」

左右を見渡すと、全てのボタンに取り付けられている。
明らかに番号を入力しないとボタンを押させないようにしている仕組みだ。
そして、そこに貼られている「－273」と書かれた名刺。
誰かが残していったこの数字を手がかりに正確な番号を当てなければエレベーターは動かせないという仕組みになっている。これにより、入り口のトラップに続く第2の足留めを侵入者は強いられる事になる。

筈だったのだが――

「なんだこりゃ」

明かりもつけていない状況で、静雄はその邪魔でしかない蓋は無造作に掴み――

「先輩？　所在、不確定です。応答を要請します」

もし、ヴァローナが先に気が付いていれば、これもトラップだったのだと分かったのだろうが――

バガャ。

「お。取れた」

ピ……

結果として、平和島静雄は引き千切った。

もっとも『ピ』静雄をとしては引き千切『ピ』るというよりは冷蔵庫の扉『ピ』を開ける程度の感覚だったのだ『ピ』が、当然この手の装置は誤入『ピ』力すると、セットされた爆弾が『ピ』起爆するというのがセオリーな訳であり、『ピ』それを力づくで引き千切ったのであれば……。

「なんだ？　うるせえ音出しやがって」

手に持った機械からではない。壁や床の様々な場所から電子音が聞こえる。それは輪唱しながら徐々に音と音の間隔を狭めていく。

この事態の元凶でありながら、機械に対してキレそうになる静雄。そんな時、その怒りを一気に沸騰させる、とある人物の声が部屋に響いた。

『シズちゃん……多分、そこら中が爆発するんじゃないかな？』

「ああ？　ノミ蟲の野郎どこにいやがる！」

『いや、携帯付けっぱなしにしてるだけだけど。あのさあ、噴水のある吹き抜けは安全なようだから、早く逃げた方がいいよ』

「うるせえ！　てめえの指図なんか受けるか！」

『まあ、俺としてもそっちの方が都合は良いんだどさ。ロシア人の

娘は多分死ぬよ』
「いざやぁ……！」
『じゃ、頑張って』
「ざっけんなあ！」

静雄は思わず手にしたものを地面に叩きつけた。ここにはいない臨也への怒りを込めた一撃はドラム缶にダンプを突っ込ませたような爆音と共に装置が粉砕したが、音が止む気配はない。

あの言葉に嘘はないだろう。安全だと言った場所も嘘ではないだろう。

しかし、ここで臨也の言った通りに動けばそれは膝を屈するのと大差がない。

そんな事、出来る訳が……。

そこへ異変に気が付いたヴァローナが血相を変えて飛び込んできた。

「先輩！？」

――ロシア人の娘は多分死ぬよ――

天秤が傾くのは一瞬だった。

「逃げるぞ！」

ヴァローナの手首を掴むと、噴水に向けて走りだす。

「え？　……っ！」

ヴァローナは静雄の内面の葛藤など知る由もなく困惑した。
というのも今の自分の状況である。突然辺りが電子音に包まれ、静雄を捜したら、向こうから突っ込んできた。そうしたら、今度は走る静雄の後ろで、自分が飛んでいる。高速を走るトラックの屋根に乗っているかのような風圧と光景が広がっている。
どうやら、静雄に手首を捕まれて引っ張られているようだ。
周囲の電子音から想像するに、静雄は何かのトラップに引っかかったのだろう。そして、安全地帯に逃げるべく、自分の手を引いて走っている。

けれど……それがどうして、こんな……鯉のぼり？

自動車を蹴り転がした男だ。人の手を本気で引いたらこうなるのだろうとはヴァローナにも想像できる。だが、想像出来ようが、納得出来ようが、即座に受け入れられるものでは到底ない。
全身をくまなく死の予感が包む。もし、仮に静雄が何かの拍子に手を放したら即座に人身事故になるだろう。

だが、この高速鯉のぼりは唐突に終わる。

「ぬぅおりゃあああ！」

電子音の間隔が一切なくなった瞬間。ヴァローナをなびかせて走る静雄は噴水のある吹き抜けにまで辿り着くと、何を思ったか、ヴァローナを噴水目掛けて投げ飛ばしたのだ。

――は？

最初は何が起きたのかさっぱり分からなかった。
だが、空中で身体が翻り、静雄の姿が見えた時、ようやく自分が投げられた事に気が付いた。

――無茶な！

爆発から守ろうとしたのだという意図は感謝するが、これはこれで命の危機である事は間違いない。

――信頼したのか、それとも考えなしだったのか……。

答えは出ないが、その間にも地面は迫る。ヴァローナは空中で身体を捻って体勢を戻すと、投擲された勢いを消さないまま、受け身を取って地面を転がり伏せた。

刹那、至る所に設置された爆薬が炸裂する。

その爆音は脳髄を麻痺させる地響きのようで、ビルの外にまで轟いた。

まだ、安全地帯まで辿り着いていなかった静雄はその場に伏せようとしたが、間に合わず、爆風にたたらを踏む。

常識的に考えて、とてもたたらを踏んで済むような爆風ではない。粉塵が収まった頃には、崩落こそしなかったものの、噴水の外は瓦

礫や店の陳列物などが転がっていた。噴水の中まで飛び込んだ破片も少なくなく、爆風を受けた静雄の背中は煤塗れになり、ベストがボロボロになっている。
噴水の近くで立ち上がったヴァローナも身体に付いた埃を払っている。

「大丈夫だったか？」
「何についての疑問か不明瞭です。先程の爆風に対する被害ならば皆無です。ただし、先程の鯉のぼりでの精神的被害及び、投擲による肉体的被害ならば軽微に存在すると補足します」
「鯉のぼり？」
「いえ……命拾いでした。感謝感激です」

無事だと知って静雄はほっとした。
もっとも、今回は二人の無事と引き替えにあのノミ蟲に助けられるという人生最大の屈辱を味わったのだが。
そこに考えが至った瞬間、彼に関するある疑惑が鎌首を持ち上げた。

――にしても、ノミ蟲野郎。
――どうしてここが安全だと分かっていやがった……？

■■■■■

「……ちっ」

折原臨也は煉瓦のような笑みを貼り付けながら舌打ちをした。荷物を取りに戻った無人のオフィスに、舌打ちの音がやけに響く。
顔は隠せても嫌悪、憎悪、苛立ち、その他諸々の感情を隠しきれなかったのだ。
とはいえ二人が無傷だと分かった瞬間に既に電話を一度切っている。この舌打ちは決して誰にも聞こえない。もともと感情を隠す必要のある相手などこの空間には一人しかいないのだが。

あの静雄の行動は予想外と認めるに充分だった。

――まさか、あのシズちゃんが、俺の助言を受け入れてまで人を守る事を優先するなんて。

臨也があの場面で嘘を言わなかったのは情報屋としての信条だが、わざわざ安全な場所まで言う必要は無かった。
わざわざ伝えたのは、静雄が自分の言う事は絶対に聞かないと分かりきっていたからだ。

――それなのに

「まさか、あんな行動を取るとはねえ」

理屈も何も通じない理不尽と暴力の塊。
その理不尽と暴力を行使し、己の感情を霧散させる。
それが平和島静雄だった。

だが、その静雄は少しずつ変化を見せている。以前、臨也に嵌められ、粟楠会に追われる事となった際。静雄は一切の反撃をする事なく逃げに徹した。

その時から臨也は思っていた。
日に日に人間離れしていく君が、内面だけ人間的に成長してどうするのさ。
ただ、暴力をまき散らすような存在が、自分から勝手に鎖で繋がれるような真似など退化でしかないじゃないか。
と。

だから先程のはプレゼントのつもりだったのだ。
もし、あの場で静雄が真偽を疑う等で葛藤し、時間切れを迎えた場合。もしくは助言を無視して見当違いの方角へ走り、違うトラップを作動させた場合。また、あるいはヒーロー気取りでその場でヴァローナを庇って床に伏せた場合。
それぞれ爆薬が床下や壁から炸裂する。
ちなみに3つ目が臨也としては一番選んで欲しかった、「庇ったつもりが却って床からの直撃を喰らわすパターン」となる。

直撃を受けた所で静雄は死ぬ可能性は低かっただろう。
だが、あの静雄の後輩は無事では済まない。
誰かのせいではなく、力を抑えきれなかったからでもなく、ただ己の判断で人を傷つける。
その事実は彼が幼い頃に一度至った結論を突きつける。
――半端な人間性など無に劣る。
――神話、説話、童話。化物が人になりたがる話は数多あれどい

ずれも結末は破滅。所詮化物は化物である事を逃れられない。
――果たしてそんな自分を認めてしまって、本当に良かったのだろうか。

そして、それを突きつけるのはあくまで臨也ではなく、静雄自身だ。
静雄が無意味な鎖を引き千切るチャンスになる。少なくとも楔は打ち込めただろう。

だが、結果的に静雄はそれ以外の選択肢を選んだ。

更に間の悪い事に、その結果としてとても腹立たしい事になった。
それはつまり――

「俺がシズちゃんを助けたって事になっちゃったじゃないか」

気持ち悪い。
反吐が出る。

だが、次の瞬間には臨也は全く別の表情を顔に乗せていた。
夕立の前に街を漂う生温い風のような、そんな笑みを。そして陽気に呟く。

「まあ、もっとも君が理不尽の塊でいてくれた方が、この事件を有利に進められたってだけなんだけどね。今の所は君に貸しを付けたって事にしてあげるよ。こんな機会滅多にないからレアだと思っておくさ」

そして、再び臨也の笑顔が変わる。ようやく笑顔らしい、だが歳不相応な程に好奇心に満ちあふれた笑顔。理科の授業で初めて鼈甲

飴を作る小学生のような笑顔だった。

「さあて。今日は実験や観察しがいのある連中ばかりで忙しくなるし。閉じ込められた彼らが解放される前に動かないとね」

取り出したのは漆黒のトランクケースのみ。中には武器等は入っていない。服装もそのままだ。

これから戦場に向かうにしては随分と軽装だが、どちらかの勢力から銃口を向けられる位置に立つ事はない。だからと言って必ずしも安全という訳では到底ないのだが、臨也はボディーアーマーやヘルメットなどで戦場の空気が阻害されるのを嫌った。古来より戦争は人類史に欠かせない。その現場の空気を肌で感じたいと思ったのだ。

もし、そこに意味を求められたら、彼はやはりこう答えるのだろう。

「俺は人間が好きだからさ」と。

だからこそ。

一時的にどちらかの勢力に組みした所で、それは彼の好奇心を禁忌から遠ざける妨げる鎖とはならない。血と硝煙の中に立つ様々な人間を観る為ならば何だってするのだ。そもそも今日、この日にここで、このような戦いになるように仕向けたのは他でもない臨也だ。

「もしもし、情報屋の折原臨也です。ええ、貴方の嫌いな犬たちはそちらへ向けて動いています……はい。ヘリポートを狙うなら今が好機でしょう……。

私がですか？

一介の情報屋に名探偵を池袋まで来させる権限なんてありませんよ。彼は偶然買い物にでも来ていたのではないですか？　もともと行く

先々で事件に遭う人物のようですから……いえ、そう言われましても村尾があの時間に決行すると事前に聞いていた訳でもありませんし……ええ。分かって頂ければ幸いです。また動きがあれば連絡しますので、それでは」

「やあ。え？　今俺がどこにいるかって？　そうだよ。あそこからは離れているよ。これから君達を助けに行こうかなとも思ってね……そっか、出られたんだ。それは良かった。だったら急いだ方がいいよ。もうあまり時間がない。それじゃ、また何かあったら連絡するよ。じゃあね」

――俺の想像通りに動く奴もいれば、そうじゃない奴もいる。

――人間ってなんて面白いんだろう。

理不尽を嫌い、理不尽を超越する不条理な理屈を行使し、己の心を満たす。

それが折原臨也の在り方である。

第２８話　断層破砕帯Ａ（後書き）

この二人は個別に好きです。一応タッグっぽくなったので、その様子を書いてみました。二人が利害一致しても良くてこんな所だろうなぁ。と。

久々な投稿にも関わらず対して意味のない内容ですみませんでした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3537m/

名探偵コナン vs デュララララ!!

2011年3月5日22時40分発行